

八木哲学の生体解剖からロクリアン哲学へ

友であり敵である哲学者：八木雄二との内的ドッキングにより

死の解明へと向かったロクリアン物語

作曲家 ロクリアン正岡

まえがき

この夏、私は現存の哲学者の著作を発見した。そのタイトル、キャッチコピー、裏表紙の要約文などの概念に入り込まれ、我が脳裏は疼き、それは間もなくして蠢くエネルギー体のようなものになって行き、しばらくして私に訓戒を垂れるようになった。

「汝の味方を徹底的に憎み、汝の敵を徹底的に愛せよ！」

こんな体験は初めてである。

私も人間であるから普段そのような捻じれた生き方はしていない。だが、丁寧に読み進めば読み進むほど、著者の考えは私の思考の背中に張り付くようになり、そのうち、“我々”の思考はメビウスの輪の上を走る思考運動体のようなものになって行ったのだ。

だが、それに伴って一種の知的快感は強まり、著者である八木雄二（以下、敬称略）と私LM（ロクリアン正岡の略）の考え方との共通性は明らかな中、差異部分の方が螺旋的に悶絶しながらも、我らを、いや、とりあえず私一人を存在の懐へと導いていった。

私は作曲に於いては、メビウスの輪的な思考運動でメロディーの紡ぎ出しを行って来た。そして、音階、ロクリアンが、はたまた私の中で音楽機構と化したロクリアン成るものがメビウス（の輪的）構造を有していることは自覚していた。

だが、今回のような概念活動でそれを行ったのは初めてである。

今まで作曲活動を裏から支えてきたものが今回初めて表になった、ということもできよう。すると、少なくとも私の場合、音楽と概念との間にもメビウスの裏表のような関係があるのかもしれない。実を言えば、今回の概念による仕事は、今後の作曲の仕事の向上のために行ったという意識的部分もあった。

今、こうしてホームページ上に掲載するにあたって、「生を受けたからには世の中のために成るよう、自己を向上させる！」との念を強く持つ霊的な方々に広く読まれることを切に願うものである。

なお、LMの批判文から総括文のいたるところに、作曲家ならではの言及も認められよう。これは、音楽の知識をお持ちの方（つまり、私の仲間）にはより深く分って頂けるように、またそれ以外の方には、堅苦しい概念思考以外の柔軟なる「音楽思考法」なるものを自分のものとしていただけるよう、配慮したものである。

わきいずる しこうのいずみ ろくりあん

八木雄二！　　と言えは歴とした哲学者である。東京港グリーンボランティア代表理事。
最近、そのライフワークだという生態系三部作(2004年秋発刊、合計800ページからなる大部のもの)を読んだが、私にとって、これほど挑発的な男はいない。面白いので、早速、長目になるが引用してみよう。

第三冊目(第3部)の最後に彼は次のように記している。

殺さない、盗まない、その他、不正なことを行わないならば、その人の周り
で文明は滅びるのである。なぜなら文明は不正のうえにしか成り立たないから
である。そしてそこに実現する人間の生は、愛に満ちて、自由で、美しいもの
になるはずである。なぜなら文明が排除され完全に生命の論理が通るなら、不
正が完全に排除されるからである。

「あとがき」のはじめでは-

ようやく新しい時代を切り拓くための哲学の試みを公にすることが出来た。

このあと、私自身に言うべきことは何も残っていない。ただ、読者のなかには、この試みが西洋哲学のほとんどすべてと、さらに仏教哲学の高峰までも射程に収めていることに気づいて、わたしが見せる自信の由来を知りたいと思う方もおられるだろう。またあまりにも高飛車ともとれる偉大な哲学者たちに対する私の態度に憤慨されて、そんな奴の鼻をへし折ってやろうと、意気込む人も出てくるかもしれない。

「あとがき」の後の方では-

わたしの場合、幸運にもこの三部作で「体系」を世に示すことが出来た。ソクラテスにはできなかった学の体系を築くことができたのである。ソクラテスは、裁判にかけられ、世間に対する弁明が不成功に終わって、ただの一日で処刑されてしまったが、わたしは学の体系を作ることができたので、ソクラテスの二の舞にはならずすむ。じっさいソクラテスは自分の仕事をわかってもらえなかったために、死刑になってしまったのである。だからわたしの幸運は大したものなのである。ここに示した体系が持つ根源性は、世間の常識を超えているから、世間がこれを無価値と判定して捨て去るためには、おそらく専門家を総動員する必要がある。世間の人、わたしが世間知らずに虚勢を張っても多勢に無勢であるから、私に勝機はないと思うかもしれない。しかしすでにソクラテスが明確にしてくれているように、真偽は多数決では決められないので、心配いらぬのである。

さて、ここまではほんの入り口で、これからが本番です。

内容を直接、扱ってゆくために、具体性を持たせなければならない。引用は膨大な数に及びますが、お許しください。これが八木[以下、敬称略]やLMや、何よりも読者のため、世間、社会の為だと信じるからです。

八木雄二氏の「生態系三部作」は、人類文明の在り方を根本的に否定し、人類が本来の取るべき行き方「自然との共生」を提唱する他の例を見ない著作である。その主張を支えるものは、現状への鋭い目、自然への愛、広範な知識、哲学的思考能力、自然と共生しつつその管理を続けてきた彼自身の経験などであり、全人格を掛けて主張を貫こうとしている気持ちが直截に伝わってくる。

以下、引用だけでも大部となるが、私は原書の雰囲気できるだけ損なわないように、ひらがなと漢字の使い分けに至るまで、氏の流儀に従った[ただし、①引用部分について、読書の効率を考え、特に注意を喚起したい個所に下線、太字化を施した。原書にはそれらは一切ない。②原書では表紙、裏表紙、そして「著者からのメッセージ」(引用番号4)以外はすべて縦書きである]。

いずれにしても、本格的な論考でありながらほかの人間では到底できない大胆な主張であり、私はできるだけ多くの方々に原書を手に取っていただきたい。

(出版社編集部にお問い合わせしたところ、第一刷の分がまだ残っているという。)

知性闊達な方々であれば、著者と思考を共にしてみるだけの価値は十分にあると思うからだ。ただ、そうはいかないケースもあるだろうから、私のホームページの本企画部分を読んでいただくだけでも、著者の論考の前提、根拠、主張の肝心な部分は全体の流れごとつかんでいただけるように、引用量は相当のものとなった。一般の読者の方々、出版社の方々、そして誰よりも八木ご本人のご理解を賜れば幸いである。

引用文は以下、全体で54項目にも及ぶが、逐一、私LMのコメントをつけ、最後に八木雄二著「生態系三部作」全体に対する、ロクリアン正岡の「総括『ロクリアン哲学へ』」(=総括的批評と主張)と参考資料としての拙文を用意した。

私としては、八木の論考を、現代においては珍しいほどの気宇壮大な思想のやり取りの場へと引っ張り出したいのである。だが、いちばん引っ張り出したいのは、読者諸氏の霊性であり、耳にしたいのは、その言霊の生々しい声である。何しろ、これは存在論の闘技場なのだ。賢(さか)しらでうわっすべりなおしゃべりを嫌うのは、何も八木ばかりではあるまい。

第一冊 (=第一部)

八木雄二著

生態系存在論序説

自然のふところで誕生した人間と文明の相克

まえがき

序章 自然と対立する文明の論理

[LM注：以下、右側のは引用番号]

第Ⅰ章 自然の中の人間

- 一 進化論によって人間論を書き換える 5)
- 二 生命の誕生に見いだされる生命の本質 6)
- 三 光合成が切り開いた世界
- 四 種の多様化と生態系の成立
- 五 植物と動物の関係 7)
- 六 恐竜の絶滅 8)
- 七 人類の誕生 9)
- 八 植物の知恵
- 九 人間の知恵
- 十 人間が自己意識を持つ理由 10) 11) 12)

第Ⅱ章 人間の経済活動

- 一 生命理解の喪失 13)
- 二 所有意識の発生
- 三 使用価値と交換価値
- 四 使用価値と質の高さ
- 五 使用価値の疎外
- 六 貨幣のはたらき
- 七 期待値と交換価値
- 八 貨幣の蓄蔵
- 九 利益の還元
- 十 利子所得について

第Ⅲ章 文明の中の人間

- 一 文明のはじまり
- 二 市場のはじまり 14)
- 三 「物体化」する食物 15)

四 思想のはじまり	16)
五 土と祭礼	
六 郊外地という文化の場	
七 商業行為と宗教	
八 科学の変貌	17) 18) 19) 20) 21) 22)

第IV章 文明社会がもつ誤った考え

一 価値観の変貌	
二 生死の価値観	23) 24)
三 文明以前の人間の生死	
四 文明の思想	
五 文明社会の転換	

あとがき

索引

第二冊 (= 第二部)

八木雄二著

生態系存在論の構築

「ある」と言われるべき「ある」の地平を見いだす

まえがき

序章 いのちの視点からの「ある」

一 真実の「ある」を見いだすこと	25) 26)
二 生命が世界を視ている	
三 「ある」と発話すること	
四 真実の存在論を見いだす道	27)
五 西洋における存在論の歴史	
六 原因論ではない存在論	28)
七 「自己」という「原因存在」の位置	
八 人間を支える	
九 アリストテレスの範疇論との対比	
十 経験される「存在」——現象学との対比	29)
十一 「自然」という女神が教える真正の存在論	

第Ⅰ章 人間とは何かという視点

- 一 存在論のための人間論 30) 31)
- 二 競争原理による進化説批判
- 三 進化の事実に見いだされる生命の本質
- 四 共生による進化 32) 33) 34)
- 五 人類の進化と人類の本質
- 六 人間の未熟性と文明
- 七 自然本来の人間を基準として「ある」もの 35) 36) 37)
- 八 生態系存在論の「質料形相論」
- 九 生命が行うエネルギー使用
- 十 個体について 38)

第Ⅱ章 パルメニデスの詩とアリストテレス形而上学の検討

- 一 文明と生態系の善美との矛盾
- 二 存在論と倫理学
- 三 パルメニデスの詩、第一断片 39)
- 四 パルメニデスの詩、第二・第三断片 40) 41)
- 五 吟味を終えたのちの探究 42)
- 六 パルメニデスの詩、第四から第八断片 43)
- 七 パルメニデス以降 44)
- 八 アリストテレスにおける「知恵」の検討
- 九 アリストテレスにおける四原因の検討
- 十 アリストテレスにおける実体の検討

第Ⅲ章 残されていた問題

- 一 パルメニデスの存在論と生態系存在論 45)
- 二 アリストテレスの存在論と生態系存在論 46)
- 三 近代の自己意識に基づく存在論の否定 47)
- 四 自律による自己意識と個性について 48) 49)
- 五 日本語の文法について
- 六 生態学研究との関係
- 七 カント哲学の構想について
- 八 アプリオリなものの要請
- 九 生態系存在論における正しい認識と行動

あとがき
索引

第三冊
八木雄二著

生態系倫理学の構築

生きることの「あるべき」かたち

まえがき

序章 関係性の哲学

- 一 生態系存在論の正当性
- 二 関係と善美
- 三 関係と実体

第Ⅰ章 認識と行為

- 一 存在論と彼岸世界の認識 50)
- 二 宗教的認識・キリスト教神学から
- 三 宗教的認識・仏教
- 四 永遠と今 51) 52)

第Ⅱ章 美 徳

序 美徳の数え上げ

- 一 自 由
 - 「自由」の多義性
 - 二種類の自由
 - 人間のための自由
 - 中立的（政治的）自由
 - 真の自由と生態系の善美
- 二 思慮ないし知恵
 - 人間本来の知恵の力
 - 主体を含む認識
 - 信仰という知恵 53)
 - 国家を超える知恵

植物と神	54)
科学の真理性	
宗教心	
三 正 義	
美德の重複	
労苦に対する報い	
行動責任	
真の正義	
宗教的正義	
四 節 度	
己の限界を知ること	
習慣としての節度	
五 勇 気	
勇氣と思慮	
死を知らないこと	
恥という感情	
道徳感情の弱み	
六 食と哀れみ	
「食」がもつ矛盾	
聖なる悲しみ	
文明社会の道徳	
七 愛	
共生することと愛すること	
思慮のない愛	
美德となる愛	(既出)
あとがき	(既出)
索 引	

私は、全三冊、全三部を精読してからこの批判書を企画した。

ただし、以下執筆するにあたっては、読者諸氏とともに歩むべく、表紙表裏の文章以外、引用箇所までしか読んでないという前提で批判を下すよう努力した。

1) 第1冊＝第一部、裏表紙より全文

現代文明は自然環境を大規模に破壊しながら発展している。この現実をどのように見るべきか、著者は文明以前の人類の進化を射程に収め、次のように明

快に語る。

地球上の生命誕生以来、生態系における《食》を媒介とする生命循環の基盤が作られ、生けるものたちの共生の場である地球環境が豊かに育まれてきた。まず、葉緑素の発生を機に植物の進化が生じ、それにより形成された植物体系に呼応してパラレルに動物が進化し、動植物の多様な種が共存する生態系が形成された。その中で人間は高度に複雑化した植生態系を管理する役割を担わされてこの世に誕生した。人類はすべての植物の生育環境に役立つ振る舞いを期待されていたが、狩猟採取から農耕生活をはじめ特定の植物を栽培して他の植物を排除する道を選んだ。その時から土地所有が生じ、市場と都市が形成され、文明と文化が発展して今日の巨大文明の出現により地球環境に決定的ダメージを与えた。存在論的考察と新しい倫理学へと展開する全三作からなる本シリーズは、30年に及ぶ環境保護活動と哲学研究の経験を踏まえ、環境問題を根本から問うための世界的にも全く新しい視点を提供する著者のライフワークである。

LM コメント

どうして、人間の誕生や存在の理由が、そもそも「ある」と言えるのか？

また、その的を「食生態系の管理」に絞ることが著者ハ木には可能なのか。実際のところそれらの見方は正しいか？

「善美である(あるいは)良い/好い」という述語の主語に当たるものを求める志向が著者にもともとあり、それがやはりなんといっても自分自身がそれであるところの人間/人類である、とするのは、実は初めから譲れない著者の信念のようなものであったのではなかろうか？

2) (第二冊＝第二部、裏表紙より後半全文)

本書ではヨーロッパにおける存在論の歴史を批判的に分析、現代の科学技術を支える文明と文化の根底に潜む問題を抽出する。著者はその克服のために最古の存在論であるパルメニデスとアリストテレスの存在論、さらにはカントの啓蒙哲学を吟味し、それらとの対比によって生命の視点から構築された生態系存在論の意味を明らかにした。これにより自然本来の人間にとって「ある」とは何かという根源的な問いへの答えが示されるとともに、近代世界に大きな影響を与えてきた西洋文明との新たな対話の場が開かれた。

LM コメント

「生命の視点から構築された生態系存在論」とか「自然本来の人間」とあるが、人は生

命体(生物)でしかないのか？

読んでいて、生命の観点からはどうしても外されてしまう人間の部分が気になる。ハ木が見立てる「生命人間」「生態系人間」(LM命名)などは土台かつ所詮、抽象的な仮構物でしかなく、その陰に置かれた(ハ木思考により)人間から捨象されてしまったものが哀れでならない。

3) (第三冊＝第三部、裏表紙より後半全文)

本書では、真実の「ある」を受け止めた人間にとって、真に善美なものとは何かを根底から問い直す。生態系の善美とは、それぞれに他の種に対し「良い、美しい仕方で関わっている状態」を言う。そのために文明の持つ欺瞞とそれを前提とする道徳の限界を解明し、自己を含めた全体との関係から思慮する知恵とそれにもとづく自由な行動に支えられた、正義・節度・勇気・食と哀れみ・愛などの意味を明らかにする。現代文明と環境問題を原理的・根源的に考察することにより、新たな倫理の地平を切り開き、人類の歩むべき方向を示唆する貴重な作品。

LM コメント

人類や個々人の価値を、文明へではなく、またその他へでもなく、“自然(生態系)への適性の高さ”に求めすぎているか？

人類が自然の内から誕生し揺籃されて来たということから、人類にとっての過去からの救い主である母なるもの、を絶対に裏切らず、それとの共生にいつまでも徹することが最重要視されている。これは誠に以て、どぎつても消極的な目的論、つまり後ろ向きの目的論ということが出来よう。

早い話、このような主張をするハ木自身の自己認識はしっかり機能しているのか。加えて、自己隠蔽の観もなしとはしない。

4) 第三冊目の最後に掲載されている「著者のメッセージから」全文

きびしい環境問題が目前にある。人類の発展とともに環境破壊が進み、いずれは人類の生存が脅かされることは、誰もが予測している。・・・発展しているこの文明はヨーロッパ思想の裏付けを持つ。それゆえ問題解決の道を見つけるためには、2500年にわたる哲学思想に分け入ることが必要である。・・・この本で、生命は偶然を生かして、物質世界とは別の世界を構成していくものであることを明らかにした。また、人類は生態系の健全な維持のために生まれ

た動物であって、それが文明の始まりとともに自分たちのために自然を利用し、他者を排除するようになったと考えた。……このような理解を持って哲学について検討した結果、パルメニデス以来の存在論も、新たな生命の視点から、全く新たなものに書き換えることが出来た。……この新たな存在論に基づく倫理学の検討によって、この存在論が仏教思想と調和するものであることも、明らかにすることができた。それゆえわたしは、この三部作を、自信を持って世に問うのである。

LM コメント

「人類の生存が脅かされている。」(だから何とかしなければ)という前向きの気持ちあつてのことだろうが、個人であれ恐竜であれ、要するにあらゆる生き物に死、寿命というものがあるではないか。人類だけがそれを避け得るとでも思っているのだろうか？ 死を避ける思想、そして行き方が人類にとって最も幸福な道と見るのは、単純すぎないか？

文明の動因に自己中心性(エゴイズム)を見ている著者であるが、これを次のように言い換えることはできまいか？

「生命は偶然を生かして、物質世界とは別の世界を構成していく」と語る著者だが、それはそのまま、次の(人類による文明化の)段階に置き換えて、“人類は偶然を生かして、生命世界とは別の世界を構成していく”と言えまいか？

そして、その文明化は(著者の善美には反するものかもしれないが)、必然的で(この後の変化はあるとしても)逆行不可能な道なのではないか？

悪いとは知りながら欲望には逆らえないのは、何も個人に限らず、人類レベルで大々的に生じることかもしれないのだ。

さらに、パルメニデスのような、現象から離れ観念的レベルで定立された「存在論」を、現象の真ただ中に身を置いて現象そのものを扱う生態系に適用するといのはいかなものか？

著者の良心はひしひしと伝わってくる。だが、一方では自然界における自然の世話人としての、またもう一方では史上の種々の哲学に通じそれらを自由に駆使して価値体系を打ち出す人としての、要するに二人の八木がいるようだ。だからこの著作は、彼ら二人が互いに内的コミュニケーションを続けつつまとめあげた三部作である、というのが本当のところだろう。そのような心の陥穽見え見えの“二人よがり”の文章を名だたる哲学者が読んで、とりわけパルメニデスが読んで、喜怒哀楽のいずれに傾くか、すでに答えは見えているような気がするのだが。

ここから

第一冊(＝第一部)

5)「進化論によって人間論を書き換える」よりp12

人間とは何か、と考えるとき、わたしたちはたいてい、古来の哲学者の説を検討する。たとえば「人間は考える葦である」と語ったことで有名なパスカルは、「近代的宇宙観を前提にして、人間を無限な空間の中に孤立するものと見る。そのことを知ってわたしたちは、近代人は孤独なのだとあらためて考える。あるいは、古代ギリシアに生きたアリストテレスから、「人間は社会的動物である」と知ると、人間は社会に認められてこそ人間なのだ、と考える。また、「三十にして立つ、四十にして惑わず」と孔子の教えを聞いて、振り返って自分の生き様を考える。このように一般的に権威のある哲学者は、たいがい、かなり古い時代に属する。現代哲学者は現代についてはよく論じるが、人間についてとなると、わたしたちはいまだ古い時代、あるいはせいぜい近代の十八世紀の哲学者に頼ることを習慣にしている。

しかし、人間とは何か問うとき、このような仕方で反省するのが常であることに、なぜ疑問を覚えないのだろうか。わたしがこのような疑問を覚えるのは、十九世紀に「ダーウィンの進化論」が現れてから、人間とは何か、という主題について議論に大きな変化が起きなかったのがなぜなのか、理解に苦しむからである。(中略)

p16より

哲学者はひたすら動物との違いのうちに人間論を押し込めているのである。人間はたんなる動物の一種ではなく、理性を持った動物である、という言い方である。このことは、西洋の哲学には自然との直接的な関係で人間を論じることが、人間の身体構造は別にして、本当はできないことを表している。西洋は人間の精神能力を、反省を通じて縷々説明し、人間の特徴を数え上げるばかりである。それは部屋に閉じこもった人間が、鏡に映る己を見て、己の美しさを数え上げているようなものである。

LM コメント

最近の(ハ木がこの本を書いた二十一世紀初頭にしても同様だったが)テレビで、盛んに自然番組が放送され、ほかのメディアでも同様の傾向で、「人間は動物である」という見方、扱い方、考え方が広く一般化していることはハ木も十分に承知しているはずだ。かくいう私も、特に女性たちから「人間は生き物である」ということを見せつけられ、自分もその仲間なのだ、

日常的に思い知らされて来ているのである。

この点、著者である八木にしても変わるところはない筈だ。ところが、まさに第一章の書き出しから古き時代の哲学者や思想家の「人間は動物とは違う」としているところを列挙し、しかも「わたしたち」がその教えを今も強く受けている、と決めつけている。

多くの権威ある哲学に学んできた八木本人の在りようを一般に敷衍しすぎているのではない。また、長期に渡る自然との触れあいを通し生態系への意識を募らせる八木本人と、哲学者としての八木本人の間に生じた亀裂、あるいは陥穽が、この大部の著作の初めにこのような言い出し方をさせたものと思われる。

だから、八木は本質的な意味で、正直なのだと思う。その点は評価したい。

ただ、「『ダーウィンの進化論』が現れてから、人間とは何か、という主題について議論に大きな変化が起きなかったはがなぜなのか、理解に苦しむからである。」というところは、ダーウィン以降の哲学や思想にあつてしかるべき変化が生じていないことへの憤りなのであろう。私は、これについては次のように言いたい。

同じく、「人間」を扱っているように見えても、哲学や思想が扱う人間の側面と、自然科学が扱う人間のそれとは本質的に別のものなのだ、と。

p16の部分は、八木の庶民性がにじみ出ている。

現代は、特に日本は上下の差別を嫌い、「もともと上下なんてないのでは？ いらないのであは？」という思いが人々の中で強くなっている。これを私は垂直否定、あるいは垂直盲(LM造語*)と呼んでいるのであるが、そのような読者を予想して、哲学者というものをからかつて見せている八木ではある。それでも、嫌みがないところは評価する。

* 以下、(LM造語)との断りを随所に入れておいたが、それは私自身にとってはまさしくそうなのだが、既に使われている言葉である場合もあろうかと思う。その中には概念までもが一致する場合すらあるかもしれない。

6) 「生命の誕生に見いだされる生命の本質」よりp19

ところで、人間は自然のなかで誕生したと述べたが、自然とはなんだろう。わたしたちは自然と聞くと、まず無際限に広がるとも思える宇宙を考える。しかし私たちが現に生きていて、そのいのちを支えてくれている世界は、実際にはそれほど大きくはない。太陽や月といった幾つかの天体は重要であるにしても、おおざっぱに言ってわたしたちは、太陽系の中で、それももっぱら地球表面の生態系のなか、という限られた空間に現に生きている。天空の世界は広大無辺であるが、現実的に「生きる」ことが可能な世界は、天空全体に広がっているのではなく、地球表面の「ここ」にしかないのである。この事実は大きい。ここは宇宙のきわめて小さな一角である。それゆえわたしたちはまず、この地球という一個の惑星の生命の歴史に思い

を馳せなければならない。私たちが生まれてきたのはその歴史からであって、天空を思う哲学者の思惟からではないからである。

LM コメント

“狭い領域に呪縛された生き物だ”と人間を規定しているようなものだが、たとえそれを認めたとしても、我々は片や、“考える葦”でもあり、意識を持った存在ではないか？

自然、生命、人間に対してのこのような即物的捉え方は、著者が書齋においてにせよ、また野外においてにせよ、あまりにも直接的にそれらに関わって来たことによるのではなかろうか？ 哲学者であるにもかかわらず、これほど“素朴実在論”の働きを感じさせる人も珍しい。

7) 「植物と動物の関係」よりp43

それゆえ、わたし自身が経験から学んだことが正しければ、植物を土台として生態系の生物種たちは、「食」の関係で結ばれ、お互いに「いのちを育みあう」関係をもっているということが出来る。なぜなら植物によって動物のいのちが生まれ、動物によって植物のいのちが育まれる関係があるからである。あるいは、それぞれが互いの「いのちの交換」を通してお互いを成り立たせている関係が自然界の姿だ、ということが出来る。それゆえここには平等な相互関係があるのみであって、一方的な搾取の関係は全くない。どちらかが損をして、他方が得をするということではない。お互いが得をして、生きているのである。いわゆる共生関係なのである。わたしが見いだした生態系とはそのようなものである。

LM コメント

人がここだけ読むとすると、意外にすんなり読めてしまうのではなかろうか。さして抵抗がない。ただし、ここにあっても、本書の底流にある、“人間も生態系に属する”のであるから、“ほかの余計な生き方をしないで、その立場に徹するところにこそ人類の幸福もある”、と言う主張を感受すれば、「それなら話は別だ」と言って身を引いてしまう(読書をやめてしまう)人が、とたんに増えるのではなかろうか。だが、逆に好奇心を募らせる読者もいるかもしれない。

8) 「恐竜の絶滅」よりp47

したがって、おそらく恐竜の絶滅も、本質的にはけっして巨大隕石によるものでも、異常気象によるものでもない。もしも地球全体を覆うような巨大な事故やそれにとまなう異常気象が恐竜の絶滅の原因であるとしたら、同時期に生物の大量絶滅が起きていたはずであるが、残された化石の状況からして、そういう事実はないか

らである。絶滅したのは、恐竜ばかりだった。したがって、恐竜は、むしろ恐竜が植物管理の役目を果たす上で、植物の期待に応えられなくなったから絶滅したのだと考えられる。

LM コメント

自然全体を一つの閉じられた体系として、その時間的変化に必然性を見ようとしているが、なぜ、偶然的事象を許容しないのか？ 自然の持つ開放面を拒否しようとするのか？

いやしくも、相互関係重視の生態系という観点で思考を展開する人が、今や(2004年当時も同様)定説となっている「巨大隕石落下が恐竜絶滅の原因」とする説をあつけないほどに無視しているのはどうしたことか？

生態系存在論構築の上で厄介なことは「無かったことにしまおう」という気持ちが露わであるが、これを傲慢と言わずになんと言おう？

9) 「人類の誕生」より p54

周知のように、人類の出現は恐竜絶滅後はるかのことである。しかし以上の理屈が正しいなら、人類の誕生も植物が自分たちの管理のうえで人類の手腕を必要としていたからであると考えなければならない。ところで、人類はサル類から誕生した。なぜこの新種が他の類からではなくサル類から誕生したのか。昆虫類や鳥類ではなぜいけなかったのか。これまで明らかにしてきた理屈からすれば、それは植物の側に、新たな動物を管理作業者として必要とする何か新たな事態が起きたからでなければならない。そしてそのための能力が生まれる可能性が、ほかのどの類よりもサル類のなかにあったから、新たな種である人類はサル類から生まれた、と考えなければならない。言うまでもなくその能力とは、脳のはたらきと、ものをつかみ、運ぶことができる手のはたらきであった。

LM コメント

この考えは八木自身が執筆当時考えていたことであろう。彼自身、人間であり、先ずこの地球上に存在している、という現実がある。で、そこから逆に地球上の過去を眺めて、生態系がたどった道を“よかった”としている。それは、案外、というか哲学者としては意外なほどに正直に、“現在の植物や我々人類が現在いるのは良いことだ”“早い話、人間として自分があることは良い(善美)ことだ”という思いから出しているのではないか。そしてこのことは知られて結構、と思っているのか？ それとも無意識裡に露呈された事なのか？

ともかくその上で、人間がサルから伸び出て来たことは正当であった、あるいは最も良かったとしている。そして、植物との関係は文明化以前は良かったと想像して、植物たちがそれを

必要としていたからだ、としている。

生態系は生態系のために存在しているのだろうか。その歴史もそれ自身のためのものであったしあり続けるべきものなのだろうか？

生態系というのが、そもそも抽象概念である、ということに、八木は知らんぷりをしているのではないか？

だが、そこには拘らず八木に付き合うとして、つまり、その概念に対応するものが地球上にしっかりあったとしても、それを人間までひっくるめた自己保全系、自己発展系として、そこから人間ははみ出してはいけない、としているようではないか？

これは八木の愚かさから出ているのではなく、やはり、彼は知性を効かせて虚構話を我々に仕掛けてきているのだと読める。これは却って、どこか文明化を導いた理念、そう、人間中心主義を思わせる。

人間中心主義を生態系中心主義に置き換えたようなものではないか？

八木は可能性を広げたと見ているようだが、少なくとも人間にとってはひどく狭められた、という印象は誰もが持つのではなかろうか？よほどの自然教信者[LM造語？]か生物や植物の愛好者なら別だが。

10)「人間が自己意識を持つ理由」より P82

ひところ人間の「自己家畜化」が大いに論じられた。文明生活において人間は、自己を飼い慣らしている状態にある、ということである。これはまったくその通りであろう。人間は不快なものを遠ざけ、食料を量産して必要な場所に届けてもらう生活を当然と見なしている。野生の動物なら自分で食料を確保しなければならない。危険を回避して食料を手に入れることが一般に野生状態の動物の主要な行動である。家畜化された動物は、食料を与えられ、家を与えられることによって、食べ物と安全を、与えられて過ごす。そのため、**家畜化された動物は野生本来の状態と比べて平均して二割近く脳が委縮している**ことが明らかになっている。人間も、食べ物と安全を社会の力で手に入れている。文明社会は自然の脅威から人間を遠ざけ、食料の獲得についても、土地の占有等によって容易なことがらにしている。文明社会では安全や食料の配分は金銭によっているので、人を悩ませているのは金銭の獲得のみである。それゆえ、人間もまた家畜状態であるということが出来る。したがって、**人間もその脳のはたらきが、文明以前と比べて二割方委縮している**と考えるのが妥当だろう。

文明社会の人間は、とかく自分たちの能力は文明以前の人間と比べてとほうもなく進歩していると考えがちである。文明を誇る欧米のテレビ番組のなかには、文明以前の人間を何も考えない野獣のような描き方をしていることがある。

しかしこのような考えは、明らかに客観的ではない。むしろ文明人の脳の働きは、文明以前の状態と比べて格段に劣っている、と見るのが妥当な見方である。じっさいこれまで述べてきたわたしの説が正しいのなら、かつて人間は生態系を構成する数えきれない生き物を霊的に理解していたに違いないのである。つまりあたりを歩きながら目に留まるあらゆる生き物、耳に聞こえるあらゆる動物の声、嗅覚に感じる風の匂いなど、あらゆる情報を通して、さまざまな生き物の状態を知り、それらに共感して生きていたに違いない。このような脳の働きにおいては、脳は機敏に情報を受け止めて判断し、止まることがなかっただろう。

LM コメント

こちら辺は安直に過ぎるようだ。

現代が高度人工化社会にあるとはいえ、「人を悩ませているのは金銭の獲得のみである。」とは乱暴も甚だしい。常軌を逸している。ここまでのところで最悪最弱の部分ではないか。また、高度に複雑化した社会における高度に専門化した職業人の頭脳は、当然、文明以前の人間たちには在り得なかった脳の働きが可能になっているはずである。もちろん、文明に強いられた部分も含めである。

まさか、この指摘に対し、彼、“どんなに新しい機能でも、強いられて得たものは人を自由にしてはくれない。だからその機能には善美がなくダメ！”などと、この本のほかのところに書いてあることをそのまま引っ張ってくるようなつまらない態度はとらないだろう。

それと、おそらく八木自身、文明人の中に生きているのではあるが、何か自分には文明以前の能力が残っている、との思いがあるのではないか。また、彼が文明以前の人々にあると読んでいる能力が、彼に限らず形を変えて機能している場合があると、私は思う。

ひとつ例を挙げさせてもらうが、ロクリアン正岡は老女になったり犬になったり、はたまた男になったりして「老女というもの」「人犬(!)問題序説」「柴犬賛歌」「クールな美男」等々を作曲している。

11) (承前) p84

このような状態にあるとき、人間はどのような意識を持っただろうか。繰り返すが、人類の脳に与えられた最高の植生を実現していくための知恵は、さまざまな生き物を、植物を含めて理解する知恵であった。しかもそれは文明社会がもつ科学的理解ではなく、むしろ神秘的な知恵であり、それぞれの生物種の靈魂を自分の中に受け取ることによってなされる知恵であった。この知恵は、他の生物種を「自己」として受け止める知恵でなければならない。なぜなら、それは共感する知恵だからである。すなわち、人間は植物になり、昆虫になり、

イノシシやシカになった。そしてまさにこのことが原因となって人間は「自己意識を持つ」ことが出来るようになった、とすることができる。

おそらく、地上の生き物の中で「意識」をもつのは人間だけであろう。しかし、「なぜ人間だけが意識を持つのであろうか。人間は頭がいいからだ、という、答えにならない答えがこれまでの常識である。しかし、これまで述べてきたことを前提にするなら。その答えも自ずから明らかなのである。すなわち、その理由は、人間が複数の他の生物種の霊魂を受け取ることができたことから意識が生じた、ということである。なぜなら、人間が他の霊魂を受け止めると、そのときの自己は、もはや人間の自己ではない。しかし、人間は現実いつまでも他種の自己で居続けることはできない。かれはいずれ人間に戻るのであり、しかも、他種の自己であることから生まれた理解を携えている（記憶している）必要がある。すると、心の中に、少なくとも複数の自己が記憶されることとなる。すなわち、さまざまな動物や植物の霊に共感して生まれた自己と、人間である本来の自己である。こうなると、人間としての自己、すなわち、自己の自己を保つことが、自己を他者とするなかでも特別の様式で確保されなければならない。おそらくそのような理由で、人間は他者と区別される「自己意識」を持つことに習熟してきたのである。

LM コメント

自分の持っている意識を昆虫、イノシシ、シカ等々に貸し、それを奪回するために自己意識を持った、つまり、その時初めて意識と自分は(主体、主観として)向き合った、ということのようだ。いずれにしても、生物相手とは言え、他者意識が先に生じて、そのあとで自己意識が生じたと見ているようだ。

だが、ここには、はっきりしない表現がいくつか見られる。

自分が立てた「なぜ人間だけ意識を持つのだらう」と言う問いに対し「人間が複数の他の生物種の霊魂を受け取ることが出来たことから意識が生じた、」とわざわざ紛らわしい応え方をしている。おそらく、「霊魂を受け取ることができた」ということに対し、「意識」があるからできたのか、霊魂を受け取る過程で意識が芽生え濃くなっていったのか、ハ木は判定しかねたのであろう。

また、いずれにしても、「自己意識」よりも“他者意識”が先だと、ここでは明言しているのだが、これは、本書の主旨を支えるための手段としての強弁ではなかろうか？なぜなら、“自分の身を守る”という基本的態度は、人間であれ動物と同じである筈だからだ。

しかも、だからと言って、そのことは「意識」の参加を拒まない。動物は本能として自分や自分たちの身を守ろうとするが、人間はそれに意識が同調する。となると、サル類や哺乳類などの場合、意識の同調はまったくないのか。意識は真つ暗闇であったと言い切れるのか？やはり、ここにも、話筋に通すためのでっち上げが混入しているのかもしれない。強弁臭いの

である。

かつての、生態系の概念ひとつ持つはずもない類人猿上がり人間は、生きることで精いっぱい、食物の確保と外敵から身を守ることで汲々としていた、となると、抵抗ある外界相手に、対立感情は研ぎ澄まされ、自分自身の味方として意識に目覚めてもらうしかなかったのではなからうか？同様に、人は、人類は、光を見方につけるしかなかったのではなからうか。光とは、もちろん目や意識のことである。これは、少なくとも、上記の意味での“他者意識”以前のものだ。他者を照らす光源は自分の方にあるわけで、その光源を原初的な意味で単に「意識」と呼ぶことも有効で、それが他者へ向かった時に他者意識が始まったという理屈である。また、今言った「意識」が八木の言う「自己意識」（自分を志向する意識）以前のものであることは言うまでもあるまい。

（なお、人類を含め心身を刺激する物は視覚以外に聴覚や触覚等々がある。意識のルーツをたどってゆくと、別に視覚的でもない“意識の在り方”を考えなければならなくなるのだろう。が、ここではそこまで議論を広げる必要は必ずしもあるまい。）

八木の主旨がしっかりしているだけに、その説明への疑惑もまた、深まるばかりである。まだ、LMによる批判がはじまったばかりだというのに。

更に批判的なことを言っておくと、この箇所について多用されている「自己」であるが、事を暈すために使われているようにも取れる。なぜなら、“意識がまだない段階でも自己はあるのだろうか”という疑いもあるし、早い話、八木に「動物に意識は無いとおっしゃるが、ならば、『動物の自己』の“方”はどうなんですか？」と訊いたとして、いつものような懇切丁寧にして決断力ある返事が返って来るようにも思えないからだ。

LMの考えからすれば、動物には、外界から自分の身を守る機構を行動で示すことから、「自己はある」という（≠「自己を持つ」）言い方は許される。

だが、植物の場合はどうか？

彼女らの存在する様を表現する場合、「ある」が自然で「いる」と言われると抵抗を感じる。同様なことは、「自ずから」と「自ら」の比較でもいえる。だが、植物には「意識」はおろか「自己」すらないとすると、本書で語られていることがとたんに「絵空事」や「八木幻想」となって遠のいてしまうので、ここには拘らない方が良さそう。

このLMの試みは、実は“バカの壁”批判⇒否定行為”であり、八木の主旨に徹底的に寄り添い続けることが肝要だからだ。

いずれにしても、この段、11)は非常に読みにくく、八木自身の苦労がありありである。それは表現上の問題というよりも、それ以前のところに難があるからであろう。それでも、これほどに難しい局面を、なんとか説明しようとする八木の誠実さと工夫と勇気を私は買う。

だが、現実を思えば、八木が思っているような人間が「他種の自己」を抱え込むような局面は無かったかもしれない。サル類から人類になりたての頃の人々は、そのような回りくどい

過程を踏むことは無く、もっと単純で、やはり野蛮だったかもしれないのだ。また逆に、サル類やもっと原始的な生き物でも、薄明りのような意識はあったかもしれないのだ。

だからといって、八木の叙述を知的パフォーマンスだ、としてしまうには真実がありすぎる。第一、志が高い。先へ読み進もう。

12) 「同上」よりP85

ところが、あるとき、その務めを果たすことを止め、人間はただ「人間のために植物を管理し、「自分たちのために」あらゆるものを利用して怪しまない生活をはじめたのである。これが文明の始まりである。こうなると、人間は意識の上で他種の生き物となることをやめてしまう。なぜなら、「自分のため」になることが何か、(読点補いLM)をひたすら考えることは、実質的に自分の事しか考えないことだったからである。人間は自分たちに都合のいいものだけを大事にすることを始めたのである。(中略)

つまり自己家畜化している人間の意識は、ただ「自己の意識」として肥大化し、他者を理解するための他者についての意識は、真剣に受け止めるほどのものとは見なされず、「あやふやで危ういもの」として疑われることに成った。あるいは、その他者が人間ではないとなると、「悪魔に魅入られたもの」あるいは「異様なもの」と見なして日常から排除することに成った。つまり何か霊的なものにとらわれる人間は、それが教会の教えに従うものでなければ、悪魔のレッテルを張られたのである。西洋中世後期に「魔女」扱いによって多くの無垢の人々が殺されたが、西洋にも存続していた他者を純粹に理解しようとする意識は、異様なものとして排除されてきたのである。

LM コメント

「ロクリアン魔法がどうしてタブーにされたか？」について直接に語られているかのような箇所である。そして、「タブーにした方こそが良くない！」とも。

私も「それは良くない！グレゴリオ聖歌を制定した西洋の僧侶たちは間違っていた。」ということをより強かに表明するために、前世紀の内に「ロクリアン正岡」を名乗り、その方面での作曲を続けてきたのである。

ただ、それだけに、彼の主張するところと私の主張するところの違いは先鋭化しこのような大がかりな批判文を企画することとなった。

それについては、最後の総括文で詳しく語ろう！

13) 「生命理解の喪失」よりp90

人類が誕生したのは、その理由はともかく、自然界の中であったことはたしかなことである。そして人類が自然界によって誕生したのなら、人類が、その誕生に際しては自然界に歓迎されたことも確かなことだろう。すでに述べたように、自然界は特殊な知恵によって新たな種を誕生させてきた。そして種の誕生はその種が「食」の関係の中で他の種と関わり、植物ないし葉緑素の力を基盤としたエネルギーの享受において、互いに共生する複雑な関係を持ち、そのことを通じて容易には全滅しないように配慮されたものであった。人類の誕生が生物界に見られるこのような普遍的法を無視して起きたと見ることはできない。したがって、人類もまた、他の種と同様に、その誕生においては自然界から歓迎された種であったに違いないのである。これが私の基本的理解である。

LM コメント

自然へと、人類の誕生や人類という存在を安易に馴致させようとしてはいしまいか？

歴史に一貫性、同質性、連続性を見たがる(あるとしたがる)のは、学者や研究者の一方の基本姿勢ではあろう(犯罪を巡る捜査官や裁判官についてもいえる)が、それを断ち切り、あるいは否定する事象が頻繁に起こり、それを決して見落としてはならない、とするもう一方も基本姿勢としてなければならないだろう。いかに説明を難しくする事象であろうとも、である(cf. 恐竜絶滅に関する“隕石衝突説”等々)。

ハ木のように“生命はその誕生以来、物質世界とは別種の世界を構成して行った”と言えるならば、“人類はその誕生以来、それまでの生命世界とは別種の世界を構成する方向へ進むように運命づけられていた”と言えるかもしれないではないか？

卑近な例として、人体の中でそれを破壊するがん細胞が生じることは広く知られている。

「人類の誕生が生物界に見られるこのような普遍的法を無視して起きたと見ることはできない。」とは、あまりにも安直な決め込みではなからうか。その恣意性に、傲慢というよりも“甘え”を覚えるのはこの私だけであろうか？

“人類の誕生が生物界に見られるこのような普遍的法を無視して起きたとなると、この自分の折角の生態系存在論が成り立たなくなってしまう”というのが本当のところだと、私には思えるが、これは果たして邪推だろうか？

14) 「市場のはじまり」より P174

言うまでもなく、このような技術上の革新は科学の発達による。そして科学の発達は、とりも直さず自然界を「物体」として見ていく世界観と結びついていく。じつのところ、科学の発達と、自然界を「物体」として見ていく世界観の広がりと、市場の拡大(経済支配の拡大)という三つの出来事は、西欧文明

と東洋世界の本質的な違いを歴史の中で際だたせてくれる。ヨーロッパにおいてすら、古代においては、金属も地中で生きており、成長している、という信念があった。それが一気に市場が拡大するルネサンスを通じて、非生命的で物質主義的な世界理解が広まったのである。ヨーロッパ近代哲学の父はデカルトである。かれの物心二元論は、人間の霊魂以外はことごとく物質として理解することが出来るという、近代科学の基礎固めをおこなう思想であった。

同時にデカルト哲学は、「われ思う」という自我を哲学の土台とした。それは主観を根拠とする哲学の始まりであった。のちのフッサールの言い方を使えば、「意識に直接与えられている自明性」こそが、「ある」と確信がもてる第一の根拠である、という哲学の始まりである。この種の哲学は「自己意識」の哲学だということもできる。なぜなら、意識に直接与えられているもののうちで、「つね」であり、「だれにでも」という、客観性の規準にもっとも合っているものを探せば、それは疑いようもなく「自己」となるからである。なぜならほかのものは、意識に直接与えられるのは「ときたま」であり、「ある場所で、ある人に」と言う限定がつくほかないからである。

それゆえデカルト哲学は文明社会が行き着く哲学の様相を明確に示した最初の哲学となった。すでに述べたように、文明が始まると、それまで多くの他種を意識の束として生きていた人類は、自己意識を肥大化し、他者については、その存在すら疑わしく思うようになった。なぜなら文明社会の中では、人間のみが考察に価するのであり、他のものは真剣に受け止めるにあたいしないからである。それゆえ文明が求める哲学は、まずもっぱら自己を絶対とする哲学であり、他方、他者は可能な限り「物体」として、都合が悪ければ排除してかまわない存在として理解することが出来る哲学なのである。すなわち、それは自己意識の哲学であり、同時に、対象となる世界をたんなる「物体」として扱い、しかもいつでも消し去ることができるように、対象存在をたんなる「可能性」としてみる哲学なのである。

LM コメント

視覚そのもののように志向性を強めた生き物は、どうしても外界を対象化し、物体化するようになるものだと思う。西洋人が一番早かったというだけのことだ。視覚の本質は相手を固定することだ。動物のような動く相手であっても、瞬間瞬間をとらえ幾コマにも固定する中で、動きを自分の方へ奪い、相手を動かす形に持ってゆこうとするが(cf.活動写真、パラパラマンガ)、あるいは端的に静止させ、殺す場合もある。「それまで多くの他種を意識の束として生きていた人類」とあるが、そんな悠長な時代、そんな余裕たっぷりの時期が本当に人類にあったのだろうか？また、西洋人ですら「金属も地中で生きており、成長している。」とっていたのは本当だろうか、それは外的抵抗(知識)が不十分なために生じた意識の(不随意運

動的) 想像力、あるいは単に幻想というべきものであろう。

意識自体と言うものは、本人にとって目に見ることも触ることもできず、それだけに自由自在だ。知覚できるのは、その意識に映ったものだ。そのような鏡のような機能を有する意識の本質に抽象能力がある。だから対象から多くを捨象する。生き物からは生命が捨象される。「物体化」は当然の理だ。だが、鏡なのだから、実は物質性まですでに捨象され、映像(意識されうる知覚存在の総体のこと)化されるまでに、遅くとも西洋ルネッサンスの頃には行っているに違いないのである。もちろん、彼らの意識においての話で、近現代のように写真が生まれ貨幣まで実際に省略される(cf.ビットコイン等々)までにはひと間必要ではあった。とはいえ、生き物たちへの、「生命なんて奪われて当然。物質性まで奪われないだけありがたいと思え！」という声がデカルトのみならず、ルネッサンス人たちから、いや、それよりもずっと前の人たちからも聞こえてきそうではないか。

逆に生後間もない赤子が視覚からの映像に気づき、驚き恐れるという瞬間がある。それはまさに意識の誕生である。さらに、そうした意識が働きだすことで、外界に物体らしきものがあり、生き物らしきもの(母)があるというように認識は進んでゆく。普通の場合、赤子の意識はこのようにはっきりして行くのであろう。

だが反対に、生まれた瞬間には突然の環境変化にあれだけ泣き叫んでいたのに、しばらくすると大人と同じように呼吸してすやすやと眠ってしまうものである。そこには意識の働きはなく、周囲との漠たる一体感あるのみのようだ。ここでも「意識の束」と繰り返しているハ木であるが、それはむしろ一体感によるものではなかろうか。つまり、自己と非自己の境目の認知すら消滅した状態だからこそ、外なる生氣のようなものに入り込まれるのである。

上の二つの在り方は、原始人においてもルネッサンス人においても現代人においても、常に同居しているのではなかろうか。つまり、比喩的に申せば、交感神経と副交感神経であり、両者を司る自律神経である(cf.本稿p68、90)。

ルネッサンス人やデカルトや文明開化以降の人々が、交感神経を重視しているのはわかる。意識的な活動を強制されているからである。物事や状況の違いに常に目を光らせていなければならない。

かといって休まねば命が持たない生命の座である内臓を休ませるためには、自己と非自己の境目も忘れ、周囲と一体になって休む必要がある。

この点について、文明以前の人間にも文明以降の間にも基本的な違いなどあるはずもない。早い話、その他の動物たちについても同じことが言えそうである。

土台、自然人(生態系内在人:LM造語)から文明人への変化は、その心身機構の変化に照らし見ても十分に連続的であり必然的であるのではないか？

ハ木は、文明以前と以後の違いを強調するあまり、もっと深く広く大きな普遍的事実(自然と文明のバランスを図る“自律神経”の如き働き等)を忘れる勢いがあると危惧せざるを得な

い。大きく見晴らしているようでいてその視線の深度はそれほど深くないようだ。トートロジー的な部分の多いゆったりとした文章ではあるが、これだけ大きな主張をするには必要な切り口や論題が多く省かれているようだし、やはり先を急ぐ気持ちが働いているのであろう。

ゆったりとしたリズム感があるからといって功を焦っていないわけではないという、これは恰好の例なのかもしれない。

だからだろうか、この最後の数行の、デカルトの「自己意識」の哲学への攻撃は威力がある。相手、デカルトの冷たさ、冷酷さに対する悪口であるだけに、著者・八木に人間的な温かさすら覚え納得しながら読み進んで行く方々も多いのではなかろうか。

だが、これは論文なのである。少なくない地雷にご用心あれ！

15) 「物体化する食物」より P176

ところでデカルトの近代哲学宣言は、西欧による世界の植民地化への動きと軌を一にする。そもそも植民地化は、食物生産、流通を支配する道であった。これは実質的な市場の拡大であり、経済支配の拡大であった。なぜなら食物が地元のものでしかない間は、経済支配も仮のものになるからである。たとえば蒙古軍は当時の世界の大部分を支配したが、食物の生産と流通の支配ではなかったために、仮のものでしかなかった。武力に基づく支配には限界があるのである。他方、生物である人間は食物によって完全に支配される。したがって食物の生産と流通の支配が起これば、それは永続的支配となる。ところで、西欧の市場支配は、食物を「物体化」して、その生産と流通を支配する。それゆえ植民地主義の市場支配は、永続的な世界支配となったのである。(中略)

p178

そして、食物が「物体化」される度合いが高まれば高まるほど、人間が持つ世界観の物質化は避けられない。なぜなら、人間は、「食べて」生きているからである。自分のいのちの源が「物体化」すれば、人間の意識のなかで、自分の身体を含めたすべてが「物体化」することは避けられない。なぜなら、自分を生かしているものが物質に過ぎなければ、人間にとって世界の土台は物質であり、それが実質上世界のすべてであるということになるからである。そして結局、物質的宇宙こそが世界であるという思想が人間世界のなかで絶対的基礎となる。(中略)

p179

食物が生産地から市場に運ばれると、本来生き物であった食物は、なんらか物体化する。言うまでもなく、生き物であれば、死ぬと腐りはじめる。したがってその前に商品として市場に並べられなければならない。そのため、木の実

は熟す前にもぎとられ、肉は腐らないように処理されて並べられる。自然の中で見いだされてその場で食べられる場合には、植物は、直前までは「生きていた」ものであり、腐る前に食べられるので、「物体化」していないが、商品として市場に出されるものは、もともとが生き物であるはずの食物でさえも、市場まで運ばれ陳列されるまでに、多かれ少なかれ、すべて「物体化」しているのである。言うまでもなく、人間も市場で奴隷として売買されるとき、「物体化」しており、牛などの家畜も、生きたままの取引でさえ、「物体」と見なされて売買される。このように市場での取引は、「物体」の取引であり、そこでの活動は、たとえ食物であっても本質的に「ものの交換」なのである。

LMコメント

“文明、文明化は良くない”という立場(思い)から西洋史を整理すると、

このような見事な叙述が出来るものか、と感心させられなくもない。事実、ここでは西洋の文明・文化の偏向を鋭く指摘しているようだ。

“人間はいのちだ、生命だ”とするハ木からすれば、その物質化はやはり、とんだ悪行とするほかないだろう。“万事は光と影が伴う”などとのんびり客観的立場に安住しておられないだろう。アジアや日本に飛び火してすっかり定着しますますひどくなりつつあるその“変更”を許せない気持ちはよくわかる。

が、である。向きになつてはならない。

ここで、“いのちの希薄化や否定”がどうしても伴う「食物」を音楽に置き換えて考えてみたい。

楽譜が発達したのは当然、西洋であるが、これこそ音楽の物質化された姿そのものでなくてなんであろう。それによって、作曲家の中での生き生きとした音楽的イメージは記録され、同時に奏法指示書となって演奏されることで一般に鑑賞可能となる。それがなければ現在聴かれうる多くの音楽は我々の耳に届かない。いや、そもそもバッハやモーツァルトやベートーヴェンのような素晴らしい音楽も作曲されなかったことになろう。よく言われるように、音楽とは生命感を身上とする芸術であるが、音楽の父、バッハの音楽から直接的な生命感は伝わって来ない。その代わり、生命体に付きまとう腐りやすさというものはじめから免れているような硬質なコインの如き感触がある。モーツァルトもベートーヴェンもバッハを尊敬していたという。バッハにそが楽譜の持つ時間外的な有りようを最大限活用することで“高度の秩序を持った音楽”の物体化に成功したのだ。だから、ハ木に言わせれば非常に文明的だと言うことになろうが、大きな自由を作曲という作業に与えたバッハの功績は音楽人たちにとって極めて大きいというほかない。しかも永続性が高い。

まことに、楽譜がなければ十分な意味での作曲は在り得なかつただろう。その代わりに、演奏/作曲の亀裂のない、生きたままの音楽が食され(しかも殺さなくてよい)ていたのではな

かろうか(もちろん、現代のような録音再生メディアなど全くなかったとしての話である)。

作曲という机上作業の過程から出て来た音楽。作曲は料理に当たる。単に頭に浮かんだ音楽的イメージを外化したものではなく、演奏者への指示書に変わるその過程で、音楽としての、はたまた作品としての高まりの作業が施される。

また、作曲と言う心構えが、当初の頭に浮かぶ音楽的イメージからして高めることに寄与するところ絶大なのである(即興的作曲家であるモーツァルトがよい例だろう。彼の楽譜はほとんど修正の跡がない、と言われている)。

“物質化なくして料理なし”ということを思えば、食物の物質化の影の方ばかり強調するハ木は、現代人から見れば食文化を半殺しにしているようなものではないか。本書籍から“超保守の香り”を感じるのは私だけだろうか？

それが彼の戦略(戦術)かもしれないが、それ以前に、彼自身が本気でその通りに思っている気配も相当あるのである。

それでも、蛮勇の後押しなくしては、こんな書き方、本の作り方はできない筈だ。

16)「思想のはじまり」よりp181

人間はもともと生命なので、まったく物質的世界に酔いしれていることはできない。そのため、文明がはじまると同時に、精神的な世界が他方で求められてきた。これは生命が求めるバランスである。ものばかりによって生きていくことに、窒息感を感じるのは通常生命感覚であろう。したがって世界の歴史の中で思想的財産を豊かに生んできた時期は、文明が始まったあとであったことも、文明が物質主義であることの反証ではなく、むしろ証拠なのである。つまり思想がかたちをもって形成された理由は、それを必要とする状況があったからであって、人類の精神的発展とか、進歩によるものではない。キリスト教も、仏教も、イスラム教も、儒教も、文明が生みだしてきた。あるいはギリシア世界においては、ものの交換が行われている市場のそばで、哲学的な意見の交換が行われてきたことは、ソクラテスの活動としてよく知られている。じっさいソクラテスによる市場での活発な意見の交換がヨーロッパ哲学の土台となり、科学思想を含めてヨーロッパの思想を創造してきたことは良く知られた事実である。

このように、人間はいのちの交換の場から離れて、ものの交換を基礎として生きることになった。しかしそこに生じてくる矛盾(内的葛藤)を受けて、自分たちのこころのバランスを思想(意見)の交換によって相殺してきたのである。しかしバランスとして生じ、発展してきたのは、思想ばかりではない。いわゆる文化一般がそうなのである。じっさい、いのちの交換の場から離れることは、離れてしまった人間の目から見ると「楽になった」と思われるが、けっ

してそうではないのである。食物が人為で作られることになる、食物が手に入る喜びや感謝がすっかりなくなる。人為であれば「できて当然」となり、「つくる苦勞」のほうが目立つことになる。こうしてつくられたものは、「いのちの交換」を実現するのではなく、つくる側に立った人間の所有物として一方的に消費されるのである。

LM コメント

「人間はもともと生命なので～」という言い方に、私はほとんど本能的と言っていいほどの否定感情を持つ (批判している余裕もない、と言う妙な言い方をしたくなる)。テレビで、おそらくNHKの自然科学番組だけではないだろう、「私たち生命」とは常套句だ。「わたしたちの祖先である最古の哺乳類」とかいつてCG動画で鼠のような貧弱な生き物が示される場合には、何か侮辱されたような気さえる。これはなにもLM特性などでは無く、ほかの方々にも起きて可笑しくない反応ではあろう。では、「酔いしれていることはできない」当の主体も「生命」だというのであろうか。土台かつ所詮、単なる生命が物質的世界観を形成したり]逆に「酔いしれておれない」とか、そんなことがあるのだろうか。なにしろ「植物が、人間が自分たちの世話をするように仕向けた」などの言い方をする八木なのである。植物に特別の知性があるという前提を用意することもなしに、である。それでいながら、人間については「人間の知性」とか「人の意識」「人の精神」という言い方を頻りに繰り返してきた八木なのである。

ところが、知性、意識、精神などは、土台かつ所詮、「生き物・生命体」でしかない人間の付属物である、という基本姿勢は、この書物の著者として、頑ななまでに強固である。そのわけについては最後の「総括」において述べるので先をいこう。

続く「したがって世界の歴史の中で思想的財産を豊かに生んできた時期は、文明が始まったあとであったことも、文明が物質主義であることの反証ではなく、むしろ証拠なのである」とは、私の上記の指摘は別として、卓見であろう。八木のオリジナルかどうかは知らないが、人類の歴史のからくりが読み取れなければ、このように堂々と叙述することはできないだろう。だが、その力強さは「ひねくれた心による偏った認識」だからこそのものではないか。続く「人類の精神的発展とか、進歩によるものではない」という言い方は、そのことをよく裏打ちしている。こうして、思想から料理まで、人間の上質部分を喜ばす文化一般が黒く塗りつぶされてしまうのである。八木によって。

17) 「科学の変貌」全文、その一 P220

このように、一方で国家権力と経済の結びつきは古代からあったものであるが、科学と産業の結びつき、および、国家権力と科学の結びつきという近代の特長(LM:特徴の間違いでは?)は、じつは中世において準備されたものなのである。このため、近代以降、経済は科学技術を得てヨーロッパから爆発

的に発展することになった。そして繰り返し述べてきたように、国家は権力の基盤を経済に置くものであるので、経済の発展は、国家権力の爆発的発展となった。しかし、そのために人間は自然との和解の道をさらに狭めてしまったのである。なぜなら、すでに述べたように、科学や宗教という文化は、本来、自然との和解を目指す活動であったからである。ところが、その科学が経済と言う国家権力の基盤と結合してしまった。ことに科学と経済の結びつきは大問題であって、本来、科学は、人間が自然から離れ、自然の恨みを買ってしまった怖れから、「自然との和解を目指すため」に求められたものであった。自然宇宙を理解することは、欲望の実現のためではなく、純粹に知ることだけのために求められていた。いまでもこの伝統はアカデミズムの中に続いている。ところが、今や、現実の産業社会においては、科学が経済と結びついて、文明に奉仕する科学、言い換えれば、市場経済に奉仕する科学に大きく変わってしまったのである。

LM コメント

相変わらず、丹念な語り口調であるが、上記、二か所の下線箇所には矛盾があるようである。

科学について「(自然を)純粹に知ることだけのために」と「自然との和解を目指す(ため)」とは全く別の事だろう。純粹に知ろうとする姿勢があれば、その後の和解にせよ諍いにせよ支配にせよ気にすることは無いし、逆に和解の為だったら、純粹な知的探究と言うよりも、好意的解釈に始めから傾いてしまうだろう。というのは、知的探究とかの自然への姿勢に対し、自然がどのような態度をとり反応して来るか分らないし恐ろしいからである。むしろ欲望実現のための方こそ、敵となった自然対象への冷静な見極めが必要となるので「純粹な知的探究」に相応しいモチベーション(動機)となるのではなからうか？

このようなことを考えてくると、科学や宗教と言えるようなものがまだ形すら成していなかった頃の、それでも猿よりは数等、高度の意識、知性を持った生き物にとっては、彼らを取り囲む自然宇宙は訳の分からない恐ろしいものであり生態系の面倒を見る余裕などなかつただろう。その漠然とした空気のような恐怖に加えて、植物をはじめとする環境から身体への毒の侵入や、他の生き物の来襲や、他の人間集団からの攻撃など生々しい恐怖が募る中、人々は生き延びることで精いっぱいであり、その隙間に多少の贅沢を楽しんだりしていた程度ではなかつたか。遊びやコミュニケーション等々であろうか。いや、安心して怠けられること、ゆっくり眠れることが最高の贅沢だったのではないか。究極のそれは女性であること(ともかく、ハ木の言う植物の促しなど、たとえあつたとしても馬耳東風だったのではなからうか)。

先史以来生きる困難と恐怖がベースの人類であれば、ずっと後代、文明が経済と結びつくのも科学が経済に奉仕するのも、そもそも国家が成立するのも、欲望充足もあるが先ずは様々な恐怖を締め出すためではないのか。宗教については現代と同様、心のケアであり、

恐怖心に直接向き合うところから始まったものに違いないと思える。このように考えてくると、八木の生態系存在論などどこかへ行ってしまふような気さえて来るのであるが、最後まで読み進もう。彼の労に報いよう。

18) (承前) その二

こうして科学は、自然を知ることを通じて自然との和解を図るものではなく、反対に、今では自然を理解することで自然を難なく利用するための「道具」になってしまっている。この道具は、ひたすら経済に即した「物質主義」に人々の世界観を導いている。すなわち、現代においては、市場経済が世界を襲うことになるにつれて、科学的理解とは、物質的な宇宙理論であり、世界の物質的理解であると、多くの人々が信じるようになっていく。しかも、そこに神はなく、人間だけが支配者として君臨する。つまり人間精神だけが物質的理解からまぬがれた、奇妙な世界観が一般化しているのである。いわゆるデカルト的二元論である。文明社会の人々は、この世界理解は、この世界理解に基づく科学の成功によるのだから、疑うこともできないくらいの真理なのだと確信している。

ところが、この物質的世界理解はもともと市場が扱う商品の性格と一致する。すなわち、市場の働きによって、「食べ物」までもが生きていることを失い、「物体」として扱われるようになった。市場を通じて食料を得ている文明人は、それゆえ、自分たちは物質によって生きているという印象も持つのである。したがって、科学が技術的成功を収めていくことと連動して、市場が世界を制覇していくに従い、文明人は、世界は物質的であることを当然のこととみなすようになった。つまり、文明人はこの自然世界を、市場で扱う商品の集まりのように、無意識に了解しているのである。そのため文明の中心にいる人間は、それだけ生命世界を理解する力を失っている。日本でも霞が関に在る役人の中には、きわめて優秀な能力を持ちながら生命の理解を全く欠いているものがいて、平気で生命的世界を破壊しダムや道路をつくり、そのことに悩むどころか、それを誇る、という現象が見られるようになったのである。

LM コメント

下線部については、“なるほど、一度成功した世界理解は、科学によるものである限り成功し続ける。”という寸法らしい。

人々のトートロジー(思考の堂々巡り)が良く示されている。だが、ここまで読み進んでこられた読者の方々の中には、八木の文章がそもそも丁寧すぎて、トートロジー気味であることに気づいておられるはずなのである。“自然は良いものは自然は良いものは自然”と“文明は悪いものは文明は悪いものは文明は”とのコントラストを利かしつつの繰り返しが、長い叙述の

リズムを支えているのである。この行き方は催眠術にも、また植物の生にも繋がるものであるが、八木がそれを意識的に模倣した部分よりも、持って生まれた資質によるところが大きいように思える。大方の読者にとっても、特に日本人にとっては快く、また斯くいう私にとっても、実は快い。

後段について：

「生き物の物体化」と言っているが、人間主体の側から見直してみると、対象物の自己への徹底的な引き付け、手元への引き付けであり、自分の思い通りのものに変えて行こうとする営為に必要な態度だろう。これは何も、“元生き物”相手と限ったことではないのであり（最たるものは芸術活動）、私は、むしろ料理の誕生と発展を人類の一員として自画自賛したいぐらいである。なぜなら、それによって、（ブツツツシテノ栄養についてはともかく）元素材の生き物、とりわけその「善美」は一層生かされることになるのだから。霞が関のご病人は、また別の話ではなからうか？

19) (承前) その三

すでに述べたように、生命は二重螺旋の構造によって特別な世界を切り開いている。それは物質世界とは全く別次元の世界である。ところが世界の市場化を通じて人々は、世界は物質的次元でのみ理解されるものだと思い込むようになった。このためか日本では人間の身体を機械にして人造人間を作り、だめになった身体部分を取り換える、という発想の漫画が生まれている。市場化が進んだ世界に生きる人間には、自分の身体が生命体であるということが、わずらわしくなったのである。言うまでもなく、それは人間の思考が機械化され、機械的に理解しがたい身体がわずらわしく感じられるようになったことを意味している。市場化が進んだ世界に生きているわたしたちは、それほどまでに生命的理解を失っているのである。

じつはそのために、わたしたちは市場経済を通じて収入を得ようとすれば、自然を破壊する道を突き進むほかない状態におちいつている。なぜなら、私たちには本当の意味での生命の理解がないからである。つまり市場経済は投資によって発展するが、そこにもられる計画の立案に際して、投資先にある生命世界を考慮することが、本当はできなくなっているからである。というのも、わたしたちは、工事を行う際、科学的であることに執着していて、その科学が真実には生命世界を理解するよりも、生命世界を「物体化」して理解させるものであることを見落としてしまうからである。ところが、実際に破壊され、崩壊状態に追い込まれているのは、物質的宇宙ではなく、生命の世界である。

LM コメント

「自分の身体が生命体であるということが、わずらわしくなったのである。」という指摘は当たっているが、それは何も文明が始まってからの事とは限らないだろう。その度合いが増してきていることは確かであるが、文明の始まるはるか以前にあっても、排便など、生命体であるが故の煩わしさは、人間だったらあったのではなかろうか(ただし、「生命体」という認識があったかどうかは別問題)。

また、生命と言うものが強調されているが、ハ木の場合、それはあくまでも自然に属するものに限られているようだ。だが、生命を愛するからこそ第二次、第三次の生命を編み出さずにおれない、と言うことがあると思う。「文化」とか「芸術」といった文言が用心深くどけられている本書を読んでいて、大きな、また多くの犠牲の上にこの論考が成り立っていることは明らかだ(“それらは本物の生命を破壊しつつあることに対する免罪符に過ぎない。”と彼は繰り返すかもしれない)。だが、それは肉を切らせて骨を折る覚悟あつてのことかもしれない。ハ木は真剣だ。先を読もう。

20) (承前) その四

物質に関していえば、人間が破壊していると言えるかもしれないのは、原子核を壊してエネルギーを得る場合ぐらいであろう。わたしたちが大地を切り崩し、川や海を埋め立て、化学物質をまき散らし、森林を伐採して壊しているのは、たんに物質が存在している世界ではなく、生き物が生きる世界なのである。それにもかかわらず、わたしたちの科学は物質的世界理解の無謬性を宣伝して誇っている。これはほとんど愚劣としか言いようがない。とはいえ、わたしたちがほとんど無意識に無謬であると思いがちなこの科学的世界理解にも、中世以来の科学と産業(市場活動)の結びつきと言う偶然的な歴史が密接に関わっている。このことは、ぜひ知っておくべきだろう。なぜなら、わたしたちの「科学的理解」がこのような偶然的歴史の上にあると知ることは、私たちが相変わらず本当は「井の中の蛙」であることを知ることだからである。

しかし、それを引き起こしたのがイスラム教であったという事実は、現代においては皮肉にすら見える。なぜなら、歴史上、はじめて科学と商業を結びつけたのはイスラムであったが、今では、神を忘れた商業主義に対して最も激しい怒りを表しているのは、そのイスラムだからである。とはいえ、すでに述べたように、イスラムは商業に宗教的枠をはめたのであるから、西欧文明がこの枠を取り払って、ただ科学と商業を結びつけることのみをまねたことをイスラムが非難するのは、イスラムの立場からしてみればもっともなことなのである。

とはいえ、このような歴史が受け継いで現代の文明人の多くが、あるいはむしろ科学者や哲学者が、科学を無謬扱にする。科学は対象に即して対象を理解するものであると信じきっている。しかし、一般に科学には、口にされていない

い前提があるのであって、その前提のもとに誤謬がない最善の方法がとられているだけなのである。その前提とは、数量的に処理できる範囲でなら、科学的であることができるから、世界の実質は数量的なものですべてであると考える、という前提である。しかし、この前提が意味していることは、科学は文明の道具に過ぎない、言い換えれば、人間の欲望の道具に過ぎない、ということなのである。なぜなら数量には主体がないからである。それは自己である主体によって、いかようにも用いられることが前提なのである。したがって科学はもともと、世界のすべてが人間に支配されることを前提にしているのである。

LM コメント

彼の視野の広さには敬意を表したくなるぐらいだ。

八木の知識の広範であること、また主張したいことのためにそれらを自由自在に運用する知力も素晴らしいと言える。肝心の言っていることも、ここでは概ね首肯できる。ということは逆に言えば、識者には分りきったことかもしれない。まったく、現代に於ける科学の傲慢と、科学や科学技術に対する信仰から依存、阿りまで、腹立たしく思うのは何も八木ばかりではないのである。

その中で、善と悪、美と醜、更に真と偽が複雑に錯綜しているのが、後段で八木が指摘している部分である。

このようなデジタル化については、近いところではCDによる再生音楽の良し悪しに拘る向きもあろうが、私としては、なんといってもバッハの音楽について取り上げたい。

バッハの音楽と言えば常に、自分自身(彼はプロテスタント教徒である)を神の支配下において書かれた音楽であり、その限りで多様な作品が量産された。

どの曲も高いレベルが維持され、いい加減な作品が一つもない。しかし、聴きようによっては最終的な設計図がすでにあってそのとおりに音の建築物が建てられて行くといった間接性が先に立つ。善美は度が強いほどに安定的に供給されるのであるが、直接的な生命感~~は伝わってこない~~。その代わり死んで腐るような心配もいらない。方眼紙の上に書かれ設計図の影というか、硬いコインのような感触というか数学的感触というか、数量化された商品価値と言うか、そういったものが感じられるのは、作曲と演奏の間に異常なほどの境界がでんと構えているからだろう。というよりも、作品の中にすでに音楽はしっかりと仕込まれており、あとは楽譜通りに間違いなく演奏すれば結果はついてくる、といった超上等ではあるがインスタント食品のような性格がある。

だからこそ、バッハ(もちろん音楽の父であるあの大バッハのことである)の音楽は信仰心の無い演奏家が演奏しても信仰心が伝わってくるし、信仰心の無い人が聴いても、なにやら善美を覚えることができる。

そこで、この事態を前段の「イスラムは商業に宗教的枠をはめたのであるから、西欧文明がこの枠を取り払って、ただ科学と商業を結びつけることのみをまねたことをイスラムが非難す

るのは、イスラムの立場からしてみればもつともなことなのである。」ということと照らし合わせてみよう。

バッハがイスラムに当たるというわけであるが、現代の自作の扱いを見て、バッハはイスラムのように非難するかどうか？むしろ、自分をイスラムにたとえたLMをこそ非難するかどうか？いずれにせよ、興味のある視点であるし、こういう視点をもたらした八木の論考は、やはり深い、と私は思う。

21) (承前)その五

わたしは自然のなかに誕生した人類は、その発達した脳によって生態系の多様な生物種を霊的な仕方で理解する能力があったに違いない、と結論した。そして文明が始まると、その能力を、ただ「人間のために用いる」ことで脳を委縮させてきたと推論した。現代の文明人は、数理科学の絶大な成功によって数理科学ほど優れた能力を必要とするものはないのだ、と確信しがちである。しかしわたしの理解では、数学のように、特定の原理原則によって構成した（公理形式の）世界を理解することは、必ずしも能力の優秀さを示すものではない。なぜなら、公理は極めて単純だからである。これに対して、生命の真理は、三次元の事実を超えた世界に通じているかもしれない。そういう世界、すなわち、原理原則が複雑多岐である世界を理解することの方が、多くの能力を必要とする、とわたしは考える。

いずれが正しいか、ということは、たしかに結論の出ない問題である。なぜなら、原理原則が単純であっても、ちょうど同じような単純なゲーム、たとえば囲碁のようなゲームが、ほとんど無限の展開を可能にしているように、どちらが優れているかを判定するかは（1m：のは、の誤りであろう）難しいことだからである。ただし、私は人間がもって生まれた能力は自然の進化の過程から見ても、けっして数理的演算能力ではなく、むしろ霊的理解能力であると考えている。人間はこの理解を推し進めることによって、はじめて自分の脳を完全にはたらかせることができるのであって、ほかの道を取れば、それは脳を委縮させ、幻想を産みだし、多くの精神的病気が生じると考える。わたしは現代とは、その最終段階ではないかと考えている。

LMコメント

語られている数理的演算能力は、その人自身の持つ機械的（コンピューター的）な能力と言うことが出来よう。この方については、現代人は（コンピューターの分を差し引いても）文明化以前の人々よりも比較にならないほど優れているのであり、委縮ではなく拡張（膨張）していると言えまいか。

だが、一方の霊的理解能力の方はどうだろう。問題は理解の方でなく霊的の方である。霊的な方は、むしろ霊的なものが外から入り込んでくる“隙間”をその人が持っているかどうかの方が大切であろう。もし、能力という言葉を与えられるべきは、むしろ入り込んでくる霊の方か、さらに言えば霊を受信する側も入ってくる霊も含めた“大きな環境としてのシステム”(その人の感受性ですらなく)である。

このように両面を公平に見れば、八木のように端的に「脳の委縮」等々と言いつつのは、“価値観の濫用”だと言いたくなる。

22) (承前) その六

したがってわたしの見るところ、科学が教えるものは、真実のすべてであるかに見えて、ひとたびその前提が問題になれば、科学は砂上の楼閣に過ぎないことが明らかになるだろう。そしてその科学に支えられているわたしたちの生活も、一見、真理に即した生活であるかのように見せて、じつはけっして盤石の基盤の上にあるわけではない、ということが明らかになるだろう。それを人々は文明の日常の中で見落としがちなのである。それはちょうど、まるでわたしたちが無限のエネルギー源を手に入れる力をもっているかのように大衆に思わせて、じつはねずみ講のように、必ず限界(終わり)が来るのであって、そのときには、突然何もなくなる、というカタストロフィー状態になることがわかっているにもかかわらず、しばらくは大丈夫だと考えている、現代の権力者のようなものである。生命世界の理解を欠いたかれらには、そのおそろしさが理解できないのである。

宗教が経済に制限を加えることを忘れ、そして何よりも、科学が世俗を離れた孤独な探究を忘れ、科学と経済が結びついた結果が、このような矛盾をはらんだ文明の基盤をつくりだしている。わたしたちがこの矛盾から抜け出すことができるかどうかは、わたしたちのこれからの運命を確実に決めている。なぜなら、このまま行けば破滅しかないことはわかっているからである。よく言われるように、わたしたちの社会を動かしているものは競争原理である。しかし**競争原理は自然淘汰の原理であって、進化の原理ではない**。自然淘汰とは、多くを消すことである。言い換えれば、競争を通じて起こることは、優秀だとされている少数のもののみが生き残っていく、ということである。競争を通じて、人間は今のところますます世界にある土地占有を広げている。手つかずともいえるジャングルにまで道路を通し、畑を広げている。これによって、まずは人口が爆発的に増加する。しかし爆発的に増えた人口は、人間どうしの競争を激化させる。これは疑問の余地がないのである。他方、人間を養う力をもっている生態系は貧弱となり、人間を養う力を失っていく。それゆえ、競争原理はい

ずれ人間の数を減少させ、絶滅に導く。かつて恐竜は植物の退潮によって食料を減らされ、そのためにお互いの間で生き残りの競争を余儀なくされ、絶滅していったと考えられる。それと同じことが、人類にもすでに起こっているのである。そしてそれは、一万年（文明の誕生）から植物が決めている人類の絶滅作戦に、このままわたしたちがまんまと乗ってしまうかどうかの問題でもある。おそらく植物は、人類は文明の道にはいってしまえば、後戻りはできなくなると踏んでいるのである。人類はただ「いい気になって」絶滅の坂道を転がり落ちていくことを、かれらは知っているのである。

LMコメント

この部分は他（ハ木以外）からでも聞かれるものであり、大方、首肯できる。

ただし、次の文章の直前までである。

競争原理は自然淘汰の原理であって、進化の原理ではない。

そうだろうか？

ひまわり畑を見るがよい。結構密生して植えられているのは、隣り合った者同士が葉がこすれあうことで伸びる勢いが増すのでそうしているとのこと。「いじめ合いをさせることで、あれだけ背が伸びるのだ」と。

むしろ、競争原理は進化を煽るからこそ、全体のバランスを損ないやすい、とすべきではなかろうか（大阪万博の折の「人類の進歩と調和」という標語にたいし、「進歩と調和は両立しがたいのでは？」との批判があったが、その理屈である）。

競争は自己鍛錬の強力なモチベーションとなるが、これだけ専門化の進んだことで、各種の職業病的な精神疾患が増えていることは周知の事実。職業の多様化を生態系での多様化と一緒にして喜んでいる場合でもないだろう。また、異種職業人同士の相互理解も難しくなっている。この人工的都市環境の中で、文明の枝は伸び放題に伸びつつ細分化を続けている。良くも悪くも、進化は進化、進歩は進歩なのだ。そしてそういう事態を起こしている人類は、まさに自然進化の最前線にいるのだろう。異常に発達した脳は自然の進化圧（ハ木の使用概念）によるものであり、その脳は文明へと突き進むほかなかったのだろう。それは必然的というか、ごく自然な流れとしか言いようがないではないか？

最後の下線部は、表現としては面白がることもできるが、真面目には次のように言うほかない。

「最後の『植物』は、ハ木の化身みたいなもので、彼が本気でそう思っているとしたら、精神を疑うほかはない。」と。

23) 「生死の価値観」より p234

したがって人間が文明を持つようになって価値観がどのように変わったか、

ということをまず客観的に明らかにしておく必要があるだろう。なぜなら文明人の考え方が単純に間違いであることを証明しても、日頃自分が生きている社会が、反対にそれを正しいと見なしていることにつねづね接していると、ふつうの人間は証明されたことの意味がわからなくなるからである。たとえばソクラテスが処刑された裁判で、かれは「死を恐れる理由はない。なぜなら、死は良いか悪いか誰も知らないからである」と明瞭な証明を示している。この証明の明瞭さは、次のように考えてみれば明らかである。つまり、確かに生きている人間は、だれも死んだことがない。死についてはだれもが未経験である。知っているのは他人の死だけである。ところでわたしたちが「知っている」ということが出来るのは、信頼のおける人からその人が経験したことを聞いた場合、たとえば親から、あるいは先生から教えられた場合、あるいは信頼のおける著者の本で知った場合か、それとも自分が実際に経験した場合か、そのいずれかの場合だけである。それ以外は、わたしたちは「知っている」と言うことはできない。

LMコメント

「死んだ人なんかいないのだから、死については誰もわかりようがあるまい。」とは現代においても普通の人の普通の思いだろう。ソクラテスの言っていることも、半分はこれに重なるわけであるが、“どうなるかわからないのだから泰然自若と成り行きに任せればよい”という楽天性はやはり度外れた胆力(勇氣)に支えられているに違いない。

それでも真正面からの「死の考究」に成っていないことは誰の目にも明らかであろう。

これについては、LM本文(最後の「総括」)にて詳しく語ろうと思う。

ここではもう一つ、終りの下線部が引っ掛かる。

これでは、ハ木は人間のことを「学習能力付きの生命体に過ぎない」と見ている、と思われるでしょうがない(すでに“意識がある”とはしているものの、“価値あるものとしての個性”を人に認めていないからである。)

やはり、彼の人間哲学には何か足りないのである。人間とはそんなに詰まらないものであろうか？ LM程度であっても、こうして自分の頭から第一次情報を生産し続けているではないか。ハ木好みの“物体化される以前の生き生きした観念”を、である(cf.LM造語としての「天然脳」)。

欲望以外、内発的なものは何もないのか。ましてや“善美など体験と教養の蓄積を経て、はじめて獲得できるものだ”とでも言うのだろうか。

これについても大事なことなのでLM本文(総括)にて詳しく語ろう。

よく、「彼は単に生きるために生きているだけ」と言う言い方があるが“生態系は純粹に生を自己目的とする集合であり、したがってそこへの参加者である人類も人々も個人も、この自分(ハ木雄二)のようにそこから託された任務を全うすることが天職だ”と初めから決まってい

るのだろうか？

24) (承前)

ところで、すでに述べたように、人間は誰も死を経験していない。したがって人間はみな、死が良いものかどうか、事実としては知らないのである。いくら科学技術が進んでも、このことは当ても今も変わっていない。したがってソクラテスの行った証明は自明である。それにもかかわらず、ソクラテスからこの証明を聞いた当時の文明人は、その証明の意味をよく理解することができなかつた。というのも、文明の価値観では、死は恐れるべきものでなければならぬからである。なぜなら、文明は競争原理を絶対化している。その競争とは生き残るための競争である。人間が土地の占有という、自然に反する生き方を始めた時、人間は「生きるため」ということでその不法を正当化したのである。ところで生きるための競争は、死を恐れることを必ず他面にともなう。なぜなら死を格別恐れないなら、生きるための競争は、やる必然性がなくなるからである。じっさい生きるも死ぬも同じことと思うなら、無理に競争することはない。競争はただの遊びで十分になる。それゆえ、優劣を競う真剣な競争は、生を求め死を恐れることを動機にもつことで、はじめて有効にはたらく。じっさい死を恐れないなら、だれも命がけで戦うことはないだろう。なぜなら、死んでも別段かまわないなら、生きるために守らねばならないものは何もないからである。ところで、もしもどんな競争も、命がけではなく、たんに遊びでしかないなら、競争は真剣なものにはならない、また、文明の基盤である土地所有も、命がけで守るほどのことではないと知れるなら、いつでも気ままに放棄されてしまうだろう。そうなったら、文明は成り立たないのである。

LMコメント

これも、可笑しい。死への恐れは文明以前の、自然的人類には無かつたとでもいうのだろうか。

彼らだって、仲間の死の遭遇し、涙を流したのではないだろうか。ということは自分もそうならなくてはならない運命を悟り、死を恐れ回避しようとしたであろう。早い話、動物でも、死の観念は無くとも、死をもたらすような物事を避けようとするではないか？「小さな虫にも五分の魂」というではないか。

こら辺の部分は話が落ちすぎているように思う。「どうしたハ木！」

哲学者は“思考の穿ち”をも得意とするものだが、それによって一番大事な全体像に穴が開いてしまうことがままある(cf.裁判員制度採用の理由)。

ハ木のほかの著作は褒める人でも、この著作について聞かれれば言下に「あれはダメ」とい

なされてしまうかもしれない。このような部分を読むと、そんな光景が浮かぶのだが。

ここより

第2冊 (=第2部)

25) 「真実の『ある』を見いだすこと」よりp3

わたしは自分の生を真実の上に築きたいと願う。この願いは、生に対する誠実さによっている。したがってそれは誰もが願うことであり、人間一般の願いである。わたし一人の願いではない。それゆえ、人間一般にとって真実に「ある」と言えるものこそ、人間の生を真実なものにするために欠かすことのできないものである。それゆえ、それを見出すことは、人間一般にとって最も大事なことである。この仕事は人間の生を真実のものにするための仕事なのであるから、人間の仕事において最も崇高な仕事だと言える。この仕事をわたしは「存在論」と呼ぶ。

ところで、わたしたちの周りには数々の出来事が起きている。わたしが第一部で明確にしたのは、わたしたちが気づいているかどうかは別として、わたしたちの生がどのような活動によって支えられているか、ということである。ある活動はわたしたちの生を真実なものにしている。ある活動はわたしたちの生を欺瞞に包んでいる。それゆえ、その中から真実の「ある」を見いだすことが、わたしたちの生が真実となるために必要な「存在論」を構築する仕事となるのである。

LMコメント

「人間一般」という概念使用により「一人一人」つまり個人というものが忘れられがちである。一種のグローバリズムが八木の観念にも及んでいるのではなかろうか？

八木にとっても、本当は。人間一人一人が各自にとって掛け替えのない「存在論」を持つことが理想だとする思いはあろう。だが、そのようなことは不可能であるし、もし世の中がそのような崇高な人間ばかりだったら。今度は社会というものが成り立たなくなってしまうだろう。となると、やはり誰かが、たとえば八木がそれを提起し、人々はその既製品たる「存在論」に自分の頭や心を合わせなければならなくなる。つまり、八木が嫌いな「文明」ならずとも、無理をゼロにするということはできないのではなかろうか？

26) (承前)

ところで、多くの人が、世界の見え方は単純にその人の心理状態ないし価値観によると考える。しいて言えば、その人がどう思っているかで、世界はバラ色にも暗いものにも見えると信じている。したがって、要は心理状態か価値観の違いであり、それは各人の勝手なのだから、気にすることは無いという主張が、未来に対する無責任な態度として文明社会の中に広まっている。わたしは、この考え方は正しくないと考えている。わたしたちは、事実を前にして、すなおに、それを「そうである」と言うことができなければ、事実即して生きていくことはできないし、事実即して生きていくことが出来なければ、真実に生きることは望めない、ということが、むしろ自明なことであると考えている。このことをどうでもいいと思う人は、自分の人生を投げているのであるし、事実上、死んでいるのである。

LMコメント

この部分、著者自身が善美の人であることを、想像、少なくとも期待させるに十分な意見であろう(それでも、「各人の勝手なのだから、気にすることは無い」といったごみのような意見、考え方を無視しきれないところに、八木の優しさが現れている。なお、これについては最後の総括の「死」に関する節をご参照いただきたい)。

ネットで見られる膨大な数の主観的、恣意的な物言い—その中には匿名でなければ言わないだろうところの、語調が乱暴で内容は薄弱なものが多いが—を否定する力すらある。

だが、こと芸術の存在理由、必然性といったことについては、この観点はそれらを不利に追い込む側につくものではなからうか？

いずれにしても、八木は世の中の人々の心のいい加減な部分を抽出しているのであるが、いい加減さは変化しやすさ変化させられ易さを持っていて、それが関係しあい、相互にバランスを取り合う機能を持つことにもなっている。時に一体となって極端な方向へ動く危険も孕んでいるが、その時にこそ思慮深い者の「存在論」に立脚した発言が、危険回避の上で物を言うのではあるまいか？ 要は、八木(のこの著作)がそこまで到達しているかどうかなのであるが？

27) 「真実の存在論を見いだす道」より p 13

そのよい例が現代哲学である。ヘーゲルにしても、ハイデッガーにしても、その哲学が持つ傲慢さは目に余るというべきであろう。かれらの哲学の特徴は、主観の絶対化であり、世界を進歩させるのは主観しかない、ということに尽きる。人間がとりがちなこのような傲慢な態度は、科学を理解する時、限界を意

識して科学を理解するのではなく、彼らが科学を絶対化して理解しようとすることに現れている。じっさいカントにしても、単純に万有引力の理論を絶対的な理論として扱う。ヘーゲルは西洋の思想史を絶対化する。ハイデッガーにしても、西洋の思想史的起源こそが人類すべての意義のある思想の源泉なのだと考え、何の疑いも抱いていない。それゆえ、想像ではあるが、かれらは、たとえば土の中にいる微生物について、私たちが知っていることはほとんどない、ということをおそらく理解できないのである。かれらは、科学が到達したこと、哲学の研究にしろ、心理学の研究にしろ、その成果のみを語って饒舌なだけである。それはまるで、過去の自慢話ばかりに余念のない年寄りのようである。

LMコメント

“哲学の自律、哲学的思考の自律”する様は、人間知性の輝く姿ではないか？

それらは、語られる内容は普遍志向的であろうとも、作品としては土台かつ所詮「虚構の個」なのである。著者（八木）はその面を見落としていないだろうか？自分のこの作品を物するに当たって、そのことに無頓着でありすぎないだろうか？

確かにここで八木に批判されている連中の著作には主語がある。述語性のまえに主語性がでんとのさばっているさまは、あたかも男の鼻、ユダヤ人の鼻のごとしである。

一方、八木の文章には主語の印象がかなり稀薄である。

あとがきに、自身の著作に「あまりにも高飛車な態度」と言われる可能性があるとしている八木ではあるが、ここで言ってしまうと、私にはそれほど高飛車とも思えない。ただ、「高飛車に出ているつもりなんだらうな」とは思える程度である。

したがって、この引用部分は、外国人の派手さ、激しさと、日本人の地味さ、おとなしさを浮き彫りにすることにもなっているが、ご本人はどういうつもりなのだろうか。このLMコメントに強力に反対できるとは思えないのだが。

28)「原因論ではない存在」よりp34

これに対して、**パルメニデスの存在論**は、まったく原因論を含まない。世界を操作する道筋をもたないのである。つまりパルメニデスこそ、西洋の伝統のうちに真理の厳かさを持ち込み、その真理の指標として「存在」を語った最初のひとであった。他方でソフィストをはじめとして、アリストテレスもその一角を占めている原因論の思想は、近代科学に発展する思想である。その思想では、真理というものは、人間が見つけ出し、利用して、好き勝手にするためにある。これに対してパルメニデスにとっては、真理というものは絶対に「動かしたがいのもの」なのである。人間はこの世の経験のうちで真理に出会う。しか

しそこで出会った真理は、物品のごとく、捨て、つかみあげて、どこかへ持ってゆくことができるようなものではなく、心底から畏れつつ、人間は「ある」というほかない、と言うのが、かれの主張である。わたしたちはこのかれの主張の本質を、決して見落としてはならない。

かれは詩のかたちでかれが味わった精神的できごとを語っている。それによれば、かれは、闇に包まれた地上の世界を通り抜けて、天上の世界に飛翔し、正義の女神が門番をつとめる大きな門戸をくぐったという。そして門戸をくぐると、天上世界の主人であるらしき女神があらわれ、その女神から真理の道を示されたという。真理の道では、「ある」は不滅にして不変、同じままであると言われる。パルメニデスが女神から示されたその「ある」こそ、存在論の源泉となる「ある」にほかならないのである。

LMコメント

著者ハ木は、自然はある。生態系はある。植物はある。人類はある。と、誰でも現実と信じるところを「ある」としているが、ギリシア哲学の元祖の一人の理念的・観念的思索を経た抽象の極みといってよい「ある」概念とは雲泥の差があるのではなからうか？

自然、生態系、植物、人類などは、決して決定過去の箱(墓)に入れられるようなものではなく、<ありつつある>ものであり、「なる」の連続であり、生成なくしては一瞬も存在しえないものたちではなからうか？

ハ木の体系づくりの道具としてパルメニデスの考えから概念まで持ち来っているのだろうが、私 LM は、ここまで読み進んだ段階で非常な無理を覚えざるを得ない。

パルメニデスの存在論は、ここだけ読んだLMに言わせれば<真正の存在論><存在論中の存在論>と呼びたくなるようなものだ。

29) 経験される—「存在」 現象学との対比」より p58

しかし「経験」を問題にすると、言うまでもなく、「実存」つまり「現に在る」ことが問題になる。なぜなら現に在るものに、わたしがその実存において遭遇することが、私の経験を成立させ、遭遇したものの本質がなんであるかは、経験を通じた認識の課題となるからである。ところで、現に在る、という実存の性格を持つことができるものは、個体でしかない。その個体の実存に遭遇することができるものも、「わたし」という個体でしかない。

ところで、わたしがわたしという個別性を超えて普遍に達することができるのは、わたしの認識が、わたしのなかで何らかの意識的努力(吟味)を通じて普遍化され、わたしだけのものではなくなったときであり、そのときわたしは、はじめて「本質」に達したと言われるのである。

LMコメント

ここはいかにも下から上への思考方法であるが、人間というものは自分自身の心身を通して現象を事実と受け止め大事にする一方 (だからこそ、悪いことであれば深く傷つきし拘り続けるところともなる)、あまり上の世界は意識しないものである。その意味で著者は、普通の人に始めから合わせているのか？ 普通の意味での哲学者らしくもなく、上から下へとただの“一球”も投げ込もうとはしない。“わざわざ合わせているわけではない”のだとすれば、もともと普通の人なのか？ それで、哲学を果たせるのか？

むしろ、通常の哲学、わけでも西洋の哲学には希薄であるところの<謙虚さ>こそ八木の美点なのかもしれない。ピッチャーと違うキャッチャーの美德。すべてを受け止めそこから吟味を開始する謙虚さこそ、ということなのかもしれない。だが、その謙虚さを相殺するほどの強引、安直、要するに傲慢さが大切な仕事を邪魔し、読み手への本質伝達を邪魔してしまっている。本当に惜しいし、もったいと思う。ほかの読者の方！ いかがであろうか？

30) 「存在論のための人間論」よりp70

存在論を展開するために、あらかじめ人間論を展開しなければならない理由については、すでに述べたとおりである。一般にこれまで存在論と呼ばれて来たものは、およそ「ある」と言われる限りでのもののすべてを、一般的に統括しようとするものであった。存在論は、プラトン以来の伝統として、「存在であるかぎりの存在」を対象とすると、言われてきたのである。しかしどれほど長い伝統として是認されてきた命題であるとしても、これは間違いだとわたしは考える。すべてを統括する存在論を追求することは、結局は全存在の道具化を論ずることに過ぎず、無邪気に世界支配を実現しようとする人間の愚かさに従うことでしかない。これに対して真正の存在論は、人間が、「ある」と答えなければならないものを知るために考察される。真正の存在論は、人間が「ある」と言わなければならない「ある」を見きわめようとするものである。それゆえに本来の存在論は「人間」が「ある」と語るための基準でなければならない。

LMコメント

「すべてを統括する存在論を追求することは、結局は全存在の道具化を論ずることに過ぎず」とは、とんだ決め付けだ。

だいたい、八木こそ、プラグマティズム的な知情意の立場から、“人類が本来の在り方、進み方に軌道修正し自由を得て幸せになるための道具となる生態系存在論(+倫理学)”を完成させようとしているのではないか？ であるから、そのような目で見ると、プラトンの「イ

デア]一つとっても道具のように見えてくるのだろう。ところが、私が思うに、こと「存在」というものは、あらゆる概念の中の最も深く普遍的なものである。万事万象が逃れることのできないありようを捉える概念であるので、もともと一般性を外すことのできないものなのではないか。「すべてを統括する」もので「存在論」はあらざるを得ないのである、と私は思う。

“人類全体が生存して来るうえで、またこれから先生きて行くうえで、生態系ほど大切なものはない。それは人間にとっての環境であると同時に、自分自身にとっての主客両面にまたがるものであり、遠い過去から遠い未来まで有用であり続けるものなのだ”[以上、LMによる解釈文]といったことを念仏のように繰り返しているのだが、それが言葉の正しい意味で「存在論」に相応しい態度であろうか？むしろ“人間/人類生存論”といった方がまだ近いのではないか。とすると、文明と真っ向から勝負できるような性格持っているか、となると、どこか文明や文明化の意思と思いのほか似たところがあるのではないか。

やはり、哲学を知らない、素人向けの著作、と言う印象がある。

“人間/人類生存論”とは、“もつとずっと長く存続するための”と言う八木の気持ちを込めたものだ。だからこう言いなおしてもよからう。“人の人による人のための生態系に関する論”だと。

八木の方法は、“生態系”を前面に押し出しつつも、人間/人類と、その他の生き物とを明確に分けている。文明を批判そして否定しようとするのだから責任者を祀り上げるのは致し方ない。

ところが、八木が生態系を人類とそれ以外の生き物に裁断した時点(意識あるなしを分ける境界線)によって、八木の頭の中では生態系は全体性を失ってしまったのではなかろうか(cf.11))。

こうしてわれわれ読者は、生態系の中での重要度において人類が及びもしないものとして植物群、わけでも葉緑素が持ち上げられているグロテスクなイメージにこれだけ付き合わされている。16)を思い出してほしい。

そこには“思想は自然やいのちの交換の場から離れて生じた内的葛藤から自分たちのこのバランスを回復するために生じた”と言ったことが書いてある。私はこの書もまさにその系譜にある、とつくづく感じる。虚構として、文学として、面白いのである。その方向での八木の力量は十分すぎるほどのものがある。

だが、文明以前の本来の自然の姿、生態系の在り方がじつさい、八木の言うようなものであるとは、幻想的過ぎて到底思えないのである。

生態系についての科学はいくらでもありうらと思う。何よりもそこでは人の立場が公認されるジャンルだからだ。だが、生態系存在論となると、土台かつ所詮、不可能かもしれないのである。

だが、ここでも繰り返しておこう。不可能に立ち向かう男は、ものにもよるが、往々にして善美なのである。かつ、真実性もある。この書が正にそれだ。

31) 「同上」より p75

ところで、人間を生み出したのは自然である。人間を養っているのも自然である。したがって、その自然が人間を騙すことはあり得ないし、自然が根本的に人間の生を養っているのだから、人間の生の根本となるものをどこから学ぶことができるかを考えたとき、少なくともたいがいのことは自然からでしかありえないと見るのは、理屈が通った話であろう。

LMコメント

これに反論するのに、何も自然の、人体の鬼子がん細胞を持ち出すほどのこともなからう。執筆時の心境が疑われる。そういう私は今朝きゅうりを100グラムほど食したが、世界で最も栄養価の低い、ほとんど水みたいなもの、であることを知ってがっかりしているところだ。

自然が人間の元の元だとしてしている八木の心情がもろに伝わってくるのであるが、これは相当地にナイーブに過ぎる行き方だといわざるを得ない。

我々は何も望んでこの世に生まれきたわけではない。人間が価値あるとするには自然が必要であり、だから自然は価値あるものでなくてはならず、双方、価値あるもの同士の親子のようなつながりであり、当然人間も価値あるものとなる。となると、これは八木の愛や慈悲や価値観に裏付けられた思考の堂々巡りであり、自同律＝トートロジーのシミュレーションのようなものではないか。そこに善美があるとしても、真偽を問えるような代物ではないのではないか？ところで、哲学にとってはまず先に問われるべきは、善美よりも真実性の方ではないのだろうか？

また、自然は自然から生まれたとすることもできず、また無から生じたわけでもなく、人間のおおもとが知りたいなら、八木の方だどさらにその奥へと遡るほかないということになるが、結局それは袋小路に突き当たるほかあるまい。

32) 「共生による進化」より p106

植物も進化が進むと、より繊細な剪定を必要とするようになり、恐竜のような大ざっぱな剪定はかえって迷惑になったのであろう。植物にとって見れば、恐竜がいなくなった方がよいとなれば、彼らに提供する食糧を減らせば済むことだったので、おそらく、難しいことは何もなかった。なぜなら植物自体が退潮して減少すれば、体の小さな種は生き残るが、恐竜は絶滅することが目に見えているからである。こうして、ほかにも多くの犠牲がでたが、植物は恐竜を地上から追い払い、その後、自分たちの発展に都合のいい生物種を進化発展させる道を切り開いたとみられる。すなわち、鳥類。昆虫類、ほ乳類の進化発展

である。鳥は空から、昆虫は空と地上から、ほ乳類は地上から、それぞれの特性によって樹木の葉を樹上で剪定し、残りを地上の分解者に渡す、という役割を担ってきたのである。

LMコメント

植物は基本的に眠れる生き物のはずだが？植物の擬人化がすぎやしないか？

神の擬人化も哲学としては滑稽であるが、植物の擬人化、あるいは擬女神化は、また真逆の意味で滑稽なのではなかろうか？

33)「同上」よりp108

ところで、生物の間に共生原理を取り入れる決断は、植物によってなされると見ることができる。なぜなら第一に、すでに植物細胞が進化した事情について説明したように、植物はその土台において、動物と葉緑素の共生によって生まれたものであること、つまり植物の方が動物の可能性を予想できる能力を持つ生命体であって、その逆ではないこと、第二に、地球上の生態系は、動物ではなく、葉緑素を持つ植物が支配しているという二つの理由からである。神の名を持ち出したいのなら、神は植物を通じて地上の生態系を支配し、コントロールしている、というべきなのである。

LMコメント

ハ木もさすがに、自分の表現する『植物』の人形っぽさが気になってか、黒子という立場での『神』を持ち出してきたが、神に関する著者自身の思考や扱い方が安すぎるのではなかろうか？

34)「同上」よりp113

ところで、もしも進化が共生原理の導入によって起こるなら、絶滅作戦は、その反対の競争原理の導入によって可能となる、と考えるのが自然だろう。そしてこれまでの進化の歴史から判断してその作戦を決行するものは植物であると推測できる。なぜなら植物こそがその細胞レベルでは栄養分を自家生産できる完全な生命体であり、地球の生態系システムの基盤となっていると見られるからである。したがって植物が人類の絶滅を考え始めるとき、植物は人類の中に競争原理を持ち込むはずである。それが第一部で論じた文明のはじまりであった。文明人はそれを人間の勝利のように考えているが、とんでもない誤解な、のかもしれない。なぜなら、競争原理だけが合理的に見て、種を絶滅させる原理だからである。ダーウィンは

「自然淘汰」と呼ぶが、まさに競争原理こそ種の「自然淘汰」であり、絶滅の原理である。それゆえ、人類が自分たちの絶滅を心配するなら、「競争原理」が働く場面を自分たちの周りから取り去る必要がある。「競争原理こそ人類の進歩発展を約束する原理である」という信条こそ、じつは植物が無言で世界に指示している人類絶滅のためのプロパガンダなのではないか。

LMコメント

『レトリック上の工夫』意識も働いているのだろうが、全部で800ページにもわたる大部の、しかも哲学者のライフワークであることを思えば、これほどの植物の擬人化は、読み手の意表を突くという意味では面白くとも、本著作の価値を諸に引き下げるものと心配されるがどうだろうか？初めから「文学だ」として読むならまた別だが。日ごろ、受容に傾いた人種、しかも大の植物好きの人間たちに囲まれて、そこでの軟な物言いそのままがこのような真面目な著作での記述につながったとすれば、気の毒すぎないか？それとも、それ以前の話として、植物への愛が強すぎてこのような過剰な感情移入表現につながっているということなのか？

なお、論(あげつら)われている「競争原理」であるが、LMの考えでは、それは進化や進歩に寄与するところがある(もちろん、その逆も)。ただ、進化や進歩の挙句、死とか絶滅とかが待っている、しかも往々にして突然にそれらは訪れる、とすることであろうかと思う。

むしろ、こういうべきかもしれない。進歩や進化の本質的な部分に「死に急ぐ」という動因も含まれているのではないか。エネルギーを長寿の為ではなく、短時間で燃やし尽くしたい、という、ヤンチャともとれる欲求(欲望)が、人間ばかりでなく、多くの動物には備わっているのではないか。さらに言ってしまうと、植物はその言う要素が弱いのではないか。

(もちろん、生きとし生けるものは「自身の死への抵抗」の強い本能を持つ。ただ、それをいささか犠牲にしても進化や進歩を目指す不思議な本能も有している、とすることなのである。)

35)「自然本来の人間を基準として『ある』もの」よりp132

それゆえ、ここでの目的のために、わたしは文明以前の人類の在り方を基準とせざるをえない。なぜなら、絶滅プログラムに乗った種の立場に立って人間を考察しても、人間が絶滅に向かう道しか見つけられないからである。したがって、ここでは、地球の生態系の中に共生するものとして誕生した人類の立場に立って(それを推測して)、考察するほかない。つまり他種との共生を本能とする人類の意識こそ、人類にとっての「ある」を真実に見出すための基準となすべきだからである。

LMコメント

(ほかでもそうなのだが)「絶滅プログラムに乗った立場の人間を考察しても意味がない。」と正面から言わない方が良いのではないか？

もともと、あらゆる生物個体は死ぬし、生物種にしても絶滅したものは、今まで我々に発見されないままに「闇から闇に葬られた」ものまで含めると、いったいどれほどのものか見当もつかない。それに土台かつ所詮、生じたものはすべて滅びるわけで、むしろ、八木の言う文明による「絶滅プログラム」を外すことが出来たとしても、だからといって無限の生存が人類にも全生態系にも求めるのは無理な相談なのである。

ただ、徒な延命ではなく、生の質と量の両面においてより良い(善美)ことを願っている、ということならばその気持ちは良くわかる。(中略)

36) 同上よりp134

たとえば、進化の過程を逆にたどりながら、人類の身体の原因となる存在を考えてみよう。

LMコメント

たとえ原因を遡って行くことは可能でも、それでもって、逆に、どうしてこうなったかを説明することは厳密には不可能ではないか。

というのは、「どうしてほかの原因が生じなかったのか？」あるいは、「どうしてほかの原因-結果の系列が生じなかったのか」まで説明しなければならないからである(これは「ない」を無視するパルメニデスの考え—後の方で詳論されている—に抵触するものではない。ほかの原因を抑え込むのに無数の要因が働いていたはずであり、それは「ない」のではなく「ある」のであるから)。そうでなければ、結局は現象の後追い、結果(事象)の羅列の範囲内での説明に終わることになりはしないか？ここでも、八木の“意欲勝ち”[LM造語]の印象はぬぐえない。

結局、八木は人類が自然との共生に生きていた時空範囲を必然と受け止めたいがために、結果から原因を突き止めると同時に、その原因からその結果が生じた、という二つのことをぴったりと重ね合わせて安心しているだけのようである。それは、結局のところ、歴史というものに自由の入る余地を認めない、ということなのである。

研究対象そのものに自由を認めなければ、それだけ(八木の)説明しやすいところとなる、というのは当然の理屈である。全体的に善美感の漂う本著作ではあるが、著者の狡猾さも、打ち消しがたいところだ。

37) 「同上」よりp138

このように見てくると、人間存在の理解のためにもっとも関わるのは、葉緑

素を持つ藻類や植物の存在であることが明らかである。葉緑素をもった原始的藻類や植物は、人間が息を吸う大気を作り、合わせて人間が食べるものをつくっている。すなわち、二酸化炭素と水を取り込み、太陽の光エネルギーを受けて、酸素と炭水化物（糖分）をつくる。およそ地球上の生物のほとんどは、この葉緑素のはたらきによって生きている。したがって、人間存在を支えているものは、地球上では水と葉緑素の存在である、といいいい。（中略）

P139

このように、人間存在は、地球上の生態系、わけでも植物や葉緑素に包まれていることが判明する。人間が見ている天体も、それに包まれて「ある」ことが分かっている。したがって、わたしたちは人類の存在を植物の視点から見ていかなければならない。これまで一般に西洋文明の視点が疑われずに、私たちは植物を動物の下に見てきたが、むしろ植物を私たち動物界の上に見て、わたしたち動物界が植物に依存しているさまを見なければならぬのである。

LMコメント

八木の植物への感謝、信仰心が伝わってくる。そして、それが冷静であるべき哲学者としての態度や、客観的であるべき哲学的論考を侵害している模様である。

それにしても、この男はどうしてこうも保守的であるのか？過去の極みにのみ、存在（ある）の原点を置こうとするのか？

38) 「個体について」よりP151

もう一つ、存在論において個体を論じることの意味の無さについて述べておかなければならない。一般に、現代の科学で、生命とは何か、という問いに対する答えとしては、生命とは遺伝子の複製（自己増殖）機能であるという答えが基本となる。しかしこの答えによれば、生命の本質は、同じ設計図に基づく大量生産ということになる。ところで、同じ設計図による大量生産の場合、個体に個性は無い。どれも同じ種類の個体に過ぎない。いわば、代わりはいくらでもある、という世界である。同じ種類であることを決定している設計図にあたるのが形相である。そして材料が質量であり、個体は生産される具体物である。したがって現代の生物学においても、個体が問題にされているのではない。個体はあくまでも種を代用する具体物として扱われているのであって、種を代表しない部分は切り捨てられるのである。したがって、哲学が個体を論じることがないとしても、それは科学的であろうとするから普遍的に生じることなのである。

他方、たしかに無性繁殖する単細胞生物の個体であっても、自分が生まれた

水温を好む性質をもつことが知られている。つまりかならず遺伝子が同じなら、すべて同じということではないのである。言い換えれば生命的存在には、物質的存在には無いある性格が間違いなくあるのであって、その性格とは、一面では主体性であり、一面では善美を看取する性格である。生命に固有の主体性は善美を看取する性格と表裏一体であって、ただゆがんだ生命のみが善美でないものを看取する中で主体性を発揮する。したがって生命の具体物である個体は、その主体性の実現形態であり、善美の看取とその追求の実現形態であるということができる。

とはいえ、このような性格は物質的な大量生産物には見いだされないとしても、生命の遺伝子という設計図には書き込まれているということができるだろう。自ら複製を作り出そうとするものは、その限りで主体性を発揮しているのであるから、遺伝子のうちに主体性が書き込まれているということができる。善美の追求がこの主体性と本質的に一つなら、善美の追及も遺伝子に書き込まれていると言ってなんら不都合ではない。しかし実際には、遺伝子は質料となる材料に出会う中で主体性を具体化し、善美の基準を具体化している。つまり個体が持つ善美の看取における違いは、「好みの違い」に具体的に現れるように、完全に複製される物ではなく、むしろ個体が善美の看取を追求する中で個体のもつ善美の基準が完成されていくように、設計図が引かれているのである。それゆえ、個体の違いは、個体が具体物として種を代表しながら、つまり種の形相を質料とともに実現しつつ、その一方で、具体物であることによって具体的な世界（それが生きる周囲の世界）との関係において、具体的な善美の基準（個体が出会っている地域世界のもつ善美）を追求することを可能にしているのである。

それゆえ、個体は具体的な善美を語る際には本質的に重要になるが、普遍的な議論では問題にされない。しかしこのように言うと、現実には個体が存在しているのだから、その個体を説明する原理がない、ということは、哲学の無力を示すだけではないかと疑われるかもしれない。しかし哲学は、あるいは、存在論は、普遍的な視野を提供するものであって、個体に注目して全体を見ないこととは反対の極にある。したがって、哲学が説明しようとしているのは何らかの普遍性を示している種的存在であって、個体ではない。他方で確かに、個体があることは普遍的に見られる現実ではないかと言われるであろう。これには答えていかなければならない。

ところで、個体は偶然を実現する存在であるということができる。なぜなら、普遍はその本質からして必然的であるが、その対となる個体には、必然が存在しないからである。現実の個体が内包する必然は、それが内包する普遍にもとづくものであり、個体性が生じるものは偶然の作用のみである。ところで個体

が実現する偶然は、垂直方向の秩序ではなく、水平方向の可能性の実現として現れる。つまり個体同士の偶然的な結びつき、分離、ということがらとなって現れる。そして具体的個体が普遍を現象世界において実現しているのであるから、普遍・必然が作用するのも、個体・偶然を通じてであることを考察に加えておかなければならない。つまり個体の関係は偶然に生じるが、それが、個体が内包する普遍同士の結びつきを生じて、必然の関係を生じるのである。それゆえ普遍の地平が広ければ広いほど、それだけ多くの個体はその普遍を内包しており、必然の関係を生じるので、ある個体が別の個体に出会うとき、普遍の地平が十分広いならば、その普遍的関係はかならず生じるであろうし、他方、普遍の地平が狭ければ個体どうしの出会いがその普遍的関係にもとづく必然を生じる可能性は、小さくなる。

LMコメント

実はほかの場所でもそうなのだが、ここで目立って暴露している(あるいは、暴露されるべき)点は、「説明主義」[LM 造語]の姿勢である。「～その対となる個体には、必然が存在しないからである」と簡単に言っているが、その「必然」の部分には「説明できるもの(としての必然)」という文言が隠されているのではなかろうか？

また、「普遍」にしても、「必然のものとして説明しやすいこと」ぐらいの意味であろう。「普遍」と自信ありげに語っていても、それを「絶対の普遍」とまで信じている様子は感じられない。

過去を起点とし、「生態系」にふさわしく相互関係で論を組み立てているハ木にとって「個体」あるいは「個性」について言及する苦しさ、あるいは困難さはあって当然なのではないか？「個体」とか「個性」「個性」について、説明が不得手であるのは何もハ木に限ったことではない。なぜなら、科学にしても哲学にしても宗教にしても、論ずるところは一般論なのである。もしそうでなければ、たとえば医学ならば、患者毎に病理学が必要になるように実現不可能になり、学問や宗教論はもともと成立しえないことになる。

されど、人間たちは誰もが、自然界の中で(生態系に於いて)最も個性の強い、安易な解読を許さない有象無象なのである。これを、私は<異性>とはいえないので<<異物性>>と名付けたい。現象面とか表面のことではなく、本質を指してこう呼ぶのである。人々はこの事実を厳粛に受け止めねばならない。ましてや哲学者はである。

その点、ハ木は節操がなさすぎるのではないか？自己の哲学体系確立のために、謙虚さを喪失しているのではないか？

なお、「垂直方向の秩序ではなく」と言うところにわざわざ下線を付けておいたが、本書のようなタイトル/テーマであるにもかかわらず、どこを読んでも垂直の緊張感というものが伝わって来ないので、この記述は忘れてほしくないと思った次第である。LM総括文を読まれば、その辺の論理は分かっていただけと思う。

39) 「パルメニデスの詩、第一断片」よりp186

わたしたちがパルメニデスを取り上げるのは、かれの存在論にヨーロッパの存在論の起源を認めているからであり、その本質は、かれが真理を語る道として「ある」のみを語るからである。 反対語となる「ない」については、真理を語る道からはずしてしまう。かれによれば、語るべきは「ある」のみであり、在ることのみが語られ、考えられるべきなのである。というのも、「ない」が考えられ、語られると、それが「ある」と混じり合い、それによって思惑が生じ、と彼は考えているからである。

LMコメント

もちろん、ここを読んだだけではパルメニデスの真意はわからないが、彼がもし

「真理を語るということは、『在る』ということについて語ることである。」

「無や無い、というものは文字通り、無い」のであるから

「真理探究の道に置いては邪魔になるのみ」

といったことを考えているのだったら、如何にも正しい。

私はパルメニデスのことを知らなかったが、これを読む限り、以前からの私の自家発電的持論そのものなので、何かお株を奪われたような感じがしてしまう。

40) 「パルメニデスの詩、第二・第三断片」よりP188

しかしながら、真理の探究として「在るか無いか」を吟味するのではなく、「ある」ものだけを探究する道を主張することは何を意味するのだろうか。

この問題を明らかにするために、かれの探究が「ある」ものに限定していて、「ない」を見捨てていることから起こるよく知られた難問の方を、その前に考えてみよう。つまり、かれの問題の立て方が、そもそも「ある」か「ない」か、のいずれかであって、在ったものが無くなる、という「なる」という視点を持たないのはなぜか、ということを考えておかなければならない。(中略)

p189

じっさい裁判では、容疑者が有罪で「在るか無いか」の二つが、唯一の選択肢である。それゆえパルメニデスが真理を学ぶ場所、天上の裁きの場では、「なる」ことは議論とならないのである。言い換えると「なる」を問題から排除することが、すでにこの第一断片、つまり序章の段階で明確にされている。なぜ「なる」が排除されるか、という議論すらないのである。それゆえ、ヨーロッ

パの存在論において「なる」ことの問題は、じつは存在論の出来からして厳密には論じることが出来ない問題なのである。

LMコメント

要するに、過去の事象という変えようのない事案についての判定であること、物事を時系列的に並べたとして、各事象はそれぞれに成立している(cf.棒グラフ)。

「なる」とは、それら複数の事象を担う持続体(LM造語?)、人とか物等々を捉え、あるいは仮にあるものと仮定して、それを主語に立てた時に必要とされる動詞であろう(cf.折れ線グラフ)。

だから、ポイントポイントに立つ事象を抽出することが先決で、その合間合間に生じる変動などに関わる必要はない、ともいえる。要するに、パルメニデスは、時間に惑わされたくないのではないか。とんでもない潔癖漢なのかもしれない。

41) 「同上」よりp190

ところでパルメニデスの第二断片では、いましがた問題にしたことがさらに明らかにされている。すなわち、「あるかないか」の吟味はなされず、「ある」に邁進することが真理の道として語られている。つまり「あるかないか」の吟味は必要ない、というのがこの第二断片のおそろべき眼目である。そしてその理由は、「ない」ものは、考えることも指摘することもできないからだ、というのである。第三断片では、加えて、「考えられる」ことと、「ある」ことは同じだと主張される。したがって簡略に言えば、「ある」ものは考えられるものであり、「ない」ものは考えられないものなのである。それゆえ、考えられ、指摘されうる「ある」だけが探究の道であると、ここで最終的に宣言されるのである。

LMコメント

パルメニデスの言っていることは、単純に過ぎるように見えて、実に一番肝心な部分をしっかりとらえているようにLMには思える。私LMは自発的に「考える=ある」(少なくともLM自身に於いては)を信じる口であるが、八木の場合はどうであろう。

日本的、少なくとも東洋的である八木の(今まで読んできたところでの)印象からして、西洋的で強い調子の『考えられる』ことと、『ある』ことは同じ』発言は、彼の思索から表現までを励ますこと大であったと思われる。八木が思考の足場としてパルメニデスを援用するのも無理はない。

ところが、すでにここまでの彼の記述を辿っただけでも、「ある」(や、パルメニデス)をないがしろにしている様子が、実はありありなのだ(逆に、そういう矛盾点に、八木のパルメニデスやその思考に依存している様が見て取れたというわけである)。それは多岐にわたるが、中でも

一番はつきりしているのは、38)のLMコメントで述べた「個体」等等についての叙述おうである。

42)「吟味を終えたのちの探究」よりp195

言い換えると、パルメニデスの存在論は数学やのちの自然科学を根拠づける哲学なのである。他方、ソクラテスの哲学はごく自然に、道徳ないし人間の美徳に関わる。プラトンはイデア論を通じて両者を総合しようとしたのであるが、この総合が後継者には混乱を生じたと見る事が出来る。プラトンはパルメニデスの詩の解釈において、パルメニデスが「あるかないか」の吟味を排除していたことの意味を十分に読み取っていなかったのだと思われる。つまりパルメニデスによる「吟味の排除」は、この世を脱してあの世で真理を探究することを意味して、「この世」と「あの世」の隔絶を明らかにしている。そしてこの隔絶は、人間の言葉では総合したり調整したりできる種類のものではないことを、パルメニデスは詩人としての直感として述べているのである。

それゆえわたしはプラトンの努力よりも、パルメニデスの直感を買う。「ある」ことのうちを進む真理探究は、「あるかないか」の吟味とともに成り立つものではなく、後者の排除とともに成り立つ道である。言い換えれば、パルメニデスの存在論は、十分な世界の限定によってはじめて成り立つものであり、一般に理解されているように、人間が関わりうるあらゆる世界を総合的に取り上げてその限界ないし根拠を探るものではない。

LMコメント

ひとつ例を出してみよう。ある美術展に行き、いろいろな画家の絵画が並んでいる。時は2015年。絵の傍らには作家の名称と「生年～」が具体的に示されている。と、突然、「《1979年～2015年》」としっかりくられている表記に出会い、私は異様な感覚を覚えた。そしてその一瞬後には、それに「生年～」というには無かった実在感を覚えたものだ。座りがよいというか、収まりが良いというか、まさにしっかりと、有、即ち「在る」の箱に収まっている、と安心すら覚えたものだ(もちろんこれは、生年、没年の知られているすべての故人について言えることである。最近、画家にせよ、本の著者にせよ、故人まで「さん」付けで呼ぶ風潮が女性から一般へと広がり呈しているが、これを観念上の棺桶破壊と言わずになんという!?)

観念の棺桶とは時間をストップさせるための道具なのである。

ハ木の「十分な世界の限定によってはじめて成り立つもの」という言い方は、私の解釈と比べて、なにかゆるいような気がするのだが、事実はどうだろう。私は別にパルメニデスの文献をあさったわけではない。ただ、ハ木がパルメニデスの「ある」論についてここまで語ってきているところを読んだだけでも、おそらく「パルメニデスも、またその女神ももつと厳粛な意味に徹して

いる」ものと思われる。

学者と言うものはマネビ、マナブというのが習い性と成っているし、持論を展開するにしても、どうしても、自分が良しとする権威の保証を取り付けて置きたがるものようだ。もつとも、自分の方が上手、より厳しいとなれば、批判的に取り上げる形にならざるを得ないだろうが。

43) 「パルメニエスの詩、第四から第八断片」よりp199

第八断片は最も長い断片であり、「ある」の道についての最後の断片となっている。したがって、わたしがパルメニエスについて検討を加えるのもこの断片までである。さて断片では、「ある」のみが残り、そこには独特の表示が見出されると言う。ここで表示となるのは、「ある」が独特なものとして持つ性格である。その性格とは、不生、不滅、全体、完全無欠というものである。すでに述べたように、「ある」からは「なる」が排除されている。それゆえ、「ある」は生じることはないし、「ない」状態に「なる」こともないのであるから、「ある」は不滅である。生じること滅することもないのであれば、初めもなしに「ある」は、永遠から永遠へと「ある」のみである。また部分があって、一部分が生成消滅することで全体があり続けていることでもない。そういうことは全くないと言われているのであるから、「ある」は一挙にはじめから全体として「ある」のであり、しかもどこかによく似た兄弟がいる、ということではない。その意味で「ある」は「独り子として」全体であるといわれる。また初めも終わりもなく、生成消滅もないのならば、そこには歴史はあり得ず、過去も未来もない。

LMコメント

通常の間主観からすれば、「歴史はあり得ず」「過去も未来もない」などは現実性がないし、想像すらできない人も多かろう。

しかし、人間主観にとって“歴史とか過去や未来があるように感じ取れる”のは、その前提として、ともかく“初めもなく終わりもなく永遠なるもの”が我々主観の根底に徹していればこそ、なのではなかろうか。言葉を換えればたとえ無意識理であれ、無限感が在るからこそ、目の前の大小の有限な形も見ることが可能なのではないか、という話なのである。

現在のわれわれの意識も知覚も感覚も、“文明の奴隷たち、家畜達”と八木になめられるなどどんでもなく、十分に「神秘的」に働き続けているのではなかろうか？ その意味で八木に匹敵するぐらいの人は案外少なくないのかもしれない。文明前の人々と現れ方はずいぶん違っても「神秘的な知恵」(cf.引用11)、LM命名の「天然脳」の働きは今なお健在なのかもしれないではないか？

44) 「パルメニデス以後」より p207

それゆえ、反対にもし存在論が「なる」そのほかの変化を排除するなら、それが支持することが出来る学は限られたものであるほかはない。パルメニデスにおいては、学に価するのは、数学や幾何学であり、いくらか色をつけて、せいぜい天文学にとどまったのである。しかしながらそれでは、パルメニデスの存在論に忠実であると宣言した生態系存在論は、やはりあらゆる学を支持することはできないのだろうか。たしかにわたしが唱える「生態系存在論」は、「あるべきある」のみに「ある」を限定する。しかし「あるべきある」に属するものとは、それが「考えられてしかるべきである」であるがゆえに、またそこには論理性が持つ「思考の美」が含まれるがゆえに、第一に、数学的学を支持することが出来る。さらに第二に、それは今は「ない」ことも、これから「なる」ことも排除しない。なぜなら、「あるべきもの」が今は「ない」なら、「なる」道がこの存在論においては善美だからである。したがって、それはあらゆる学を容認するし、すべての学を「あるべき」ところの「生態系の善美」に向けて秩序づける。つまりあらゆる学が位置を与えられ、進むべき方向性を与えられる。それゆえわたしが唱える存在論は、パルメニデスを超え、さらにはアリストテレスを超えることができると予想される。なぜなら、アリストテレスとともにあらゆる学を根拠づけることができるうえに、アリストテレスができなかったこと、つまり存在論と善美論（倫理学）を統一することが出来ると予想できるからである。

LMコメント

「それは今は『ない』ことも、これから『なる』ことも排除しない。なぜなら、『あるべきもの』が今は『ない』なら、『なる』道がこの存在論においては善美だからである」というのは、ここまで読んできた者として、聞き捨てならない。

以下、パルメニデスを私 LM に気に入る方向に持って行き、ロクリアン・パルメニデス(LP)化したものとして、名前はL. パルメニデスと名付けることをお許しいただきたい。

L. パルメニデスにおいては、いつでも「現在」ということが重要視されているのではなかろうか。だからこそ、「なる」を堂々と無視しているのではないか。

「あるべきである」という言い方など、もともと「ある」ものに対し、その必然性を強調する意味でなら分かるが、「今は無いが、本来あるべきものが欠けているのだから、在るように持ってゆかねばならない」ということならば、すでにパルメニデスの「ある」に関するテーゼを裏切っていることになる。

その考えに対する、失敬も顧みず、八木はそこにあらぬ考え、一般的に体(てい)の良い考えを接合しようとしている。まことに愚かというほかない。

現代、学問の専門分野が加速度的に増えているのは、文明の肥大化が加速しているからだろう。

17)に「(思想や文化一般は)人類の精神的発展とか、進歩によるものではない。」と記している八木が、「アリストテレスとともにあらゆる学問を根拠づけることができる」と語るとあっては、何をかいわんやである。

学問の中には、文明化を一層促進する方向、生態系にマイナスの作用をする方向で寄与する学問もあるはずである。八木は「自分のやったこと、やろうとしていることは単に生態系を支えるだけでなく、全学問を肯定する力も持っている」と誇りたいのであろうが、なぜ、こんな“度矛盾(LM造語)”なことを赤々と書き記すのだろうか。

この度矛盾にまで読み手が気が付かないと思つての事だろう。あるいは指摘されたらなんとも言い逃れができる、とでも思つたのであろうか。

もし、八木本人がこの度矛盾に気が付いてないとしたら、これはこうやって教えて彼を助けてやらねばならない。

45)「パルメニデスの存在論と生態系存在論」よりP235

わたしはパルメニデスに戻ってやり直す道を取ったのであるが、パルメニデスの「存在」は、じつは真実を明るみに出した審判の結論としての「ある」であった。すでに検討したように、パルメニデスの詩がしめしている審判は死後の審判である。この世のものではない。(中略)

P237

しかし、ここに至って考察すべきもう一つの問題があらわになる。というのも、審判とは、真実を明らかにすると同時に正義を実現することを意味するからである。なぜなら審判は国家権力を背景にして、犯罪を確定して犯罪者を処罰し、被害者を救済するからである。パルメニデスの「存在論」は、それゆえじつは正義を求めるものであった。ところで、正義は善美なことからである。それゆえかれの存在論は善美を実現する存在論であった。少なくともその意味では、「あるべきある」を求める生態系存在論と同じものである。しかしパルメニデスにおいては、すべてが明るみに引き出されて「なにが真実か」が正義の実現としてあらわにされたとしても、すべてが、正義となったのではない。

なぜなら審判を通じて明るみに出た真実とは、不正、犯罪が行われたという真実だからである。実現された正義とは、「不正が明らかにされた」と言う正義である。すなわちそれは「裁判の正義」であって、裁判に関わった個々の「人間の正義」ではない。犯罪者も犯罪も、いうまでもなく悪であり、醜であり、不正である。それらは「あるべきではなかったところのある」である。それゆえ、パルメニデスの存在論の「存在」は、あくまでも裁判の正義であり、その

中での善美である。つまり裁判が公正に行われるべきであることを示す「ある」であって、被告人を含めすべての人がつねに正義であったり、善美であることを示す「ある」ではないのである。

言い換えると、パルメニデスにおける正義の実現は、裁判を権威づける「国家の正義」の実現である。これに対して、生態系存在論が主張する「あるべきある」とは「国家権力を前提としない正義」の実現である。なぜなら生体系存在論の立場では、国家とは、土地の不正な所有の上に成り立つ不正な権力だからである。したがって生態系存在論では裁判を成立させる権威自体が不正なものとして拒絶される。すなわち一方で、「あるべきある」を探究の道としてあらかじめ要求することに於いては、生態系存在論はパルメニデスの存在論と同じである。しかしながら、その「あるべきある」の根拠が、パルメニデスにおいては国家権力による正義であるが、生態系存在論はそれを認めていない。生態系存在論は人間存在を根拠づけている自然生態を前提とし、この地平で正義を求める。それゆえわたしたちはパルメニデスについていくが、それも途中でやめることになる。

LMコメント

最後のところ、“自然生態系においては悪、醜、不正は一切ない”と言わんばかりである。ハ木にとってはおそらく、“自然とは、人類が文明を起こすまではこの世のすべてであったような存在で、言ってみれば独り勝ちのような存在であった(立候補者のいない選挙における現職者の勝利のようなもの)。あえて敵をあげればそれは死しかない。”というところだろう。だから自然による自己愛は当然であり、ハ木自身ももともと自分はその中に居るわけだし、それをもって正義としよう、善美としよう、というところに違いあるまい。

そこで、そのような立場からの発言であり決め付けであるから、ということは置いておいても、問題はその前の叙述箇所にある。

すなわち、『裁判の正義』であって、裁判に関わった個々の『人間の正義』ではない。犯罪者も犯罪も、いうまでもなく悪であり、醜であり、不正である。それらは『あるべきではなかったところのある』である。」

ハ木のパルメニデスに関する既出部分を読んだだけでも多くの人が推察しうるであろう。パルメニデスの意図は、「ない」と「ある」を明瞭にしつつ「ない」を捨てて「ある」を残す、そのために、このような彼岸における裁判の場面を設定し使用した、ということだろう。

そして、その目的が達成されているならば、やれ「犯罪は悪だ」「犯罪者は悪人だ」は非本質的なことでどうでもよいだろう。早い話が、それは裁判の時点から見て過去の事だからである。「その行為は悪だった」「その行為者は悪人であった」ということであり、その裁定は正義であり善美である。だから何も、『なにが真実か』が正義の実現としてあらわにされた

しても、すべてが、正義となったのではない。」ということの問題化する必要はないのである。

ましてや、八木判断の「人間の正義ではない」ことを盾にとつて、「言い換えると、パルメニデスにおける正義の実現は、裁判を権威づける『国家の正義』の実現である」という論述に接合するとは、論理に落差がありすぎる。「言い換えると」と記し時の八木には厳しさが無く、自己への妥協している瞬間が無残な姿をさらしている。だいたい、八木自身、素朴な立場から「犯罪者も犯罪も、いうまでもなく悪であり、醜であり、不正である。」として、その点「国家の正義」による判断となんら変わらないことを表明しているではないか。

なにか、ここでの八木は鬼の首を取ろうとして狡い手に出てしまっているようだ。彼にしてみれば、その論考に人類思想の将来に大きな影響を及ぼすほどの力を持たせるための肝心の部分なのだろうが、私に言わせれば、「狡い手を使うものだな」というところ。それも、私程度のものに易々と舞台裏がバレてしまうのでは元も子もないではないというか、詰まらないではないか（パルメニデスが知ったらどんな顔をするものやら）。もともと、人間による最高の虚構物にせよ、神にしてみれば、「至らぬもの」となるのが物の道理なのだが。

46) 「アリストテレスの存在論と生態系存在論」より p242

なぜなら、それによれば善美は運命的に実現し続けることになるはずだからである。というのも、アリストテレスの理論によれば、善美は人間の意志によって達成されるのではなく、宇宙の規模では第一天球への欲求運動という、人間の力が到底及ばない力で実現していると思われるからである。しかしながら実際には、人類が文明を生み出すようになってから地上の生態系の善美は失われてきた。それゆえ善美の実現は宇宙の運行による必然として実現するのではなく、人類の再度の自覚によってしか実現しないものである。

言い換えると、アリストテレスにしたがうなら、物理的運動その他の変化が、そのまま善美を実現するものだということになる。それゆえアリストテレスの存在論においてはその運動変化が善美を見極める基準になる。これに対し、わたしの存在論は生命運動変化のみが善美を見極める基準になる。たしかに古代に生きたアリストテレス自身は、宇宙の運動である天球運動も天球の靈魂（生命）が引き起こしている運動であると見ていた。したがってアリストテレスの存在論も、私の存在論に優るとも劣らず、本当のところは生命存在論なのである。ところが周知のように近代は、天体については生命的な概念をぬぐい去って始まった。そして、天空の現象は生命的変化ではなく物理的変化であるという理解が固まることによって、アリストテレスの存在論についての一般の理解も、いつのまにか非生命的なものとなったのである。そのために近代においては、物理的宇宙の変化に基づいて世界を考えることが、アリストテレスの伝統に沿う科学的な世界理解であると、一般に考えられるようになっている。しか

しこれは、本当は誤解なのである。

たしかにここにはいささか複雑な誤解がある。すなわちアリストテレスの存在論は案外に生命論的であり、それゆえに天体现象から地上に至るまで、ある種の善美が宇宙全体の運動の中に実現していると見るものであった。アリストテレスは一方で倫理学を政治学に連ねて国家論を描いていたプラトンに従っているが、存在の本質に善美の根拠を全く認めていなかったわけではない。アリストテレスにおいて第一天球の霊魂はやはり善美であり、それゆえに他の存在全体から愛されるのである。また言うまでもなく、プラトンにおいても、イデア論において最高のイデアは善のイデアなのであるから、かれも善美の根拠が存在の本質に係わることを否定しているのではなかった。ところが近代を通じてアリストテレスの形而上学が物理的に理解されるようになって、生命と善美の関係がすっかり見失われたのである。

わたしが見るところ、近代に天文が始まった科学の発展が、世界全体を物理的に理解することの正当性を証明したことが問題なのである。天文学の進歩は物理学の発達に資するとしても、善美の実現には資するところが少なかった。夜空に見られる物理現象は美しいと認めよう。しかしそれは数学的構造式がもつ論理性の美しさと本質的に同等なものである。それは生命だけが感得し、生命を養い、生命を発達させる力を内蔵した善美ではない。善美に反応するのは生命であって、物理現象は善美にはまったく無関心である。生物だけが無自覚にではあっても善美の内に生命の発達の方向性を見出してきたのであり、その美が多様性の美として生態系の善美をつくりだしてきた。人間はそれに自覚的に関わるべきなのである。なぜなら私の考察によれば、人間はそのために誕生した種だからである。そしてそれゆえにこそ、生態系の善美を目指した「あるべきある」の存在論は、人類のもつべき学として主張されるのである。

アリストテレスの存在論はこの自覚を持たないし、気づいてもいない。それゆえアリストテレスの存在論は乗り越えられなければならない。他方、パルメニデスの存在論は国家正義をもとにした存在論であり、また彼岸の存在論である。これもまた、国家正義を捨てて此岸に生きるための存在論ではありえない。それゆえに、パルメニデスの存在論も捨てられなければならないのである。

LMコメント

わざわざアリストテレスなど持ち出して来ているが、肝心なのは、人間の行為が知らず知らずのうちに目に見えない大きな力により誘導されている、とすることがあるかないかではなかろうか。ところがハ木は、そんなことには無頓着で話を進めてしまっているのである。人類をして文明を産み出させる何か目に見えない大きなものについて、直接的な言及を避けている。ここでのアリストテレスの話で、この大きな問題を切り抜けようとしているのは問題だ。ハ木としてはす

で、「人類に文明に目覚めさせたのは植物のたくらみだ」という話を作ってしまったのだから、文明の原因として人間への宇宙からの関与を認めるわけにはゆかなかつたのだろう。

その後も生命的対物理的という構図で多弁を弄しているが、似た者同士の小競り合いといったところだ。というのも、八木にかかるとは、生命も物質も閉鎖系のものに過ぎないからだ。どうもこの男は哲学者だというのに、人の脳すら、身近な情報に対して開かれていることは認めていても、宇宙への開放系とは認めていないようではないか。厳しい言い方をすると、こちら辺こそ彼の一番のウイークポイントかもしれない。欠点の少ない方の人であるだけに、ここにはつきり指摘させていただく。

わたしが見るところ、近代に天文学から始まった科学の発達で、世界全体を物理的に理解することの正当性を証明したことが問題なのである。天文学の進歩は物理学の発達に資するとしても、善美の実現には資するところが少なかった。夜空に見られる物理現象は美しいと認めよう。しかしそれは数学的構造式が持つ論理性の美しさと本質的に同等なものである。それは生命だけが感得し、生命を養い、生命を発達させる力を内蔵した善美ではない。善美に反応するのは生命あって、物理現象は善美には全く無関心である。生物だけが無自覚にではあっても善美の内に生命の発達の方向性を見出してきたのであり、その美が多様性の美として生態系の善美をつくりだしてきた。人間はそれに自覚的に関わるべきである。人間はそのために誕生した種だからである。そしてそれゆえにこそ、生態系の善美を目指した「あるべきある」の存在論は、人類の持つべき学として主張されるのである。

アリストテレスの存在論はこの自覚を持たないし、気づいてもいない。それゆえアリストテレスの存在論は乗り越えられなければならない。他方。パルメニデスの存在論は国家正義をもとにした存在論であり、また彼岸の存在論である。これもまた、国家正義を捨てて此岸に生きるための存在論ではありえない。それゆえに、パルメニデスの存在論も捨てられなければならないのである。

そのあと、「わたしの存在論は生命運動変化のみが善美を見極める基準になる」とある。これは首尾一貫して繰り返されているところであるが、何を根拠にしてこう言い切れるのか？まだ、二部の後半や三冊目全部を残しているが、客観的な根拠を示すことは極めて困難な論題だ。少なくとも八木の行き方では無理であろう。というのも、八木にとっても、「生命運動変化」の一番身近なモデルは八木自身のそれであろうということである。というのは自分自身の事だけは、主体そのものの在りようについて主観的かつ客観的、つまり内外双方の観察や分析が可能であり、善悪や美醜の判断力を適用しやすいからである。なお、よほどのひねくれ者でない限り、「自分自身の存在は善美である。」との暗黙の前提を拒むことはできないであろう。八木の文章を読んでいると、彼はひねくれ者ではないということがしつかり伝わってくる。むしろ、哲学者にしてはひねくれていなさすぎる、といっても過言ではない、と私は思う。

「パルメニデスの存在論は国家正義をもとにした存在論であり、また彼岸の存在論である。

これもまた、国家正義を捨てて此岸に生きるための存在論ではありえない。それゆえに、パルメニデスの存在論も捨てられなければならないのである」とあるが、これは問題ありだ。

パルメニデスの存在論が、ある枠を持っていることは確かであろう。

しかし、それは国家主義そのものではなく、“時空を超越した領域における真実”、という枠とは言い難い枠だろう。だから、これは一つ国家主義など超えたところに成立している立派な哲学と言うべきものだ。

それを、“土地の搾取に拘る国家主義を捨てなければ成立しないわれわれの生態系存在論だから、パルメニデスの存在論も捨てなければならない”とまで公言してしまうとは、恥を知れ！恥を！

47)「近代の自己意識に基づく存在論の否定」より p245

とはいえ常識的には、人間の意識は世界の一部に過ぎない。人間の意識が世界に対して支配者となったのは、人類の文明とその技術が世界を力づくで支配することができるようになったことから生じた「偶発的なおごりの意識」にすぎない。自己意識による存在論は、打ちのめされることがないか、打ちのめされることを拒絶する精神のみが基盤となって生まれるものである。言い換えれば、自己を全く超えたものに出会ったことがないか、出会いに対して殻に閉じこもることが出来る人間だけが主張できる存在論である。この存在論では、「ある」という資格を与える唯一のものは、「わたしの意識」である。対象の現前が前提となるということすら、客観的な存在論の立場からはじめて言われることであって、自己意識はそのことを軽視する。自己意識は己の誕生をおのれの中で果たすことしか考えることが出来ない。したがって「わたしの意識」が世界に対して持つ優越性は変わることがない。その存在論が描き出すものは、世界に対してふんぞり返っているだけの自己意識が持つ「幼稚で」(内容が貧弱で)「醜い」(善美を見出す根拠を全くもたない)姿だけである。その存在論は自分の貧弱さをさとられないために、ひたすら饒舌となり、根拠づけることもできない善美(倫理)を論じる。

LMコメント

哲学者であるというのに、これだけの意識の軽視も珍しいのではないだろうか？

意識というものは、最高最大の意味での「現在」を置いてはないものである。初めから意識とせず、「人間の意識」という限定つきの表現をとり、「自己意識」⇒「私の意識」と言い換えることにより、ますます意識の矮小化を強調しようとしている。

しかし、人間の意識は、各個人によって私有化される以前に、分有的に与えられるものである。それは、八木の言う、「文明により強奪された土地だが、元来は自然のもの」であるのと同じように、本来は“天然”のものである。それは、各自が自覚している「私の意識」よりもは

るかに豊かなもので、本人に気付かれぬままに各自に及んでいるであろう。

八木がいう「意識」は「自分にとって捉えられた意識」にすぎない。

それ以前の“各自に注ぎ込みつつある、あるいは注ぎ込まれんとしている生きた豊穡な意識”については、あえて無視しようとしているか、全然知らないかのどちらかであろう。

「常識的には」と断ったうえで、「人間の意識は世界の一部に過ぎない。」とし、常識を味方につけようとしているようだ。これは哲学者らしからぬ態度だ。

彼に問いたいものだ。

「言われる通り、意識が世界に含まれるのなら、『意識は世界の一部に過ぎない』とのたまうときのあなたはいったいどこにいるのか？」と。平然と「もちろん世界の中」と答える可能性が高いが、それでは、我々人類はあまりにも救いがないのではなからうか。これ以上の詳細は、後の総括文にて語ろう。

48)「自律による自己意識と個性について」より p250

じっさい、いたずらに自己の善美を求めると、人間は眞実を見誤って浪費と贅沢と虚栄を人間の善美と取り違えるだけとなるだろう。なぜなら自己の善美を求めることは、自己の善美に尽くすことだからである。しかし、自己はそれ自身の内に生来的に善美を持つのだろうか。人間の自己とは、本来、他から何かを受け取るものであり、受け取ることによって自己の内容を豊かにしていくほかない存在である。それゆえ、もともとは空虚でしかない自己の善美を求めると、空虚な自己を外見的に飾り立てるほかに進む道はない。そこにありえるものは浪費や贅沢や虚栄による飾り立てでしかないだろう。それゆえ自己の善美を求めることは、まことに空虚な試みである。(中略)

P252

たとえば近代哲学の良心的代表者ともいえるカントにしても、自律を重視して、自律において自由を基礎づけている。しかし、彼は内容のない自由を内容のない自律に基礎づけているだけである。自由にとって自律が不可欠であるとしても、もともと自己の内に何も持たない人間（人間は外側も内側も、生まれつき裸なのである）が自律しようとしても、実際には空虚の中で徒手空拳の空しさを味わうだけである。

LMコメント-その1

下線部分(LM 付加)を中心に、八木の哀れさを感じないわけにはゆかぬ。

ここにおいて、八木は白昼堂々と生きた人間の空洞化を行う大道人間のように下品である。本当にそう思っているのか？たとえそう思っていないとしても、一体系を構築するためにそのような説明の仕方までしなければならないのか？まことに目的のためには手段を択ばない態

度である。

我々は日常的に「あの人は持って生まれたものがある」などと言う。それは何も身体的なことばかりでも、学習摂取能力、物まね能力の事ばかりではあるまい。「表現せずにはおれないこと」、「主張せずにはおれないこと」を男性は特に強く持って生まれてきているはずだ。そうでなければ、一人一人の性格の違いがあることを説明しきれまい。生まれたての女の赤ちゃんにしてからそうである。

哲学者も陥りがちなこのような偏りは、裁判員裁判を始めた理由を連想させるに十分ではないか？

LMコメント-その2

著者について纏うトートロジー型の文章—

冒頭の「じっさい、いたずらに自己の善美を求めるなら、人間は真実を見誤って浪費と贅沢と虚栄を人間の善美と取り違えるだけとなるだろう。」が、またしてもそれだ。だいたい何事でも「いたずらに」行うならば、ろくな事にはつながらない筈だ。彼自身、非論理的なトートロジーの「いたずらな」な使用が目立ちすぎる。反省を促したい。とにかく大事なことを語っているのだから、それらしい作法を要してほしいものだ。

以上の私の物言いを「揚げ足取り」と受け取る方々も、本書を真摯に受け止めていないのだろう。単に事実を語ることと違い、「真実」や「人前で哲学する」ということは恐怖と立ち向かうことである。読み手、受け手も同じであって、表現が破綻(はたん)しているのを見過ごせば、正確な理解が誤解となり、それ以降の読書は間違った思考の道を辿ることに成り得るのだ。それを私は「幽霊型読書」(おそらく、LM新語)と言う。

もうほかのところで、「この箇所は八木の最弱最悪だ」みたいなことを書いてしまったが、ここは「人間なんてそんな大したものを持って生まれてきているわけじゃない」と、八木が人類を代表してイジケテ見せている箇所である。

最後のところでは“人間には自律なんてもともと不可能”などときっぱり言い切っているのだ。これは哲学者としては公開自殺をしているに等しくないだろうか？

自己の内に何も持たないのが人間ならば、一般人から偉い人々に至るまで—ここは内面的なものに言及を限るが—各方向での才能や真善美につながる表現物も、「自己の善美/人間の善美」に見せかけるためによそから持ち込んだものに過ぎない、と言うことに成ってしまう。

そんなことは決してない、というのがLMの信念であるから言うが、著者の思考機(LM造語)に何か重要な部品が欠落しているから、このような酷いこと、人間や人類に唾を吐くようなことが出来るのだ。

だが、その思考機(LM造語)を飛行機—大切なお客を大勢載せている—よろしく目的地まで飛ばそうとしている八木機長のことを思えば、この後も付き合わない訳にはゆかない。

49) (承前) p252

一方、生態系の善美は多様性の美である。それゆえ、それに尽くす人間は生態系から多様性を学ぶ。生態系は人間に一樣であることを教えるのではない。一見一様に見える生態系の永続性も、個々人の目から見れば、つまり個々人が見る様々な時刻、個々人がいる様々な場所から見れば、ダイナミックに、二度と同じ様相を見せることなく、進展するものである。なおかつ、そこに人間が十分な納得を持って尽くすことができるほどの善美が実現つづけるのを見れば、ひるがえって人間においても、個々人の個性が十分に活かされてこそその善美であることは、自ずから明らかになることである。それゆえ、生態系の善美に尽くすことは、人間一人一人を個性のない人間に育てるのではなく、反対に、人間の個性が発揮される人間を育てるのである。したがって自己意識が求められることが個性の確立に必要であるという考えは、端的に間違った見解なのである。

言うまでもなく、自己意識の追及は不必要であるということをお納得してもらうことは大変困難なことである。なぜなら現代では、自己意識が肥大化して、自己意識によってのみ価値が意識されている。それゆえ自己意識が無ければ、個性の価値は自覚されないからである。他方、わたしが個性と呼んでいるのは、自己意識を強く持たない個性である。つまり一人一人をはたから見れば、それぞれ違うが、当の本人たちはそれを意識していない状態である。なぜなら生態系を重視する立場では、自分自身に個性があることは、特別の価値として受け取られることは無いからである。本来、文明社会の人間が自分の個性を主張するのは、人間同士で価値を認め合うほかに自分の価値をお納得することが出来ないからである。なぜこのようになったかと言えば、生態系の善美に尽くすことが人間の価値ではなくなったとき、人間は、ただ人間にとって約立つかどうか、すなわち人間どうしで互いに役立つかどうか、ということでお互いに価値づけをし合うほかなくなったからである。

LMコメント

ハ木の言うとおり、ほとんど文明一色の現代にあつては、どこでもかしこでも自己主張が盛んで、個性の商品化が激化している。その場合、個性とは外に現れ出たものでなければならぬから、演出が凝らされ偽物が多くを占めることになる。

そこへ持って来て、「わたしが個性と呼んでいるのは、自己意識を強く持たない個性である」という明快なひとことである。この場合は、本人が自己意識を持たず自己を売り込もうとせず相手からの価値づけも気にしないのだから、偽物の個性などあり得ないことになる。そんな

個性に相当するものの最たる例が“ロクリアン”あるいは“ロクリアン的なもの”なのである(これに関してはLMのHP、哲学のページにある「弦楽四重奏曲“無伴奏聴人楽器”」にある解説文に詳しい)。いずれせよ八木は、我々に“人間の非常に謙虚な有り方”を指し示してくれているのだ。

ところで、引用文+LMコメント38)にある通りで、「個体」の説明はここでの「個性」についての明快さと違って不明瞭を極めていた。これは、「個性のない個体はなく、また人間の場合、個体のない個性もあり得ない」ことを想起すれば容易に腑に落ちることではない。

だが、ここで人間と言うものを生態系の一部として考えれば、自分の持つ環境としての役割という線が浮かんでくる。

そこで、「個々の人間は環境としての自覚*を持たねばならない。だから、環境自体としての主体性を持とう!」「己が個性はそのためにこそ重要なのだ!」と、私は八木に成り代わって叫びたいほどの気持ちだが、これを読んで、八木の心境は如何に?!

*については、LM総括文の後に、あるミニコミ紙に載った記事を[参考資料3](#)ご参照いただきたい。

ここより

第3冊(=第3部)

50)「存在論と彼岸世界の認識」より、p30

わたしは生態系存在論を構築する作業の中で、パルメニデスを検討材料としながら、存在論の「ある」は、多くの存在するもののうちで人間が「ある」と発言すべき「ある」であることを明らかにした。存在論が真実の「ある」を探究する学であるという意味は、「ある」と語るべき「ある」を見いだすこと、選り出すことを学として行うことである。そして真実の「ある」は、人間が生きて「ある」ときに、その存在を真実のものにする根拠となる「ある」である。言い換えれば、それは人生の指針となる。なぜなら、真実の「ある」は、善美であり、正義であるから。その「ある」によって考え、行動するとき、そのときはじめて人間の生は、真実となり、善美となる。このとき人間は根源的存在にもとづいて正義であることができるのである。(中略)

p34

すなわち、もしもそれが自然な人間の存在基盤となる対象であるなら、それは「ある」と発言すべき(LM注:この「べき」には傍点が付されている)「ある」である。したがって山川草木は「ある」のである。他方、「不正な道具に過ぎなければ「ある」と発言すべき(同前)「ある」ではない。たとえば、国家は「ある」ものではない。なぜなら、国家は生態系存在論によれば、土地の所有

という不正のうえに成り立つものだからである。それゆえにたとえばこの世界に見間違いようもなく現象しているとしても、国家を守る軍隊は「ある」と言われるべきものではない。すでに述べたように、生態系存在論は自然生態系にもとづく正と不正、善と悪、美と醜を見分けることなしに、何であれ、それが「ある」と決定することはできない。科学がその対象を測定することが出来るかどうかは、まったく根拠にならないのである。自然生態系において正義であってはじめて「ある」と言うことが出来る。(中略)

p38

したがって、もしも自然のなかで進化し、自然のなかで一定の役割を引き受けてさまざまな生物と共生して生きていく人間を見いだして、その人間の生き方を根拠づける存在論を構築するなら、その存在論は、ごく自然な論理的帰結として、人間を絶滅に導く文明から救ってくれる宗教的世界を描き出し、宗教的認識を教えるものでなければならない。わたしはそれをすでに論じてきた。真正の存在論は真実の「ある」を探究するゆえに、善美な世界、正義の世界を見出すものである。その意味で、生態系存在論を見出す認識は、非通俗の認識、すなわち、「宗教的認識」であると言わなければならないだろう。仏教で言えば、仏が行う認識であり、キリスト教であれば、神が行う認識である。すなわち、生態系存在論を構成する存在「ある」を見出す認識は、通俗のものではなく、ある特別なものなのである。

LMコメント

ここまで、八木のことをいろいろ批判してきたが、私LMIによる批判の正しさを、彼自ら赤々と証明してしまっているような個所である。とにかくトートロジーを含んだ重複表現(もつとも、私自身、八木に合わせているうちに重複表現が多くなってしまっていることはわかっているのだが)が目立つ部分だ。だが、それがそれほど厭らしく感じられないのは彼の美德であろう。

おまけに、最後の5行間で「生態系存在論を見出す認識は(中略)仏が(中略)神が行う認識である」ともろに来られては、批判意欲も失せかけるというものだ。

51)「永遠と今」より p70

では、生態系存在論にもとづいた倫理学では、どのような認識が成立するのであろうか。すでに述べたように、自然生態系の中に誕生した人間は、他の生物種への共感に支えられた認識を一般にもつ。自己意識は自分を支えるための補完的意義しか持たない。なぜなら人類は、複雑化した生態系の維持管理のために生まれた生物種だからである。人間はそのために霊的に他の種の生物の現状を理解する。そして必要とあれば手当をする。生態系の方は、その必要が出

てくるときのために、人間を養う。それゆえ、人間は生態系の善美を目指して森の中を巡回する。そして見だされた食料を取って食べる。そこには自己の欲望実現のためになされる行動はなく、生きとし生きるものすべてに対する慈悲がある。

文明社会の人間はこのような人間の活動を見て、かれらは野蛮なだけであり、食料をさがして歩いているだけで何もしていない、と理解する。つまり「動物のように食べ物をあさっている」だけだと見るのである。生態系の維持管理に興味を失った文明社会の人間は、生態系の維持管理の仕事がどのようなものか知らない。そのために文明社会の人間にはその仕事が目に入らないのである。ちょうど、サルやシカを見ても食料をあさっているだけだと見るように。他方、文明社会の人間は、独占的な畑などの維持管理（排他的仕事）には熱心なので、そのような仕事だけを仕事とみなす。そのため文明社会はこぞって排他的仕事を世界に広げ、共生を原点に進化してきた生態系を破壊してきたのである。

自然生態系の中に生まれた人間は生態系の小さな傷も見逃さない。歩きながら必要な措置を施していく。このとき人間が持つ認識は、勸行一如の宗教的認識である。なぜならそれは管理作業と一致した認識であり、自己を無とする基盤を持ち、なおかつ、霊的、・生命的認識だからである。生態系はその部分部分を構成するものすべてが生きている。その全体は、太陽の光と雨風を受けて、ダイナミックに変化する。言うまでもなく人間自らもその生態系の一員である。それゆえ森を観るとき、観ている自分の行も観ているのでなければ、生態系の維持管理はできない。森は箱庭でもないし、ましてや石庭ではないからである。

そして自らを無として生態系の善美を目指せば、ときに食料を手に入れることが出来る。なぜなら生態系は善美となっていくほどに人間の食料となるものを増産していくからである。人間はそのことに感謝しつつ、仕事を続けるのである。言うまでもないことであるが、この場合でも、人間はけっして食料の獲得を目的として生態系の管理の仕事をしているのではない。食料の獲得は作業の間にたまたま訪れる幸運に過ぎない。食料を得る幸運とは、自然が人間を必要とし、人間が自然を必要とすることの現れそのものである。「食」においてすべての生態系の要素が結ばれている、ということは、そのような理由があるからである。それゆえそこには宗教的認識があり、宗教的倫理があり、宗教的至福がある。心身が一体となって善美の実現に向けて生きることが出来る幸福がある。土地を所有するものがないから、土地から排除される人間もいないし、土地に縛り付けられる人間もいない。したがって自由である。食料の提供は自然が行うことであるから、その配分において不正もあり得ない。それゆえ生態系の善美を目指す自然人には、戒律的な倫理はまったく不要である。

LMコメント

これまで何度も繰り返されている、「人類は、複雑化した生態系の維持管理のために生まれた生物種だ」という文言であるが、それは人間の持てる意識を働かさねばならない行為であろう。近感覚、知覚を利かしての分別的作業でもある。「自然生態系の中に生まれた人間は生態系の小さな傷も見逃さない。」という部分がそれに当たる。

ここではどうしても大人の判断力と言うものが無くてはなるまい。

②一方、次の説明部分はどうだろう。「生態系の方は、その必要が出てくるための、人間を養う。それゆえ、人間は生態系の善美を目指して森の中を巡回する。そして見だされた食料を取って食べる」。これでは、人間は自分たちを包み込む環境を信じ込み、毒が含まれているかどうかの警戒心もなしにフグやキノコを食する場合もあるということになる。ただここでの趣旨は、生態系であれ植物であれ神であれ、そういったものを意識の弁別にかけるのではなく、全体として受け入れ信じる姿勢が大切だと言っているのだと理解される。

ここでは、子宮に眠る胎児のようなあり方が要請されている。

もし、ハ木がこの①と②の違いを自覚しているならば、人の行動の上でその二つをどうバランスよく配合するか、ということへの詳しい言及がなければならないが、それが無いではないか？

比喻を使わせてもらえば、つまり①の交感神経と②の副交感神経のバランスをつかさどる自律神経についての説明がなされねばならないのである (cf. 総括P90)。

もっとも、氏に「人類の自律神経」の観念があったならば、この著作は無かった、ということになってしまおう。

(詳しくは総括で述べることにしよう。)

52) (承前) P72

ところでこのような宗教的認識は、また同時に、今現在を長く伸びる時間のうちの一部と見るのではなく、「永遠性を備えた今」と見る認識である。というのも、通俗的世界では世界のうちに見いだされるどれも、自己の欲望を実現するための道具として認識されるので、時間上の「今」は将来にある目的のための手段ないし過程であると理解されてしまう。これに対して認識と行為が一致する認識においては、対象の認識はそこに己の行 (LM: おそらく「行為」のこと) が見いだされる認識であり、そこに善美が見いだされる認識でなければならない。すなわち、目的である善美は、将来にあるのではなく、今現在目の前にしている対象のうちに見いだされるのである。したがって宗教的認識においては、対象は目的であって手段ではないように、対象が現前している今は、目的が出現する将来に向かう過程、つまり時間のなかの一部ではなく、すでに

目的が現前しているときである。ところで、認識の目的となるのは真理である。目的が現前しているのなら、そこに真理が現前している。ところで、真理は永遠性を備えている。それゆえ宗教的認識における今は、つねに永遠性を備えた今なのである。

「今」が宗教的認識においては永遠性を備えている、と言う意味は、「今」において、すでに真理が実現している、ということである。ところで、真理はいつでも、永遠的なものである。なぜなら、いついかなるときにも甲である、というものが、真理だからである。それゆえ、「今」において認識対象が同時に目的であって、真理が実現しているのなら、その「今」は、疑いようもなく永遠性をそなえているのである。それゆえに、仏の認識においてはつねに真理が実現している。したがって仏にとっては、「あるがまま」が真理となる。山は山であり、川は川なのである。ところで、欲望とは、今現に持たないものを手に入れたい、という思いである。ところが仏の認識は、今があるままで、真理という最高のものを手に入れている状態である。それゆえ仏の認識は、つねに真理において安らい、欲望を生み出さないのである。

道元は「現成公安」で、薪が火となっていく認識について、次のように言っている。(中略)

p74

すなわち薪は火となり灰となる。けっして灰が火となり薪となることは無い。しかしこれを見て、薪は薪であって、火は火であり、灰は灰である、ということを見失ってはならない、と道元は言うのである。ものの変化は時間的に起こる。それを見ることは大事である。しかしそればかりに偏して、変化がすべてであると見ることは、物事の本質を見ないことである。物事の本質を知るとは、それ自体を知ることだから、それは不変である。しかしそれを知ることとは、今それが何かを知ることである。いま現に在る状態を見ることである。けっしていま現に在ることから離れて抽象的にそれが何かを知ることではない。それゆえ、それは「今」を「永遠」においてみることである。しかしそれは「永遠」をさきに考えて「今」を考えることではない。なぜなら、それは対象を見ていないことだからである。どこまでも今ある姿を見るうちに永遠（本質）を見るのでなければならない。

さらに道元は、薪が火となり灰となる前途と同じことが、生が死となることについて言えると述べ、それは冬が春となり夏となることと同じであるという。つまり時間の相において前後があって、その前後は変わらないとしても、それを見て一方から他方へ「なる」と見ることは誤りである、という。(中略)

p76

いずれにしろ生は生であり、死は死である、ということが重要である。いす

れも永遠の相において生死を受け取ることが宗教的認識であると述べている。しかし同時に、それは今あるものが生の境地にあるか、死の境地にあるか、という区別を否定することではない。むしろ区別あってこそ、生は生であり、死は死である、という認識が成立するのである。冬が春になるのではなく、世界が冬の状態であって、また春の状態である、ということが、時間の相において不可逆的にある。しかし今が春なら、それは冬が春になったのではなく、春であるということが、この今において永遠的に真実なのである。同じことが冬についても、夏についても言える。同じように生も死も、それぞれ、今において永遠的に生であり、死なのである。

このように宗教的認識は、今眼前にある姿を永遠の相においてとらえる。言い換えれば、変化を不変の相においてとらえる。たしかに変化するものを不変の相でとらえるとは本来の意味での抽象であるが、とはいえ、不変の相に偏して今現在から目をそらすことを否定する意味で、宗教的認識は通俗的抽象認識ではない。すなわち一方では、今現在の変化に翻弄される認識（将来を考えて不安を抱く認識）は宗教的認識ではない。しかし同時に、永遠の相にこだわる認識（抽象してそれを机上で考察する認識）も宗教的認識ではない。このことは、観ることにおいて、観られる側に偏してしまう科学的認識が宗教的認識ではない、ということと同じである。観られるもののうちに観る行為が観られなければならないように、今現在の対象のうちに永遠が観られ、なおかつ、永遠はつねに今現在のうちに観られなければならないのである。繰り返すが、それは変化を見失うことではない。なぜなら、ものごとの前後を見失わずに本質をそれぞれ観ることが、今を永遠から観ることだからである。（中略）

p78

さて、宗教的認識のありようについて論じてきたが、このような認識が生態系存在論に合致する認識である。この認識は、永遠と今を同じ瞬間のうちにとらえ、対象と自己の行を同じ瞬間にとらえ、それゆえに、対象を目的の相においてとらえている。対象を目的の相においてとらえるとは、対象を善美の相においてとらえる、ということである。したがってそれは科学的認識を善美の認識の内に包括する。善美の認識を捨象した科学認識ではない。ところで善美の認識とは倫理認識である。なぜなら善美の認識とは、行為の目的の認識だからである。したがって生態系存在論に合致する認識は、科学的認識であると同時に、倫理的認識である。それゆえ、その倫理がどのようなものになるか、それを以下で記述することにしよう。その際、現代の事情に合わせて、説明は西洋の伝統的な論理にもとづいておこなう。

LMコメント

ここでは、「今」「永遠」「真理」の結びつきが強調されている。また、時に流されない「事象」存在の把握、対象即目的という瞬間による自己充足の意義が強調されている。

だが、迫力不足だ。何かが足りないのだ。ある事柄、観念が持ち込まれなければ、上記はそれにふさわしい絶大な力・機能を持ちえない。

迫力不足の理由は、八木の顔が見えてこないのである。この節は、執筆者の濃く強い存在感がどうしても示されなければならない箇所である。

上記、下線部分を見てほしい。今現在の内に永遠が見られねばならないのなら、今は永遠に属するのだからあくまでストップしていなければならない。動くとか変化するのは現象の方であり、その「対象の内に永遠が見られ」るのは、そこに永遠を覚える主観の投影によるものだ。

ところで、八木の文章に、永遠が効いているだろうか。文章をつづっている時の八木のライブが問われているのであるが、まさにその現場の迫力が感じられないのである（なお、この点については最後の総括にて詳述する）。

53) 思慮ないし知恵-

「信仰という知恵」より P120

さて、神とは何か。それは目に見えない何かであり、偉大なものであり、善美を実現するものである。神がそのようなものであるなら、人間はその意に即して生きるなら、幸福であるに違いない。信仰とはこのように「神の意に即して生きる」ことである。したがって神の意を知らず、神の意に即して生きたいと願うだけで、実際には神の意に即して生きることができないでいることは、真実の意味での信仰とは言い難い。ところが、今日人々は、信仰とは「神の姿を見よう」とすることだと考えている。それゆえに「祈る」ことが信仰の姿であると考え。（中略）

p121

真実には、神を信じるとは神の存在を受け取りながら、神の意を受け取ってそれにしたがうことである。神に祈るとは、己を殺して神の意を聞くことである。

LMコメント:

八木が「信仰という知恵」と言っている以上、信仰を肯定しているのだろう。

「知恵」とは「神の意に即して生きる」ためのもの、という位置づけだ。この書物にはその「神の意」に当たることが書かれている、と暗に明言した上で次のように言っている。「今日人々は」「神の意を知ら」ないままに「神の姿を見よう」として「祈る」ばかりだが、そんなのは

本当の「信仰」ではない、と放言しているのである。

そこには、ハ木本人が植物に何か神的な声のようなものを聞き、植物への関与を通してその声に従って行動することで善美を身に着けてきたし、正義に即した生き方をして来れたという喜びが感じられる。私はそれを“自己満足”(悪い意味での)とは受け取らない。

54) 同上-

「植物と神」より P126

ところで第一部の考察からあきらかになったことを利用するならば、文明社会の人間は自然に対して支配的関係に立った。そして支配するものは支配されるものより偉大でなければならぬために、人間は自然に対し傲慢になるほかなかったのである。ところで、自然に対して傲慢になった人間は、そのために、神の意図を知る際に神から直接知らされることを望み、自然から教えられることを拒否するようになった。つまり神の意を知るために自然からそれを学ぶことが出来なくなったのである。中世において神学者の知見を用いることが出来なくなっていたのも、このことが本当の理由であると推察できる。そして文明が始まって以来、人々は、神の意を自然から受け取ることができなくなったので、預言者に頼ることになったのである。

しかし、人間の脳の働きは自然からこそ最も良く学ぶことが出来るように作られている。それは、神がそのようにしたからである。したがって神から直接に教えられるよりもはるかに良く、神の意図を人間は自然から学ぶことが出来る。わたしはわたし自身の経験からそのように確信している。植物が教えてくれる知恵は神の意図を含んでいる。なぜならそれは、すべての善美を実現する知恵だからである。耳に聞こえない植物の声は、真実には神からの声である。西欧の宗教においても人祖アダムは森のなかに居て神の足音を聞いていた。樹木の陰で神の呼ぶ声を聞いていた。のちの預言者は森から出てしまったために、言葉を伝えることはできても、神を見ることができなくなってしまった。

LMコメント

やはり引用文 53) で私が言った通りで、ハ木は自然を通して神の声を聞いた、としているのである。

それはそうと、後半部の下線部は正論であろう。ベートーヴェンにとっての自然散歩もそういう意味からであったと思われる。

ただ、ハ木がいう「神」は、自然、とりわけ植物を通しての善美な声の発信元であるという役割をも負ってくれる存在、ということなのだろう。

植物との誠実な関わり合いの中で、神々しいと言ってもよいような声や情報を受け得たというハ木のことを、私は真にうらやましいと思う。

だが、ならば、植物たちの主体性、自発性を信じるにとどめ、もし彼女らをコントロールしていた靈験あらたかなものまでも実感できているならば、なにも「神」など持ち来る必要はなく、“植物の持つ母性”あるいは“女神なるもの”とか“地母神”を主役に立て、そのための“信仰哲学”を打ち出した方が論理や文脈もすっきりとし、含むところも真・善美を増し、全体として豊かなものになった可能性があるとするからだ。

(あるいは、八木の信奉者の中から「植物派」と「神派」の両方が誕生するかもしれない。)

総括「ロクリアン哲学へ」(= 総括的批評と主張)

以上、八木雄二のこの著作の特徴を端的につかんでいただくためにどうしても落とせない箇所、並びに私を刺激して持論を爆発させずにおかぬような挑発的な箇所は、大方引用させてもらった。そして、ご覧のとおり、かなり詳しい批判を、時に賛同、中には賞賛さえしている部分も挟みながら書いてきた。それにしても引用量が多いなどと思われる方々もおられよう。

多くした大きな理由の一つに、原書における八木の文章自体がなかなかスローで悠長なものがあり、それは氏の思考のリズムであり、また自己表現のパフォーマンスであると見て、それをここでの読者にもお伝えしたかったからである。植物に対する並々ならぬ感応性を有する八木であるが、これが多少の演出を加えられつつも文章の方での息遣いとしても現れているところが実に大事であり、私が「“生体”解剖」と命名したのも、氏自身の“思考”の生命を私が愛するがゆえなのである。

さて、八木をこの著作へと突っ込ませた衝動は、なんといっても自然の持つ母なる優しさへの感謝であったらうと思う。語られているところも、その奥深く持続的なエネルギーが生態系への熱い思いとなって外へと湧き出ているのだとれば、私も大半について首肯できる、といえる。文明を敵にするために味方として母なる自然を立てた、ということではないだろう。著者はそんな攻撃的な人ではなさそうだ。植物に負けず劣らず、生態系を守りたくて仕方なく、それを滅ぼしつつある文明を敵に回さざるを得なかった、というのが本当のところだろう。

だが、語らんとする心根はもともと良くとも、語り方の良し悪しは別問題である。そっちの方となると、プロの哲学者でもない私が言うのは僭越この上ないが、非常な難がありありであり、たとえ公然とであれ、お互いに血を流し恥を掻きあうことに成ってもこのままにさせておくわけにはゆかない、と思ってここまで文章を書き続けてきた。このままでは、説得力と言う点で本書はいかにも力不足だ。もったいないことである。

昔から、「時間に逆行することはできない」だとか「文明の進歩にあらがうことはできない」といった考えが常識的正論として暗黙裡に働き、八木のような発言は子供向きの絵本以外に発信されているのを、少なくとも私LMは知らない。

哲学する者の“現在”に則っての批判と評価

本書の著者である八木雄二は有名大学で哲学を専攻、博士課程を修了し文学博士の資格も有する。哲学関係とされる著作も多く、世間で歴とした哲学者として認められている人物である。

だが、「哲学することをどけて、哲学は無い」という信念を持つ筆者LMにしてみれば、彼のこの仕事は哲学からは大分離れてしまっているな、というところだ。

何が扱われているにせよ、それが哲学的論考である限り、読者は哲学の現場に立ち会いたいのだ。

哲学の現場とは言葉の厳密な意味での“現在”を置いては無い。

八木雄二は

“現在”にしっかり位置していないから
「わたしたち生命は」などという。

“現在”にしっかり位置していないから
「思考に垂直の緊張とダイナミズムが備わらない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「個性」を論ずることが出来ない。

“現在”にしっかり位置していないから
「死についての洞察が効かない。」“

“現在”にしっかり位置していないから
「万事万象の起点を過去にあるとする。」

“現在”にしっかり位置していないから
「現在と言うものを時間上の移動体としてしまっている。」

“現在”にしっかり位置していないから
「せつかくの“永遠”も肝心の意味を持たない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「“神”概念に実質がこもらない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「言っていることにぶれが生じ、矛盾が発生する。」

“現在”にしっかり位置していないから
「真の自分の思念を発することが出来ない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「自分自身の価値観に則ってしまう。」

“現在”にしっかり位置していないから
「自分自身に対して客観的になれない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「他の哲学者の言葉から一般的な知識まで多用せざるを得なくなる。」

“現在”にしっかり位置していないから
「植物の擬人化を平気でやってしまう。」

“現在”にしっかり位置していないから
「トートロジーが増える」

“現在”にしっかり位置していないから
「文章は重複表現の多用などにより冗漫化し、緊張度が弱まる。」

“現在”にしっかり位置していないから
「論考に個性がにじみ出ない。作品に“異質感”が備わらない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「新しい普遍性の誕生が認められない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「舞台裏が覗けてしまう。」

“現在”にしっかり位置していないから
「“現在”と言うものを“自覚”できない。掴めない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「インスピレーションがなかなか湧かない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「思考範囲に“未来”の参加がない。」

“現在”にしっかり位置していないから
「結果から原因へと遡り、逆にその原因から結果が生まれたと信じてしまう。」
「原因 - 結果の時間系列をうのみにする」

以下、以上のことについて逐一語ることはしないが、ポイントを絞って論考を試みる。

その時、一番大事なことは、私自身が“現在”から離れないことなのだ。もちろん、お客様のために私は“現在の椅子”をたくさんご用意しておいた。出来れば、お座りになってごゆるりと哲学をご堪能頂きたい。なお、中央の豪華な椅子は「主賓、八木雄二氏」のためのものがあります。

注：人にとって、この世への入り口も出口も“現在”であることには変わらない。人はいつ死んでもおかしくない。それは“現在”につながればなしである。

だから、この総括で類出する“現在”は意識にとってのものである。すなわち「意識にとっての“現在”」を略して“現在”と述べさせていたでいる次第である。

ついでに言うと、人の意識と言うものは、とかく自分の元来いるべき場所から離れがちなものだ、ということである。

現在・今・永遠・時間

意識を濁らすものとしての「時間」

人がものごとの本質を論考するとき、それを狂わせる大きな要因の一つとして、「時間」があげられる。なぜなら、通常、現在よりも時間の方を優先しがちだからだ。

時間に対しては、人は次のような感覚を持つ。

主体も客体も、はたまた、宇宙の極微なものから最大宇宙に至るまで、すべていつしよに過去から未来へと運び続ける巨大船のようなものがあり、“今”とはそれに付けられた名前である、と。

「そのような“動く今”」を実感しているという点では万人共通であろう。もちろん、大賢人や聖人も含めてである。

ところで、各々の現象ばかりでなく、“今”の動きまで“感じ取れる”ということは、時間といっしょになって動いたりはしないもの“現在”が、個々人の意識において働いているからである。ところが、普通そのようなことは自覚されていない。ただし、こと哲学しようとする者は“現在”を大いに意識し、ついにはそこにでんと居座るのでなくてはならない。

[本稿では、話を分かりやすくするために、主観における動かない方を“現在”、主観であれ客観であれ動いていると思われる方(ほう)を“今”と名付けることにする。これはもちろん、現在と今の二語が日本語には用意されていることをいいことに、LMがそれぞれに違う概念をあてがったわけであるから、これについて後に一節用意して詳しく説明する。]

“今”“時間”は従
“現在”と“永遠”が主
すると分ってくることもある。

現在というものが時間によって動かされず、むしろ、その時間という目に見えないものまできちんと意識出来るのは、それ(現在)が時間から超然とした永遠に属しているからだ、と。

逆に“今”は、“現在”が動く時間や現象の方に映った“影”に過ぎない。それなのに、その“今”に気がとられているうちに人々は“現在”のことなど忘れてしまうのだ。おそらく、時間概念を持って間もなくのころに、である。“現在”は時間のうちに位置づけることはできない。それは無常の流れとは相いれない。無常の流れの中にいる我々は、動かないものより動くものに気が向きやすい傾向がある。失礼な例かもしれないが、どんな利口な犬でも物が動かなくなるとはなかなか視覚が効かないという。人間の今意識、現在意識の自覚難度差にも、それと同じような原理が働いているのではないか。

しかし、いやしくも哲学をしようとする者はそのようであってはなるまい。もしそうあるならば、自身の哲学に致命傷を負わすことになる。

哲学書というよりも“物語”として素晴らしい本書

この八木の書物は実は初めから終わりまで一貫してそうなのであるが、瀕死のままに、どうか最後まで行き着いている。その苦難の道程を見過ごすことはできなかったので、私による引用量も増え、批判文としてこのような大部のものとなった。こう述べると「総括」冒頭での理由付けとの違いを気にする方もおられようが、これを私自身は複合認識(LM造語)とか両眼認識(LM造語)として自分に許す、というよりも大いに活用しているのである。とにかく、八木の側にも私の側にもいろいろな位相があり、その組み合わせとなれば無数にあるというのが本当のところだろう。ついでに言うておくと、作曲している時には二つと言わずに使いまくる。LM楽曲にポリフォニック(対位法的)な作品が多い所以である。

とにかく、この書物は読むに値するし、存在価値も大きい。

だが、それは決して哲学書としてではない。そうではなくて、「物語」としてである。物語られている事柄は実に多岐に渡る。第一には八木と言う人物についてであるが、自然、植物、生態系、人間、そのほかいろいろな知識が豊富に導入されていて、大いに勉強させられる。その第一の原因は、八木がまぎれもない教養人だからである。

このような言い方をすると、「一体お前は本書を褒めているのか貶しているのか?」「八木を好きなのか、嫌いなのか?」と言われそうであるが、そんなものではなからうと思う。

単純なものであるなら別であるが、この書は複雑な事柄を扱った書である。まともに読めば良い点や悪い点、様々な点が見つかるものである。

キリストは言っている:「汝の敵を愛せよ!」

LMは言う:「汝の味方を憎め!」

また、「愛の反対は無関心だ!」というマリア・テレサ女史の言葉もある。

先を続けよう。

パルメニデスの存在論と

八木の“垂直感の無さ”、など

さて、八木に頼られ、美味しいところを利用されたうえ口実付きで逃げられたパルメニデスであるが、その「ある」を大事にし、その反面「なる」を全然問題にしなかったという姿勢は、作曲家にはすごくわかりやすい話である。

楽譜に書き込まれているものは、大方「音や無音」の時間的位置である。

「なる」となれば、それは聴き手や演奏者の「美的錯覚」を経ての事象である。

しかるに、その「なる」も、音や無音箇所の「ある」があつたればこそその出来事なのである。このような大事なことからこそ、八木が頼って引用したのは当然とも言えよう。

だが、それでも、体系作成上の必要に迫られるなか、「なる」に誘惑されて途中からパルメニデスを捨ててしまう八木はやはり軽薄である。もともと、初めからそのつもりであった気配が濃厚だ。というのも、既存の有力学説を組み合わせるなどして自論の格上げを目指すのは学者の常套手段だからである。パルメニデスから離れる際、八木が申し訳なさを感じるだけの謙虚さがあつたかどうか。堂々“ここから先、パルメニデスを捨てる”と明言しているのだから何をかいわんやである。パルメニデスに限らず権威ある文献の引用は盛んになされ、高さを感じさせる部分は多いが、それは言ってみれば「書架の高さ」のようなものに過ぎまい。その教養は尊敬に値するが、である。

さて、パルメニデスからの離反と大いに関係がある事象として、本書全体における垂直の

無視、垂直への無頓着さが挙げられる。

LMによるL・パルメニデスの「ある」
へのオマージュとしてのメロディー論
なおかつ、

垂直軽視の八木への叱咤激励

物事の質の良さ、人格の高潔さや学問の高度さ、芸術一般やとりわけ音楽の高尚さ等々は何により裏付けられているのか。ここに並べたことはすべて垂直のベクトルに沿った話だ。一般に人間の感受性にはそのようなベクトル「垂直性」が与えられている。俗にいう価値観も、厳密には垂直の測りがなければ存在し得ない。

美しく気品あるご婦人がピアノを弾いている。

奏でられるメロディーに、我々はその人の心の抑揚そのものを感じる(ましてや同じ空間でご婦人の動作に連れ添うような気持ちにもなればなおさらであろうが、そうでなくとも)。

ところが、それは錯覚というものだ。貴婦人は次から次へと、テキストに書かれた順に音を出しているに過ぎない。

時間的に隣り合う音二つをとってみても、客観的には個別のものであり相互に何の関係もないはずである。音の出だしの時点差も、個々の音の長さや空白部分の長さを形成するだけである。それは、貴婦人の動作とは別物だ。いくらならかに鍵盤から鍵盤へと手や指を動かしたところで、入れ代わり立ち代わり新たな音が登場してくるのみの筈。

とすれば、我々聴き手は、聴覚に新しい音が次々に出現してくる、と感じて良いはずではないか。じつさい、音楽の音ではなく日常生活上の雑多な音については、そう感じられることが多い。だが、音楽の音、とりわけ音楽的に出来ている曲に基づくものであれば、過去からの延長、未来将来へと移行しつつある“今”の姿、として聞こえてしまう。聴いてしまう。おまけにそれは貴婦人の手の動きと重なり合う。だから一層美しく、「善美」である。

ここで、八木をはじめとする哲学者にはどうしても認めてもらわなければならないのが、“現在”と“今”との間の落差、高低差-当然のことながら、現在は上、今は下に位置する-の存在とその間の機能、そして、それを可能にする垂直軸と、それを我々が認知できるための内的垂直軸の、これまた存在と機能である。これが分からなければ「哲学的認知症」と言われても仕方あるまい—逆に、科学的視界にはこのことは入って来ようがない。もし、入って来たら、既に科学は別のものに化けてしまっていることになる。

また、“音の高さ”とか“音程関係”という、あまりにも単純な現れ方をする垂直性、しかも、人間聴覚が科学的には周波数でしかない音波の現れを“高さ-低さ”として感受しなおかつ表象する、ということの「素晴らしさ」は、広く知ってほしいことであり、とりわけ八木には思い知ってもらわねばならぬ(もし、そういう素晴らしい働きが人間に与えられていなかったら、音楽はとてでもないがまともな姿を採りえなかったことであろう)。

とまあ、このようなわけで、メロディーというものは、未来から次々といろいろな高さや間隔で飛び込んで来る音の並びであるにもかかわらず、過去から未来へと進んで行くように感じられる美的現象、ということが出来よう。ここで強調されるべきは、受容する側の聴覚意識の持つ様々な働きにこそ、メロディーの成り立ちは依存している、ということである。なお、忘れてならないのは、“現在”からの静かで観照的な眼差し(まなざし)である。これが効いていなければ、上記の美的現象も、「快的現象」(LM造語)と言い換えなければならなくなる。

この辺の事情、もう少し細かく分析してみよう。

音の変化がやたら大きかったり不規則であったりすると、音の羅列感ばかりでメロディー感を持たなくなるが、その反対に、ただ延命するだけのような大人しい音の連なりでは、その都度現出する新音(LM造語)の瞬発力が感じられず退屈なものとなろう。聴いている間にメロディーがどんどん古びて来るからだ。

さて、メロディーというのは音楽の中の音楽なのだから(音楽の3要素の内のリズム、やハーモニーと違い、踊りなどを伴うことなくそれだけで楽しめるのは、まずはメロディーだ)、このメロディーについて語ったことは、もつと総合的で複雑な音楽にも適用可能である。

要するに—ここでは美しい楽曲や演奏ならば現代音楽も含めるが—音や和音や複合音は時点を介して次々にやって来るだけであるが、人はそこに我知らず美的変動を“聴き加えている”(LM造語)ということが出来る。こう考えると、音楽美は幻！L・パルメニデスにしてみれば「ない」のひとことで済ませるべきもので、「そんなものを相手にするのは狂人か愚人だ！」と決めつけそうな気もする。

実際のパルメニデス(≠L・パルメニデス)はどうしていたのだろうか。ハ木の言うように「天上の裁判」という設定に徹底していた大哲学者らしいが、ネットで調べたところ、ドクサ(=臆見、思惑)についての思索もあるらしい。「音楽の魅力は貴婦人の魅力」(LM語録)である。ドクサ(=臆見)の対象、あるいは恰好の相棒として音楽美も認め、あるいは楽しんでいたかもしれないのだ。それどころか、彼が「ある」のイメージを明確にし、それに関する「詩」を物する上で音楽美を利用していたということすら、大いに考えられるではないか。実は私がここに、必ずしも必要のない、この「音楽論」を挿入したのも、パルメニデス・ミメシスを通してパスメニデス・シミュレーションをやってみる為でもあったのである。したがって、L・パルメニデス(ロクリアン・パルメニデスのこと)という仮人(LM造語)を使ったしだいである。

さて、そんなわけで、美的な音楽の元となる楽曲の作曲は、一つには“今”におけるアクロバットの振付師でなければならない。

が、それ以前に、永遠をバックに“現在”という主賓席に座って音楽を鑑賞する大人のお客のために、最上の安定感(=ぶれない感じ)を与える得る音楽のための指示書をもつのが作曲の仕事、簡略化し象徴的に言うならば、「“現在の最上の椅子づくり”こそが作曲

だ」となろう(この意味からは「作曲の横綱:バッハ」の座はいかにも堅い)。

時間芸術の度合いのきわめて高い音楽、における作家であるからこそ、私LMには八木の“現在”離れが目にも余る、と言うわけである。

八木に強調したい

全存在機構の要としての

“現在”というものについて

不動の“現在”に座って時間と言うものを見れば(厳密には、「見下ろせば」)、過去方向では、“今”を起点として発生しては遠ざかりつつある在り方で、未来方向では遠方から近づきつつ“今”を終点とする在りようをしている。したがって“今”と言うのは過去と未来が隣接する激しい境界面なのだ。両者には高さの違いも関わってくるが、これについては後で詳述する(なお、八木の本書では、こういう意味での“現在”あるいは“未来”の両概念は-言葉はどこかで出て来たかもしれないが-不参加のままのようである)。

「わたしたち生命」(cf.引用文 16)などという言い方が現にあるが、「延命」という言葉の存在が示すように、それは過去を起点とするものと見られている。だから、テレビの科学?番組なので、鼠のような生き物をCGで示して置いて「これが私たちの先祖」などとアナンスしたりする(まったく大真面目で失礼なことを公言しているものだ)。ところがそこには「個」はありえない。「生命」などというものは、生き物から「個」を捨象して残りの生命部分を抽象した概念である。取りようによっては実にけしからぬ概念なのである(cf.本稿直後に掲げたLMの新聞記事)。八木はその当たりで大きな見落としをしている。彼は“「食物の物体化」は「生き物の物体化」である”(cf.14)として憤るが、自ら率先して“人間は意識付き生命体でしかない”(cf.11))として人間や生き物から「個」を抜き去るようなことをしているのである。

個(魂)は、鼠からも両親からすらも引っ張っては来られないものだ。なぜなら、それは絶対的な「ある」の拠点である永遠に根差したものでしかありえないからである。歴史の線、あるいは生命の線を水平先とすればもう一方に垂直線と言うものがあり、両方の結び目としてそれぞれの個体が掛け替えのないものとして実現している、と言う理解でよいかと思う(個のない生命に、私は生物としての実在感を覚ええない)。

永遠というのは無限の広さを有するが、決してのっぺらぼうな領域ではなく、最高度の秩序を内蔵していないとは到底思えないが、それではその他は如何にあるか、と言うことについては答えようを知らない。だから、私は以前から「不可知の何様」という概念を本ホームページの別コーナーにもアップロードし、その思考やイメージを作曲にも役立てているのである。

「死」、「死後」について

ソクラテスの屁理屈への反論

LM「それでは、『生きているから生のことを知っている』と言えるのか？」

ここまで「生」「生まれる」の仕掛けについて言及したのだから、「死」「死ぬ」ということについても言及せざるを得ない。そうでなければ、「生き物」「生命体」をまともに扱ったことに成らないからだ。

引用番号22)や23)で、ソクラテスの死に関するすつとぼけた発言が取りざたされているが、「そんな遠回しなことをやっていて無駄なことではないか」とハ木に言いたい。

だいたい、「死んだことがないから死後のことはわからない！」とはソクラテスともあろう者が、普通人のおしゃべり並みのことをぬかすものだ、とあきれてしまう。

そもそも“死んだことがないから死のことはわからない”というのが可笑しい。

それなら、死んでみれば死のことは分かるというのだろうか。

我々は生きているのだから生のことが分かっている、と言えはしない。

我々は生の渦中に入ってしまったている。真ただ中だ。だから生を丸ごと見る、なんてことは出来はしないだろう。

つまり、死について考えるのは今のうちではないか、と思えるのだ。

「聞け！ソクラテスよ、死後のことを真面目に考えろ！」

たとえ死んだことがない、としても、だからわからないとは言いきれまい。

人には想像力というものがあるし、論理性というものもある。死後のことを一瞬も想ったり考えたことがない人というのは、たとえいたとしても極めて少ないだろう。

宗教の影響でも受けていなければ、人々はふつう「死後はなにもない」と想像するものようである。その場合、まさに想像している自分の想像能力を死んだ人にそのまま適用してしまっているらしい。つまり「死人は無に帰すのみ」と思っている時、「死人はその無に関しての体験能力は保持している」という前提の上に乗っているのである。もちろん、ご本人はその前提に気が付かない。

また、「死後は地獄か天国か？」などと思いつたりもするが、これは宗教その他の影響ある場合がほとんどかもしれない。それはともかく、地僕、天国のいずれにしても「死人自身」(LM造語)の主観や意識や感受性は生前と同じ立派に機能していると広く思われているようだ。

さらに、「人は死んだら土にかえるだけ」という言い方もあるが、この世で死に至った人の遺体や灰を見て、それをそのまま「死後の人」の代用品として事足りりとしているとしたら、態度が悪いとしか言いようがない。さもなければ、「土は土。されど、人間は人間」としてどうにも

一つになりようもない両者をイコールで結んでしまうのである。失礼な言い方にはなるが、そのグロテスクな思考、無知な人間性はなんとか改善してほしいものだ。

ハ木が問題視している引用文(26)にあるような“どう考えようと個人個人の勝手”(ネット上に氾濫している言いざま)などと考えるような輩は我々の読者にはいないだろうし、問題外でしょう。ただ、私は、読者の中にも、「土と人間をイコールで結ぶ」ような方々なら少しはおられるのでは、と危惧する。まさしく余計なお世話かもしれないが、私はその方々に申しあげたい。「そのような思考や思い込みは、あなたのかけがえのない意識の透明度や霊性の高さを下げ、もちろん“現在忘却”の度合いを進むに任せることになるからおやめになった方がよろしい」と。

いずれにしても、死後を巡るこれらの考えは、“自分そのものが無であるという状況”が、語る方も聞かされる方もいかに想像しにくいものであるかを物語っている。LMに言わせれば、それは早い話、ありえない想定だからである。「自分が無である」ということ自体、原理的に無理なのである。

ハ木は「パルメニデスの存在論は(中略)『ある』を純粹に探究することを唱えるもの」(第二部p206)としている。と言うことは、そのまま受け取れば、パルメニデスは『『ある』のみとしての『ある』』という無色透明な意味での「ある」概念を設定しているわけである。私 LM には、「だとすると“死後の自分”とて例外でないどころか、もつともその『ある』に該当しやすい事象だ」と思われる。

死後といえども、無など、やはり有り得ないのである。死の瞬間のことを人々は「なくなる」と表現する。これは厳密には「この世からなくなる」と言わなければならないところであるが、まあそれはよしとしよう。

問題は、「なくなる」という事象が、思考に衝撃を与え、その刹那以降も全部「無い」状態が持続する、と思込まれてしまうのだ。「何が?」「自分が無い」状態である。この世に残された人々にとっては死んだ人は死んだまま、即ち無である。ところが本人にとってどうかは別問題である。だったら「あの人はこの世にいない」とは言えるが「あの人自身は(どこにも)いない」などは到底言えない理屈なのである。

それでも、人の頭の中における「死後と無」は世ほど仲が良いだろう。こうやって読んでおられる方々の中にも「死んでしまったら、自分ごと根こそぎ無になってしまうのだ。いつまでも。」という感覚がますます強くなるばかりの方が少なくないだろう。それはもう、トートロジー・デーモン(LM造語)に思考を麻痺させられつつあるようなものなのだ。「無は体験できないし、もし無が体験できるのならば生きている証拠だ。体験された無は実は“有”のことだったのだ!」と言われたって、それはあくまでも、“死や死後を想像するのが困難である”ことが露呈しているだけで、「“死後の有”なんて、ますます遠ざかって行く思いだ」と怒り出さんばかりかもしれない。

答えははっきりしている。人間は死んでも、あるいはこの世に生きているうちでも、「現在」か

らは逃れられないのである(この事実を嫌がる人々の中には、生前の自殺者、あるいは自殺願望者が多く含まれるだろう)。

「現在から逃れられない」ということは、永遠の「ある」から逃避するもへつたくれもない、ということである。なぜなら、現在は永遠に帰属しているものだからである。

(以下、私LMは八木の本書をとおして初めて知った位だから、パルメニデスに言及する資格もないくらいだが、それなら「八木の伝えるパルメニデス」と言う意味で、Y.パルメニデスとして述べさせていただくが)

Y. パルメニデスが無視した「ない」は、時間があつてこそ現れるもので、「なる」もその点同様であろう。Y.パルメニデスは『『ある』の絶対的地平』としてロクリアン正岡語るところの「永遠」と同じようなものを想定していたのではなからうか？(これは読者への質問です。もちろん一番気になる回答者は八木氏ですが、この質問を課題としてどこまでも背負い込んで行っていただきたいと思っております)。

以上、私は「現在」にしっかり位置して論述を進めてきたつもりである。それが哲学の仕事場であり、現場であるからだ。

再び、「現在」と「今」の違いについて

現在は永遠に帰属するがゆえに泰然自若たるものであるが、我々この世のものにとって常に「永遠」とのつながりを保証してくれるものであると同時に、この世へ入りくる際も出でゆく際も通過する門である。したがってこの世は常々、永遠の関与を受け続けている。

一方、この世に帰属しているのは“現在”の陰の方、即ち“今”である。これは構造を持っていてここでは次の二点を強調したい。

過去の出発点としての「それ」と、未来からの終着点としての「それ」とである。

それぞれ「過去の今」、「未来の今」と呼ぶことにしよう。

これはまさしく意識の区分けみたいなのだが、それぞれを比較してみよう。

過去の側については、自分自身の内面についてであれ外界の事であれ、はっきりとした実在感を持っているようである。

逆に、未来側については、自分の内面なら、「未来への意志、志向」など、実在感を伴う部分が確実にある一方、外界についてはそうではない。「まだやって来ていない」「自分にとってはやって来るかどうかさえ定かではない」空虚で漠たる領域であり「これからどうなるだろう？」と問いかけつつ待たなければならない領域でもある。ただ、そう思うとき、意識の主座は「現在」ではなく「今」の方に来てしまっているのである。しかもたいいの場合、子供のころに早々その移行を済ませてしまい、しかもその後、そういった枠組みについては何の変化もないままこの世の生を終える、というのが普通一般のようである(「終生、引き出しの中身のことで精いっぱい」というところか)。

さて、そういう立場で未来側とか「永遠」、そしてまた「現在」の方に思いを巡らすと、次のようなカラクリが捉えられるのではなかろうか。つまり—

「永遠からの未来圧」という新(?)概念の提起

「永遠」の側の何か「未来」から「現在」を通し口として常に噴出している、と言う実感があるのは、果たして私LMだけであろうか。私はそれを「未来圧」(LM造語)と名付けることにこの際決めたが、人々が感じる「神」、あるいは「神の意志」ならなおさらだが、それはこの「未来圧」の事ではなかろうか。

ところで八木のこの著作からは、およそその「未来圧」というものの実感を受け取ることは出来なかった。だから「神」という言葉は使われていても、いかにもよそよそしいのである。氏は、こうして「未来圧」概念を差し出されても、実感は満足には持っただけなのではないだろうか？ということとは「未来」概念についても、私が持つそれとは偉くかけ離れたものではないかと想像される。

たとえば「空白のスペース」であるとか「仮想領域」であるとか、あるいは「それは数学(算数)におけるマイナスみたいなもので、概念運用上、はたまたイメージ活動の為にも便利であり、現実を生きてゆく上でも不可欠のものであるが、ちょうどマイナスの物体が無いのと同じように、時間帯としては実在しない。あくまでも想像内とか鏡の中の存在、つまり仮の存在に過ぎない。それが実在するように感じるのは、今を生きる者にとって必要不可欠な錯覚なのだ。考えてもごらんよ！未来というのは『未だ来ていない』ぐらいの意味だろうが、だからといってその近づきつつあるものが遠くに実在するわけではない」と言った方向の返事が返ってきそうな気がする？「彼自身の意志」を問われても、私のように「未来」に帰属するかのごとき位置づけはしないだろう。「進化圧」にしても、彼は「過去 - 今」の中に納めているものと思われるぐらいなのだから。

本著作に一か所だけ「進化圧」(科学用語)という言葉使用がある。

第一冊(第一部)のP19 引用16)の少し前だが

「なぜなら人類が誕生した頃の自然状態こそが、人類を進化させる進化圧を持っていたと考えられるからである」とある。

ここに「未来」は関係していないようである。

もちろん、私も「過去流」、あるいは「過去からの押し」「過去圧」といったものの存在や働きは、こと進化に限らず、認めている。だがこれは改めて取り沙汰する必要のないほど平凡な見方であろう。また客観的な事象もそれに相応する部分は十分にある。

しかし、この八木批判的論考における「進化圧」という言葉との出会いから、私はその概念もろとも「過去圧」から「未来圧」へと概念をひっくり返すことことに思い当たった。

「進化圧」もその中に含む「未来圧」とは？

こういうことを考えるのは、もちろん未来領域にも実感を持つ人間内面というモデルが

あるからこそである。まさにこれを書きつつあるLM自身がそれである。

繰り返すが、八木へもまた世の中へも広く申し上げたい。

「未来圧」というものがあるということ、はつきりと。

ただし、それは単なるエネルギーではなく、内容を持ったものではなからうか。プログラムと言
い換えてもよい。

「神」についての新しい定義(?)

ただし、桜はバラに成ったり、鹿が狐になったりすることは無いが、世の中の事象は千変万
化。神が齎したごとき「未来圧」「未来導」「将来プログラム」とて、打率が10割をどれだけ
割るか、見当もつかないほどである。

しかし、ここで言いたいことは、決して万事万象を含めた歴史と言うものも、決して次のよう
なものではないということである。

すなわち、「地球誕生以来、更には宇宙誕生以来、“今”までの万事万象をあらゆる角度
から知悉しければ、これからの万事万象が正しく予想できる。」

この意見で決定的に欠落しているのは、未来からの成分が予測資料の中に全然入って
いない、ということである。もつとも既出の万事万象の中に入っていたら、それは“もう”未来か
らの成分“ではない。(なお、「そんな予測を発表すれば、それが歴史の今後に影響を及ぼ
す。」ということにまでは話を広げない)。

八木批判する中での

ロクリアン哲学の顕在化について

以上読んで来られて、「八木批判からLM哲学への移行」を感じられた方々、逸脱感さ
え感じられた方々すらいらっしやるだろう。

だから、私は今、この時点でそうタイトルを現在のものに改める。以前のは「ロクリアン、八木雄二の
哲学を生体解剖する」というものであった。

だが、ロクリアン正岡にとっては、「哲学する」のが常態というか、多くの時間「哲学的傾向」
にあるのだ。

早い話が、私の作曲である。相手は概念を伴わない音楽であるにもかかわらず、作曲のリ
ーダーシップを取っているのは内なる哲学デーモンである。恒常的に根底を支えているのも。
結果を何度も検討するのもそれなのである。

その哲学者は“限りなく「善美」を追求すること”を一番の価値とする。
その判断主体は、「現在意識」である。

それは、自己の主体や主観客観を核とした世界全体、宇宙全体を対象にしつつ、己のバックにある「永遠」を裏切るまいと踏ん張り続けている。

では“バックにしか位置しないLMの背中の如きものである永遠”について言及する時はどうするのか？」と問われれば、その時にはLMの場合、意識の持てる鏡映機能を用いることが多いと答える。なお、そのために、象徴的表現が多くなりすぎるくらいがあることはお断りしておきたい。

また、この大宇宙は「永遠(そのもの)」とは違う。それだけ切り取れば限りあるものである。いかに大きかろうと発生したものはいつかは滅びるのである、ということは忘れるわけにはゆかない。

ただ、「永遠」に関係していないと言え、くどくなるが、そうではない。関係づけている一番のものがいままにこれを書いているLMも同様だが、人間の「現在意識」である。地球人のほかに宇宙人でもいなければ、まさにこれこそ「永遠」からもたらされたこの宇宙内で最も強力な探索機である。内視鏡と言っても良かろう。将来は“「永遠」の栄養剤”の注入といった積極活動もより盛んとなりそう。

だが、この世のほかのものはそのような要素が全然ないかという、私にはどうしてもそうは思えない。それこそ「八木生態系」の主演の面々もそうだろう。理由は簡単で彼女らも「未来圧」を受けているからだ。

更には生命すらもたない有機物から無機物に至るものも、「未来圧」「未来導」を全く受けない訳にはゆかないとすれば、どうであろう。

だが、それでも「永遠」とこの世の落差はあまりにも大きいのである。

そのことに怒り狂いつつも真面目に「善美」に尽くしたのが音楽家で言えば、ベートーヴェンであったのである。

それに比べれば、バッハはこの世と「永遠」との関係を信じてあまりにも泰然自若としているし、モーツァルトは天界、すなわち「永遠の胎児」—この世の音楽語法を徹底的にマスターした点では大人だが—でしかない。

さて、私がどうしてこうも八木生態系三部作に斯くもこだわったか？

一番の理由は、

参考資料のエクスムジカ誌上のLM文にある通りである。

即ち—

生態系論者八木とLMとの共通点

非常な共通点を持っている、ということ。

私も文明化の過程における音楽史上に、その後の音楽の在り方を歪める瑕疵(かし)を認め、そこを何とかしなければということで「ロクリアン正岡」と言うペンネームを名乗ってまでして音楽史のゆがみの是正に乗り出した人間である。それは 1998 年に始まった私一人で続けてきた運動であるが、その数年後に八木雄二という哲学者がこうして立ち上がっているということを知り、深いレベルで持続する喜びをエネルギーとして、氏のこの大部の著作を読み切ることが出来た。今でもこの出会いには感謝している。

氏は、われわれ人類にとっても一番大切な“生態系”を破壊しつつあるものとして、今に至る文明史を批判の上、人類の進む道を文明の中にはなく、生態系の中に見出させようとする。

主張の根拠も似ているし目的も似ていると言える。

だが、一方の当事者としての私LMからすれば、読めば読むほど両者の違いが如何に大きいかを思い知らされた次第である。

LMと八木との違いの析出へ

八木の主張はもう、この“抜粋版”でも読者によく伝わっていると思うので、とにかく私の方の問題提起を叙述させていただきましょう。

まず、そのために、エクスムジカ誌上のLM文を持って来よう。

参考資料 1

季刊エクスムジカ 9/2000 第2号[長木誠司責任編集]

に掲載された〈創作の現場から〉ロクリアンの発想から音楽へ より

ロクリアン (Locrian) とは旋法の名前であり、長調 (ド) や 短調 (ラ〜) と同じように、全音階の一種で、シドレミファソラシから成っている音の組織の事だ。要するに“シ”の旋法なのであるが、主音シが他 (ファ) と三全音を成すので教会旋法から外されて来たものである。

三全音！中世において「音楽の悪魔」とされたこの音程は増 4 度 (例、シと下のファ) や減 5 度 (例、シと上のファ) のことで、その感触が特殊なことは確かだ。かつての西洋人は少なくとも建前として三全音を嫌い、その取り扱いに苦慮した。ちょうど、猫や「女」に対するように。だから西洋人は「酒鬼薔薇」君のことを悪く言えぬ筈だ。聴くところによると中世のペスト大流行の主な原因は長年にわたって猫殺しを続け、鼠が激増したことにあるという。「猫は**魔女**の使い魔 (←化身)」だと。そう言えば魔女狩りも盛んだったり、「イヴが悪魔 (ヘビ) に騙されたため人類が墮落した」との説もあった。ここで突き当たる言葉は“タブー”。広辞苑には次のようにある。

超自然的な危険な力を持つ事物に対して、社会的に厳しく禁止される特定の行為。触れ

たり口にたりしてはならないとされる物・事柄・禁忌。

となれば「猫は居てはならぬ恐ろしいもの」というわけか。ところが今の世の中、洋の東西を問わず猫だらけ、『女』だらけ、三全音だらけである。私見では人間皆元来が三全音好きなのだ。建前からどんなに嫌って見せても溺れる程に大好きなのである。

2015.8.13 時点でのコメント；魔女処刑+猫殺し と ペストの流行について、後者の方が年代的に先行している原因と結果が逆と言う指摘がネット上にあるが、いずれにしても、それら両者が関係づけられている、ということで、LM 文章の本質は損なわれることは無く、そのままここに再掲載した次第。なお、「魔女」については引用文12)を参照のこと。

つまり、

- ① 「ロクリア旋法(以下、音階と言い換える)は他の旋法と違って、自然性が強すぎる。非文明的というか異教的な響きがある、というこの排除の理由である(それに「だいたい歌いにくい!」という西洋僧侶の実感も手伝っていたことだろう)。これは、他の六つの音階は自分たちにとって、文明化するうえで都合がよいから実用の対象とするが、「ロクリアン」は文明化しにくいから外してしまえ、ということになる。
- ② もう一つは、全音階にはせっかく七つの旋法が理論上在り得るのだから、その中の一つをタブーにするということは全音階の、ひいては音楽全体の音階使用に関する自由度を狭めることになる。

以上のうち①については八木の問題と同質のものがある。

だが、②については、実は八木には初めから無い観点であるようだ。

私としては、全音階がもともと持っている自由度を保全しておけば、19世紀終わり、移調や転調が自由自在に使えるようにもなっていた19世紀末、つまりシェーンベルクぐらいの早い時点で音の高さとか音程に関する要素で狭さを感じ、独房からの脱走犯、つまり無調や12音へと技法拡張を行うような者を産み出すことにはならなかったであろう、ということだ。

つまり、私は遅まきながら率先してロクリアンを多用し、また既に使用されているほかの音階や転調等々の中にロクリアンも潜り込ませたり融合させたりすることで、将来の音楽や音楽文化、音楽文明の底辺をより深く、頂点をより高く、水平方向の広さもまし、要するにずっと自由に豊穡な数々の楽曲が齎されるようにしたい、と願うわけである。

②に対比させるに、八木は、生態系と文明と二分して、“生態系を取ろう!”と主張し広

く訴えてかけていると言って良いだろう。“自分はすべての学問の自由を尊重する、発展を期待する”といったことも述べているが、本書は二分法、二者択一で貫かれている。

私の場合は“ロクリアン対その他の音階”ではなく、“既存のものへのロクリアンの参加と全体の豊穡化”が目指すところなのであるから、よく見ると、八木とまったくポリシーの異なることが分かるであろう。

八木は生態系を重んじるがために、「生態系主義者」になってしまった。生態系主義者になっては、その天敵たる憎むべき文明と相対的になってしまい、向こうが滅びればこちらも滅びるのが道理である。一方、ロクリアンはその他の全音階を愛し共存しようとする。

(なお、この7つの音階がそれぞれ全音階において見事、その特性を発揮したり全体として融合したりするさまを、私は「ナナリアン」あるいは「ナナリアンなるもの」と名付けている。私が自分の娘にそう命名した所以である。)

人間の生命がもともと自然、あるいは生態系に属していること、またそれが大を成していた時代が長く続き、今も相対的に小さくはなつたが続いている。

だが、もう一方の文明への道行きも、その種はまだ人間と言えないような段階からあつたものと、私は推察する。ライオンの縄張りへの拘り一つとっても、大変なものがある。人類と違ってそれを長く保持したり拡張できないのは、ひとえに彼らにそれだけの頭がないからであつて、欲望そのものがないと誰が言えるだろうか。

そのような欲望が、まるで生態系を裏切るような形で人間/人類において全開していても、それはやはり必然的な成り行きだ、と私は思う。つまり生態系が閉鎖系でもあると同時に「開放系」でもあり、私の言う「未来圧」(未来導)を受けた結果なのだ。偶然とは思ひ難い。そして今後も両者はなおも戦い、あるいは補い合つて行くであろう。補い合わせるためには、両者の違いにこだわるのではなく、同じ人間、同じ人類の二つの性格だからこそ有するであろう機能を新しく登場させるしかない。

副交感神経と交感神経に触れたところを思い出してほしい。端的に言つてしまえばその両者の調整機構たる自律神経のような働きが、生態系と人間欲との調整役を買つて出る必要がある。ここでは、それを超自律神経と名付けておこう (cf.総括P68)。

だが、それでも、人は皆死んで来たのと同じように「人類体」(LM造語)として、いずれは絶滅する。なぜなら、生を受けたものは死ぬのが道理だし、この世自体が「永遠そのもの」ではないからだ。我々が知る限界あるものと言えれば大宇宙だがそれもいずれ滅びるのである。だが「永遠」を思えば絶望の必要は全くないのである。

もう一度、八木氏へ

“生態系と文明”。これはどう見ても心理学なしには論ずることが出来ないテーマである。また、逆に、心理学的考究が加われば、すでに生態系と文明の二分法はなかつたであろう。両極化は有り得ても、もっと全体の上に立つて、その他諸々の切り口が用意されたは

ずなのである。

八木の著書には、不思議なくらい心理とか心理学の用語が出てこない。

これは、いくらなんでも心理学の事を忘れていたり、“論題はそれらには全く関係のない事柄”と考えていたからではなかろう。今言っていることは私の邪推ではない。それが彼の意図に始まったことであり、なおかつそうやって考え論じているうちに、そのまま突っ走ってしまったものと思われる。

上と同じようなことを思う読者の中にも、だが、著者を憎んだり、著書の全体を軽蔑したりする方々はおられないだろう。

それは、文章の端々からにじみ出てくる彼の持つ善美であり、彼自身、第三部でくわしく述べている「美德」というものであろう。

なお、八木は「個性」（「個」「個体」についても）の事を気にかけている様子はありありだが、満足に位置づけたり意味づけたり価値づけたりできていない。これについては本人も認めることであろう。

私に言わせれば、「個性」とは「異質性」（「異性」だと通らないので）を本質とする。この世にとって異物であるということ。それこそが、「個性」と言うものを考える上での出発点であり、なおかつ終着点であるべきなのだ。

「イチローの個性？」、「何々、それは適性の間違いでしょう」というわけである。

ちょうどよい哲学的評論文があるので、そのまま本論考のすぐ下に打ち直して掲載させていただく。

私はオウム真理教の事件の頃、それに関する様々な文章に接したことがあったが、胸を突くようなものには出会えなかった。「あれらよりはこの文章の方が」と思えるのは、必ずしも「自分自身が一所懸命書いた文章だから」という理由ばかりではないような気がしている。

以上をもって、八木批判に始まる、あるいは「何とも名付けようのない」と言われるであろう哲学的論考を一応終了する。

いままでのLM論考よりも精細の度を増した部分があり、これが八木雄二に執着した結果であることを思えば、八木雄二その人に感謝すべきことではなかろうか、と思う。

なによりも、わがHPの哲学のページにある主論文に出てくる「不可知の何様」のことが、より詳しく分った気分がしているくらいなのだから。

いずれにせよ、この論稿は今後のバージョンアップを俟つものでもある。

八木雄二氏の建設的精神に富んだリアクションを、静かに待つこととしよう。

2015年（平成27年）8月18日 母の命日に

ロクリアン・スタジオにて ろくりあん まさおか

参考資料 2

1995年9月10日

以下、公明新聞（日曜版）、文化欄より

“個性の価値” 忘却の現代

オウムの持つ反芸術的傾向

明記すべき「芸術の核心は個性」

作曲家 正岡泰千代

まさおか・やすちよ

作曲家、カンバス・コンサート主宰。
終戦直後にこの世に生を得る。その
場所が日本だったものだから、父の
付けた名前が泰千代。生来、平和を
大切に思うがゆえに、個性の住み家
としての芸術を理想とする。

現代人は人間の個性というものに価値を認める精神をますます失いつつあるように見える。そんな中、現れ出た麻原彰晃(松本智津夫)を一言で表せば個性の徹底的憎悪者となろう。

たとえば、目的は何であれ薬物の力で人の心を操作するというのは誰の目にも暴力的に映るであろうが、それは人間の自由を奪うからと言う以前に、人の個性の無視、歪曲、破壊、要するに冒とくだからではなかろうか。一般での美容整形はもうなかば市民権を得てしまっているが、この点に関してはあのサリンによる無差別テロとまったく同じはなかろうか。

CM音楽に見る個性の喪失

日々生産されメディアより流される音楽の量はますます増えても、そこに個性があるかと言えば、逆にそんなものは発見しにくくなって来たというのが本当のところだ。テレビを付ければほとんどの番組で音楽が使われていて、中でも十五秒ごとにめまぐるしく切り

替わる CM の連続にあつては、それに合わせて音楽も断片の連続と化し、猥雑そのもの。文化のゴミ捨て場の観を呈している。だが、それは音楽を曲として意識した場合の話で普段は別に気にならない。ということは CM は実際のところ音楽の焼却炉なのではないか。しかも、消臭装置付きの。たとえば、以前から CM によく使われる曲にベートーヴェンの例の第九（特に第四楽章「歓喜の合唱」）があるが、その重厚で個性あふれる曲想と CM との出会いには、芸術的価値云々は別としてもなお唐突で不似合いな印象を拭えない人々がいるようだ。しかし、そもそも音楽と言うものについては、曲、状況、聴かれ方の如何を問わず確実に言えることがある。それは---

人の耳に於いて、音楽は聞こえてくる音としては刺激、聞いている音としては鏡、という二つの機能を果たす。

もちろん、音楽には他の重要な機能もあるのだが、テレビやラジオの背景音楽や CM 音楽にとにかく必要なのは、上の二つの機能なのである。CM では音楽自体が商品の場合は別として、主な情報は言葉と画像が持つ。そういう情報といっしょになった時、音楽がどれだけ快い刺激として視聴者をその情報圏内に誘い込み、なおかつ映りの良い鏡として全体を見せるか、ということが重要になる。第九が良く使われるのは何と言ってもその高い普及度によるもので、だからこそ TV が第九を鳴らせば多くの視聴者において記憶材としての第九も共鳴、上の二つの機能も大きく高まるのである。曲の個性など問題外。CM にあつては人の意識が商品情報等に集中している間、第九であれ効果音であれ、音楽はサブリミナルな領域での活動を命じられ、いわゆるマインドコントロールというものに大きな役目を果たしているのである。テレビだけではない。会社で、工場で、また車の運転中や店での買い物中に、人は別に音楽を聴くともなく聞いたり聞かせられたり。そこへ又、そんな聞かれ方に相応しい音楽が供給され、新曲作りもそれに従うことになる。この、弱く曖昧な耳を求めての無個性な音楽の反乱。交尾することもないまま、雌鳥たちにより生産されては消費されるおびただしい量の無精卵。若い女性たちに常用される、かの排便消臭フード。見た目に良く、飼い馴らされやすいペットたち。お金の代用品としての美術品等々。個性の不毛を示す事象を挙げていったらまったく切りのない現代である。

麻原と大江光の音楽の場合

そのような中、最近話題になっている音楽に麻原と大江光の曲がある。作曲者はいささか特異だが、人々の関心の持ち方もまた特異のようだ。というのも、多くの人々はこの二人に強い先入観を持っており、耳は曲に向けつつも意識は作者に向いたままで、曲は単に刺激として、また、その先入観を映す鏡として使われるだけだからだ。これで曲の個性など正しく問われ得るものだろうか。

もう一つある。それは、麻原や大江の音楽ならば良いに決まっていると信じ、初めから自分の心を極めて従順な受容状態にして聴く、というもの。この場合には、刺激を受ける、つまり聞こえてくるものを身に浴びることで既に大きな快感が生じ、それが他と混ざらず純粋なまま鏡に映されるので、当の曲がよほ

ど逸脱した音でも立てぬ限り、聴き手はいともたやすく陶醉境へ誘われると言うことが起こるのだ。事実、かの元オウム真理教顧問弁護士青山吉伸は入信直前、麻原の音楽を聴いて神秘的な体験をし、それが「オウムへの入信の直接のきっかけとな」ったと聞く。そのような場面で、いったい誰が曲の個性など云々する気になるだろうか。実は私も麻原の曲や大江の曲を聴いたことがあるが、何しろ社会のノイズがうるさくて音楽と真っ直ぐ向き合えるようになるのにひどく苦勞した覚えがある。

個性の要塞としての芸術音楽

このような現実的状况の中、守られるべき、又、求められるべき個性ある音楽とは、表現内容を自らの内に有しうる曲たちの事である。しかるに、それぞれの曲本来の表現内容は、実は鑑賞者との濃密な共生のドラマの中から、その都度誕生するものなのである。

そこでこの肝心なる個性だが、それは決して、いわゆる特徴、他との比較の元に抽出された差異などではない。個性とは、宇宙の中の多くの要素の、それぞれ一回限りの集結、一か所への奇跡的邂逅の産物のことである。一人間でいえば、その人の性格とか人格とかよりもずっと奥の深いところにある、その人が発現する基盤、ここで言っている個性とはそういうものの事である。思えば人類は多くの生き物に対し品種改良を行ってきたし、そのうち人間改造すら合法的にやり出す時代が来るかもしれない。しかし、我々に人間や虫を自分たちの力で作り出せる時が来るとは到底考えられない。それは虫一匹すら生命である前に個性あるものでなければならぬからだ。

個性なくしては、いかなる生命もリアリティが無い。

しかるに、今現在、我々一人一人が既にそれぞれ個性に支えられ、人間で在り得ているという事態は、何という奇跡であり、何という有難い出来事であろうか。個性と言うものへのこの感謝の念が失われぬ限り、社会や文化がいかに個性から離反し続けようとも、音楽をはじめとする芸術から個性が完全に抜け落ちてしまうことは無いであろう。なぜなら、個性からの離反に抗する本能は、やはり芸術家に於いて一番強く働いている筈だからである。

正に、芸術の核心は個性である。

LMコメント 49) のための

参考資料 3

週刊 東興通信 (現 タウン通信) 2007年2月14日

環境自身としての主体性を持とう！

見出しの標語は私の発案によるものだ。私は環境問題を語る時、”西東京市の粗大ごみ”と自己紹介するのを常としている。自分自身の事を環境の一部だと思っているからだ。だが、環境とは不思議なもので、我々の周囲のすべてがそうである筈なのに、その中の物でも人でも空気でもどれでもよい、「これが環境の一つだ」といって指差した途端、それ自体はあれど、”肝心の環境”は消え去ってしまう。そこで”コペルニクス的転回”よろしく自分自身の方を「もしや環境ではないか？」と息を殺して窺（うかが）って見れば、そこに余分な図体が何も知らずに居座っているのが見えて来たのだった。

世間は「地球にやさしく」などとカッコイイ言い回しをして、人々の意識を”人間抜きの環境”の方へ向けさせようとしているが、温暖化をはじめとする地球環境の悪化は、一口で言えば過剰な人口によるものだ。それは、動物並みの強い生存本能が高い知能を駆使した結果に他ならない。他の生物と地球の事を考えたら、人間が地球から撤退するのが一番だが、それでは人間自身にとって元も子もない。そんなところから、私に、「人間誰しも環境そのものである」との認識が生まれたのである。環境としてみれば、我々は常に空間を占めることで家の中でも車内で道路上でも邪魔な物体であり、36度の熱を発生し二酸化炭素を吐き出すなど、土台、“負の存在”だ。誰でも、他の人、生物、物体、地球などの周りの環境に迷惑を掛けなくして、人々や社会のために貢献することさえも不可能なのだ。人類は地球温暖化と言う生命存続の危機を招くことなくしてこのように文明を発展させることは出来なかったのであるから。

自分自身が環境の負の分子だという当然の自覚が深まれば深まるほど、自分自身や身の回りから地球全体の将来へ向けての洞察の視線はより鋭くなるとともに、環境の悪化を抑えようとする意志もより強固となり、会うことは出来ぬ我々の子孫の喜ぶ笑顔をより強く信じる事が出来、それは今を生きる我々に希望と勇気を与えてくれるに違いない。

それでも、あなたの「”私”は環境なんかじゃない！」と言う思いは崩れないかもしれない。だが、上記の標語を何度も読み返してほしい。「人間は環境自体だ」と言う前提に、何か自分が無化されたような不安が生じたとしても、その刹那、「主体性を持つ」と言葉が救いにやって来ているのではないか。その時、あなたの掛け替えのない、”自分自身”が、地球環境の将来という大きなものを相手取る力強きものとして復活するとすればどうだろう。それこそ真のグローバル（グローバル+ローカル）意識の誕生と言うものではなからうか。

ロクリアン正岡 作曲家、東大農場の緑を残す市民の会会員 61歳)